

令和 4 年度
文化芸術による子供育成推進事業に関する調査研究
報告書

令和 5 年 3 月
三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社

目次

第1章 背景・目的	5
1. 目的	5
2. 調査の背景	5
3. 調査の構成や対象者	6
4. 調査期間	8
5. その他調査上の留意点	8
第2章 学校向けアンケート調査	9
1. 学校向けアンケート調査 実施概要	9
2. 学校向けアンケート調査結果のサマリー	11
3. 調査結果	14
第3章 児童・生徒向けアンケート調査	71
1. 児童・生徒向けアンケート調査 実施概要	71
2. 児童・生徒向けアンケート調査結果のサマリー	73
3. 調査結果	75
第4章 学校向けヒアリング調査	101
1. 学校向けヒアリング調査 実施概要	101
2. 学校向けヒアリング調査結果のサマリー	103
3. 調査結果	106
第5章 まとめ	113

第1章 背景・目的

1. 目的

文化芸術は、豊かな人間性を涵養し、創造性と感性、コミュニケーション能力など、人間にとって重要な資質を形成する。とりわけ、子供たちが文化芸術を鑑賞・体験することは、豊かな「創造力・想像力」の育成に大きな効果があることから、文化庁は、義務教育期間中に、子供たちが文化芸術の鑑賞・体験ができるような環境を整えることを目指している。

本調査研究では、過年度調査（令和3年度「文化芸術による子供育成総合事業に関する調査研究」等）を踏まえつつ、全国の小学校・中学校における子供の文化芸術の鑑賞・体験機会の状況について継続的に把握する。

また、学校における芸術教育の今後の方向性を検討するにあたり、学校の芸術教育カリキュラム内で実施する芸術団体・アーティスト等による文化芸術の鑑賞・体験機会の実施概要（実施内容、実施方法・体制、実施にあたっての工夫等）を把握する。さらにその中で得られた好事例を広く他の小・中学校等の参考になるよう取りまとめる。

2. 調査の背景

文化庁では、文化芸術を鑑賞・体験することを通して子供の豊かな「創造力・想像力」の育成につなげることを目的として、これまで、子供が文化芸術の鑑賞・体験機会を義務教育期間中に享受できる環境整備に取り組んできた。また、「文化芸術の振興に関する基本的な方針－文化芸術資源で未来をつくる－（第4次基本方針）」では子供のコミュニケーション能力の育成が重点的に取り組むべき点として明記される等、文化芸術の果たす役割だけでなく、芸術教育の果たす役割への期待も高まりつつある。

このうち、文化芸術の鑑賞・体験機会については、文化審議会・文化政策部会第19期において文化芸術推進基本計画の進捗評価として文化芸術推進基本計画（第1期）中間評価報告書（案）が示され、そのなかで、本調査におけるアンケート結果（子供たちへの創造性への寄与）も採用されている。このように、国内において、文化芸術の鑑賞・体験機会の実態や効果について可視化する必要性がうかがえる。

他方で、新型コロナウイルス感染症の影響により、学校の長期休業による影響だけでなく、文化芸術施設等の休館や利用の制限、長距離移動の制約等に伴い文化芸術の鑑賞・体験機会が減少している可能性が考えられる。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大以前から、学校の立地する地域特性（例：最寄りの芸術文化施設等と離れている等）や学校規模によって、文化芸術の鑑賞・体験機会にばらつきがあり、この機会のばらつきが新型コロナウイルス感染症の影響により深刻になっていることも懸念される。

3. 調査の構成や対象者

上記の背景を踏まえて、本調査研究においては、以下の調査を実施した。また、本年度よりアンケート調査は学校向けアンケート調査と児童・生徒向けアンケート調査に分割して実施した。

(1) 学校向けアンケート調査

①実施概要

全国の小中学校における文化芸術活動の鑑賞・体験の実態を把握し今後の施策検討の基礎情報として学校向けアンケートを実施した。また、芸術文化活動を実施するに当たって、学校における新型コロナウイルス感染症の影響と対応策についても把握する。

②調査対象

全国 6,988 校¹を対象にアンケート調査を実施した。小学校・中学校合計で 2,539 校 (36.3%) (内訳：小学校：1,339 校 (38.3%)、中学校：1,163 校 (33.3%)、その他・無回答：37 校) から回答を得た。

(2) 児童・生徒向けアンケート調査

①実施概要

全国の小・中学校における文化芸術活動の鑑賞・体験の効果について児童・生徒本人の実感を把握するため、児童・生徒向けアンケート調査を実施した。

アンケートの対象者は文化庁「文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）」を利用した学校の児童・生徒とし、巡回公演事業の直後にアンケート調査を実施する形とした。

アンケートでは、児童・生徒の、巡回公演事業以前の文化芸術に関する興味関心の状況や、文化芸術に関する活動の実態について把握したうえで、巡回公演事業の感想及びその時点での文化芸術に対する意識について尋ねた。

児童・生徒から直接の感想を尋ねることで、「文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）」の効果について把握を行う。

②調査対象

対象校 10 校（内訳：小学校：5 校 中学校：4 校 義務教育学校：1 校）の生徒として、回答は小学生・中学生合計で 1,201 名（内訳：小学生：237 名、中学生：963 名、その他・

¹ 各市区町村（1,747 団体）の管轄内の小学校(最大 2 校)及び中学校(最大 2 校)を対象

無回答：1名）とした。

（３）学校向けインタビュー調査

①実施概要

インタビュー調査を通じて、カリキュラムと紐づけるなど教育活動の質を向上させるための工夫を実施している事例の把握・分析を行う。（１）及び（３）の調査を通じて、学校の立地する地域等によらず全国で文化芸術活動の鑑賞・体験機会が少しでも増加するためのヒントや、より高い教育効果を得るための工夫の視点を得ることを目指す。

②調査対象

インタビュー調査の対象校は、文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）の令和４年度参加校のうち、文化芸術による子供育成推進事業事務局との協議を通じた調査対象８校と、「第２章 学校向けアンケート調査」で実施したアンケート調査の回答校のうち、令和３年度に文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）を実施している学校から調査対象１校を抽出し実施した。

図表 １-１ 調査対象校の選定基準及び対象校一覧

対象・選定基準	対象学校名
○令和４年度参加校からの抽出校 【選定基準】 必須項目：複数年度事業実施していること（中止になったものなどは除く）、教科紐づけを行っていること 優先項目：評価コメント、保護者や地域への開放状況 バランスで勘案する項目：地域、小中（参加学年）、演目	坂井市立兵庫小学校
	塩竈市立第二中学校
	小山市立絹義務教育学校
	舞鶴市立中筋小学校
	広島市立城山中学校
	新見市立高尾小学校
	光市立塩田小学校
	甲州市立松里小学校
○アンケート調査からの抽出校 【選定基準】 必須項目：「文化芸術における子供育成総合事業」を令和３年度実施していること 優先項目：同事業により期待される効果の内容とコメント バランスで勘案する項目：地域、小中、演目	坂井市立兵庫小学校
	熊本市立東野中学校

4. 調査期間

調査は令和 4 年 10 月 19 日から令和 5 年 3 月 31 日まで実施した。

5. その他調査上の留意点

調査に当たっては、令和 4 年度については、文化芸術による子供育成推進事業に関する調査研究を調査対象としたが、本調査では最大で過去 5 年前についても尋ねている。平成 29 年度・平成 30 年度「文化芸術による子供の育成事業」、令和元年度～令和 3 年度「文化芸術による子供育成総合事業」を対象に調査を実施した。

第2章 学校向けアンケート調査

1. 学校向けアンケート調査 実施概要

(1) 実施目的

全国の小・中学校における文化芸術活動の鑑賞・体験の実態について、地方公共団体や小中学校などの事業主催団体ごとに、その実施状況を把握する。

また、量的な充足状況に加えて、提供される文化芸術事業の質的な側面も検証するため、子供の文化芸術鑑賞・体験事業の具体的な内容や乗り越えるべき課題の整理、その解決に向けた取組の方向性を検討する際の情報を整理・把握する。

加えて、新型コロナウイルス感染症が国内外の小・中学校における文化芸術活動の鑑賞・体験機会に与えた影響を把握した。

(2) 調査方法

調査方法は以下のとおりである。

図表 2-1 調査方法

項目	内容
調査対象数 (a)	全体：6,988 校 ² 〔内訳〕 小学校：3,494 校 中学校：3,494 校
有効回答数 (b) 回答率=(b/a×100)	全体：2,539 校 (36.3%) 〔内訳〕 小学校：1,339 校 (38.3%) 中学校：1,163 校 (33.3%) ※その他・無回答：37 校
調査方法	・ 本調査は、インターネットアンケートを用いて実施した。調査票の配布方法は、都道府県に対しては直接送付し、市町村に対しては都道府県を通じて送付した。 ・ また、学校に対しては、各市区町村が管轄内の小学校・中学校 2 校ずつ（文化庁事業を実施したことがある小学校・中学校 1 校ずつ、実施したことがない小学校・中学校 1 校ずつ。ただし、小学校・中学校が 1 校しか置かれていない自治体については 1 校のみ）を選出し、調査票を送付した。
調査期間	令和 4 年 12 月 2 日（金）～ 12 月 26 日（月） ※アンケート回答の留め置き期間は令和 5 年 1 月 31 日（火）までとした。
調査項目	1. 子供の文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況の把握 ・ 義務教育期間中の子供の文化芸術鑑賞・体験の量的な充足状況を検証することを目的に、子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験に係る事業の実施状況（実施主体、芸術分野、参加学年、参加人数、開催日数等）を把握する設問を設けた。 ・ 質的な側面を検証するため、子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験に係る事業の概要（事業名、事業概要、事業に用いた授業時間、事業実施

² 各市区町村（1,747 団体）の管轄内の小学校(最大 2 校)及び中学校(最大 2 校)を対象

項目	内容
	の工夫等）を把握する設問を設けた。 2. 新型コロナウイルスによる影響の把握 ・ 新型コロナウイルスによる文化芸術事業への影響について把握した。 3. 文化芸術鑑賞・体験事業の実施・継続意向 ・ 子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験の更なる展開方策を検討するため、文化芸術関連事業の継続的な実施意向や、継続するために必要な事項等に関する設問を設定した。 4. 文化芸術活動の質向上（効果的・持続的な実施）のための工夫 ・ 文化芸術鑑賞・体験事業を実施する際や、芸術教科の授業を行う際の、質向上（効果的・持続的な実施）のための工夫について把握した。 ・ 個別事項として、ICT の活用や教科横断的な学びの有無について尋ねた。 5. 文化芸術活動の効果認識 ・ 文化芸術鑑賞・体験事業の事業評価や芸術教科の授業評価での成果指標や文化芸術活動の児童・生徒への効果について把握した。 6. 文化庁「文化芸術による子供育成総合事業³」について ・ 「文化芸術による子供育成総合事業」の実施状況、同事業の利点・効果について尋ねた。
調査結果をみる上での注意事項	・ 本文、表、グラフなどに使われる「n」は、各設問に対する回答者数を指す。 ・ 百分率（％）の計算は、小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで表示している。したがって、四捨五入の影響で、％を足し合わせて100%にならない場合がある。 ・ 本文中の％の小計は、各項目の値を四捨五入した上で足し合わせている。 ・ 本文、表、グラフは、表示の都合上、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。 ・ 回答者数が30未満の場合、比率が上下しやすいため、傾向をみるにとどめ、本文中では触れていない場合がある。 ・ 属性別の傾向をみるためにクロス集計を行っている。クロス集計の属性のうち、「合計」は単純集計の値と一致する。

³ 令和3年度の事業に関する調査であるため、当時の事業名で調査を実施した。（以下、同様）

2. 学校向けアンケート調査結果のサマリー

(1) 文化芸術鑑賞・体験機会の提供状況について

令和3年度の小中学校における文化芸術鑑賞・体験機会を提供する事業の実施状況は、小学校で約5.5割、中学校で4割弱、全体で5割弱であった。この割合は令和2年度に3割強にまで落ち込んでいたが、令和3年度には5割近くに回復した。

- ・ 令和3年度に、文化芸術鑑賞機会あるいは体験機会が提供された割合は、全体で48.1%、小学校で56.3%、中学校で38.3%であった。
- ・ 過年度調査と比較すると、令和2年度に33.6%にまで減少した文化芸術鑑賞機会あるいは体験機会が提供された割合が、5割近くに回復した。なお、令和元年度は56.2%、平成30年度は66.1%であった。

【※以降は詳細について回答のあった事業について】

- ・ 実施主体は「学校」が3.5割強、「市区町村」が2.5割弱、「国」が2割弱となった。
- ・ 費用負担は「国負担」及び「市区町村負担」が3.5割程度、「学校負担」「都道府県負担」「保護者負担」がそれぞれ1割程度という結果であった。
- ・ 芸術分野としては、オーケストラや演劇が2割程度、邦楽が1割程度で相対的に割合が高い。
- ・ 実施学年について、小学校では学年が上がるほど実施率が上がっているが、中学校ではいずれの学年でも7～8割の実施率であった（ただし相対的には3年生がやや実施率低い）。
- ・ 用いた授業時間としては、小学校では「音楽」「総合的な学習の時間」「特別活動」の順で、中学校では「総合的な学習の時間」「音楽」「特別活動」の順で割合が高い。
- ・ 効果的・持続的な事業実施のために行った工夫としては、「芸術教科のカリキュラムへの位置づけ」「外部の団体・アーティストを招聘する際の事前打ち合わせ」の割合が高かった。

(2) 新型コロナウイルス感染症の影響

新型コロナウイルスの影響を踏まえた対策・工夫については、各校において対応が多様であるものの、実施規模の縮小や、ワークショップなどの体験・交流機会の削減を挙げる学校が多かった。公演回数を分けることにより、生徒の体験機会を減らすことが無いよう工夫する例も見られた。

- ・ 新型コロナウイルス感染症の流行に対し、どのような対策・工夫を行っているかを尋ねたところ、「その他」が最も割合が高く、次いで「対象児童・生徒を小規模にすることで実施した」、「ワークショップなどの体験・交流機会を減らし、鑑賞のみで実施した」となっている。
- ・ 「その他」を回答した学校においては、マスク着用や、生徒間の距離の確保、換気の徹底といった基本的な感染対策の徹底に関する記載が多かったものの、「公演回数を2回に分けた」、「全校一斉ではなく、学年別に3回実施した」など、公演回数を分けることにより、感染対策を行いつつ、多くの生徒に体験機会を提供する工夫を実施する例も見られた。

（３）文化芸術鑑賞・体験事業の実施・継続意向

子供を対象にした文化芸術関連事業の実施・継続意向について、大半の学校が実施・継続したいとの意向であった。

- ・ 子供を対象にした文化芸術関連事業の実施・継続意向について尋ねたところ、「実施・継続したい」の割合が最も高く 72.9%となっている。次いで、「実施・継続したいが、このままでは難しい（21.8%）」、「実施・継続したいと思わない（3.5%）」となっている。
- ・ 子供を対象にした文化芸術関連事業の継続的实施に必要なことについて尋ねたところ、「実施にあたっての十分な予算が得られる」の割合が最も高く 78.5%となっている。次いで、「実施にあたっての十分な体制が得られる（58.3%）」、「実施にあたっての十分な施設が整備される（24.1%）」となっている。
- ・ 子供を対象にした文化芸術関連事業を実施する上での文化庁に対する要望について尋ねたところ、「大きな助成がある補助事業の充実」の割合が最も高く 43.2 %となっている。次いで、「少額でかつ確定検査などの負担が少ない補助事業の充実（37.4%）」、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加（32.3%）」となっている。

（４）文化芸術活動の質向上（効果的・持続的な実施）のための工夫

文化芸術事業について ICT の活用を行っている学校は 57.1%であり、昨年度と比較して大きく上昇している。

- ・ 文化芸術活動の効果的・持続的な事業実施にあたっての課題について尋ねたところ、「実施にあたっての十分な予算がない」の割合が最も高く 56.6%となっている。次いで、「実施にあたっての十分な体制がない（37.6%）」、「地域内外の文化芸術団体・アーティストとのネットワークが確保できない（22.0%）」となっている。
- ・ 文化芸術活動を行う際に ICT を活用する割合は、57.1%であり、昨年度（25.8%）と比較して大きく上昇している。
- ・ 文化芸術活動と芸術教科以外の教科との間での教科横断的な学びへの取組状況について尋ねたところ、「実施していない、また実施する予定はない」の割合が 58.3%と過半数を超えた。「実施している」割合は 24.9%、「実施する予定である」割合は 16.5%となっている。

（５）文化芸術活動の効果認識

文化芸術活動による効果としては、文化芸術への親しみが醸成されること、より豊かな創造性や感性が育まれるなどの意見が見られた。

- ・ 文化芸術活動を通して得られる文化芸術への関心等の効果について尋ねたところ、「文化芸術への親しみが醸成される」の割合が最も高く 87.0%となっている。次いで、「より豊かな創造性や

感性が育まれる（83.0%）」、「芸術科目への理解が深まる（58.1%）」となっている。

- ・ 特に、文化芸術活動を通して得られる非認知能力や well-being、QOL 等の効果について尋ねたところ、「幸福感、生活満足度（well-being）が向上する」の割合が最も高く 65.2%となっている。次いで、「生活の質、心身の健康（QOL）が向上する（46.1%）」、「コミュニケーション能力が高まる（39.8%）」となっている。

（６）文化庁「文化芸術による子供育成総合事業」について

文化庁「文化芸術による子供育成総合事業」を利用する利点として、文化芸術への興味関心の醸成や、質の高い芸術の鑑賞機会の確保、費用負担の軽減といった利点が挙げられた。

- ・ 学校が「文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）」を利用することで得られる利点について尋ねたところ、「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる」、「文化芸術事業に係る自主経費が十分でなくても、公演団体・アーティストを招へいすることができる」、「学校や地方公共団体が実施するよりも、幅広い分野の公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる」、といった効果を挙げる学校が多い。

（７）学校における文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況の試算

- ・ 令和３年度時点の学校における文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況について、中学校で 29.6%（約 96 万人）、小学校で 39.0%（約 243 万人）という試算となった。
- ・ 試算の数値は令和２年度において落ち込んでいたが、令和３年度は令和元年度の水準に近い数値に回復した。

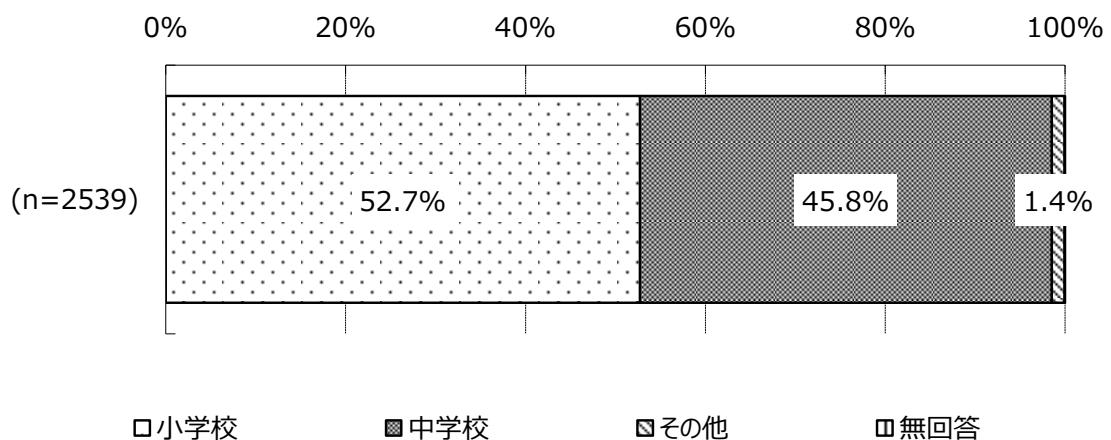
3. 調査結果

(1) 団体属性について

① 団体種別

回答者の団体種別をみると、「小学校」の割合が最も高く 52.7%となっている。次いで、「中学校（45.8%）」、「その他（1.4%）」となっている。

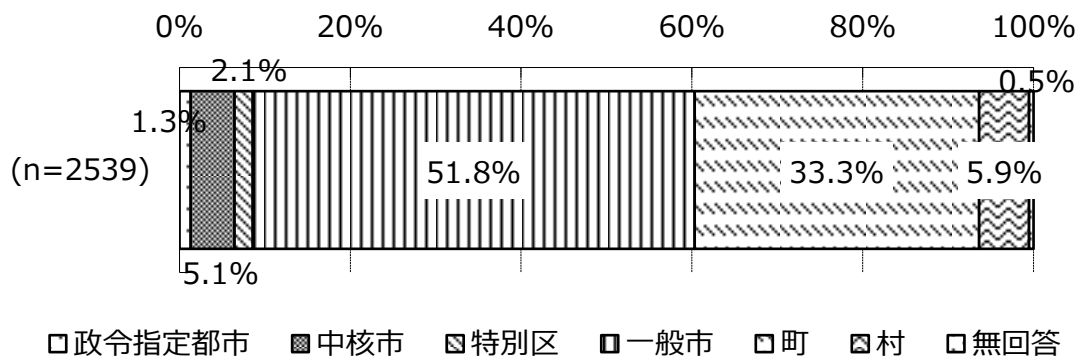
図表 2-2 団体種別（単一回答）



② 所属する自治体の団体種別

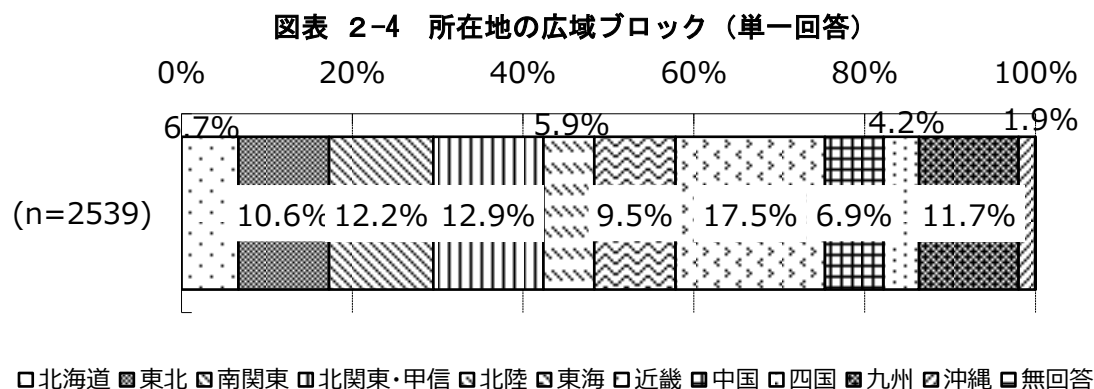
「一般市」の割合が最も高く 51.8%となっている。次いで、「町（33.3%）」、「村（5.9%）」となっている。

図表 2-3 所属する自治体の団体種別（単一回答）



③所在地の広域ブロック

「近畿」の割合が最も高く 17.5%となっている。次いで、「北関東・甲信（12.9%）」、「南関東（12.2%）」となっている。



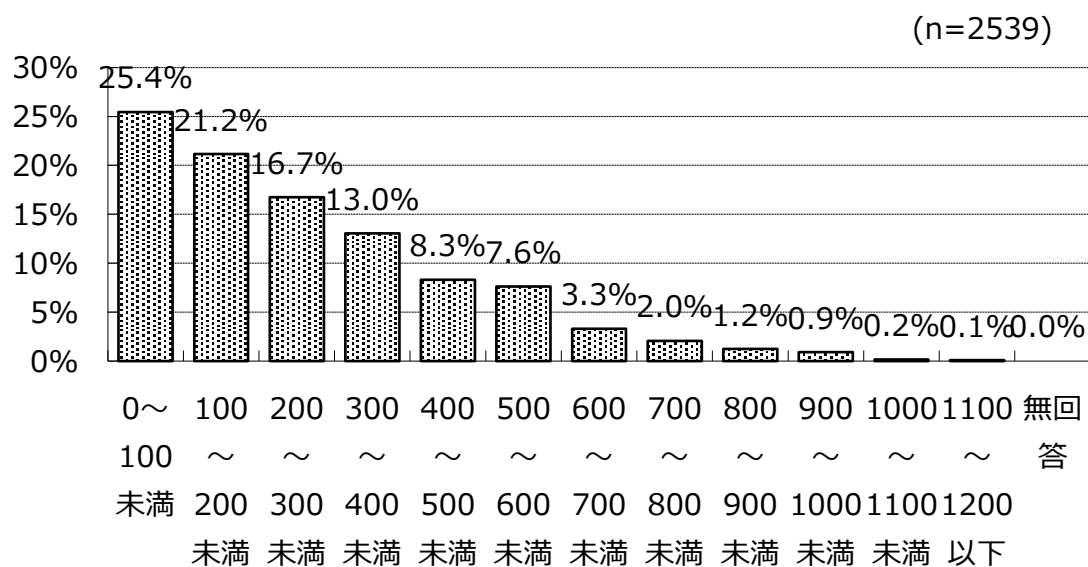
図表 2-5 広域ブロックと該当する都道府県の対照表

広域ブロック	対象とする都道府県
北海道	北海道
東北	青森県, 岩手県, 宮城県, 秋田県, 山形県, 福島県
南関東	埼玉県, 千葉県, 東京都, 神奈川県
北関東	茨城県, 栃木県, 群馬県, 山梨県, 長野県
北陸	新潟県, 富山県, 石川県, 福井県
東海	岐阜県, 静岡県, 愛知県, 三重県
近畿	滋賀県, 京都府, 大阪府, 兵庫県, 奈良県, 和歌山県
中国	鳥取県, 島根県, 岡山県, 広島県, 山口県
四国	徳島県, 香川県, 愛媛県, 高知県
九州	福岡県, 佐賀県, 長崎県, 熊本県, 大分県, 宮崎県, 鹿児島県
沖縄	沖縄県

④令和３年度時点の全生徒・児童数

令和３年度時点の全生徒・児童数は「0~100名未満」が最も高く 25.4%となっている。
次いで、「100~200名未満(21.2%)」、「200~300名未満（16.7%）」となっている。

図表 2-6 令和３年度時点の全生徒・児童数（単一回答）



(2) 子供の鑑賞提供・体験機会の提供状況について

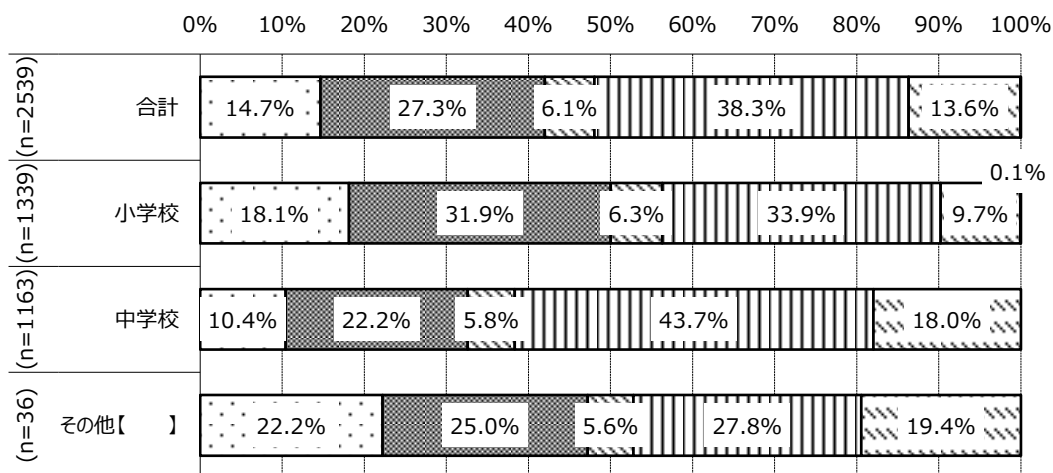
①令和3年度における子供の鑑賞提供・体験機会の提供状況

1)全体・学校種別

令和3年度における、子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験機会を行う事業の実施状況をみると、「実施されていた」（選択肢「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」、「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」、「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答する割合の合算値）は、「合計」で48.1%、「小学校」で56.2%、「中学校」で38.4%であった。

なお、「過去に1度も実施されたことがない」と回答する割合は、「合計」で13.6%、「小学校」で9.7%、「中学校」で18.0%であった。

図表 2-7 令和3年度における子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験機会の提供を行う事業の実施状況（単一回答）



□文化芸術鑑賞機会および体験機会のどちらも実施されていた ■文化芸術鑑賞機会が実施されていた

■文化芸術体験機会が実施されていた

□以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった

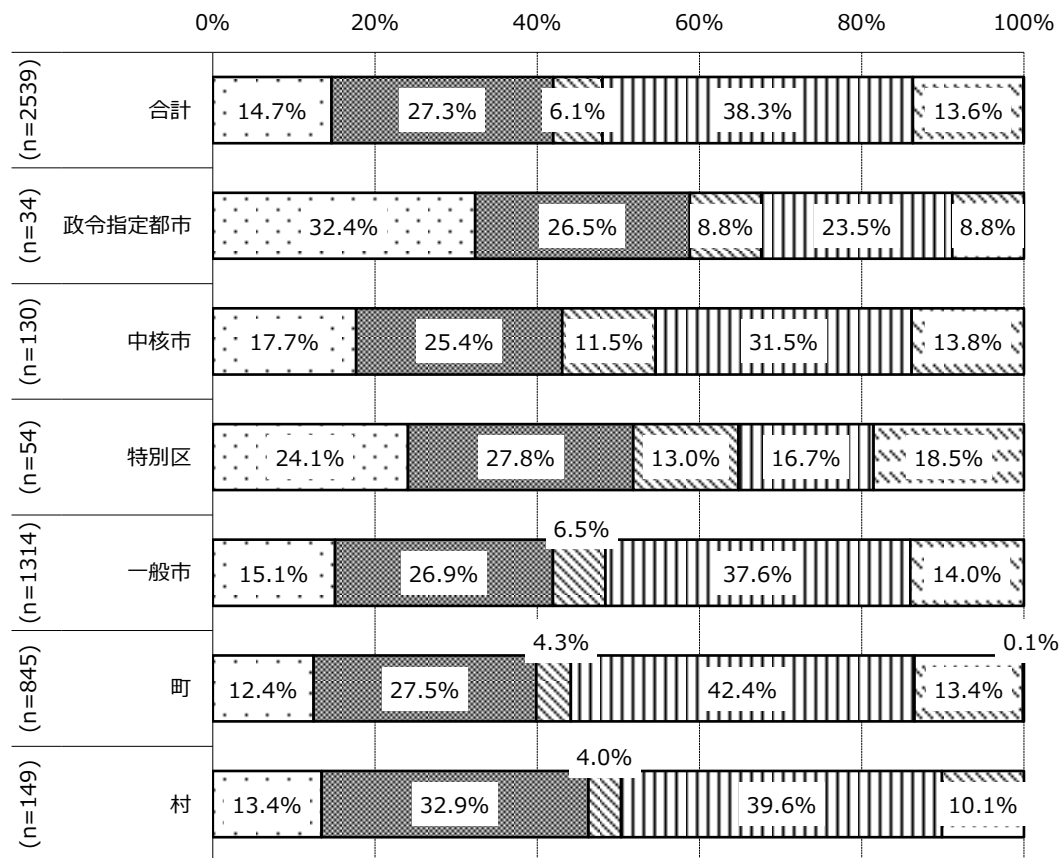
□過去に1度も実施されたことがなかった

■無回答

2)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」「特別区」で「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」の割合が相対的に高い。他方で「一般市」「町」や「村」では、「以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった」が高い割合となっている。実施状況に加えて、体験機会においても自治体規模による違いが見られる。

図表 2-8 【自治体種別】令和3年度における子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験機会の提供を行う事業の実施状況（単一回答）

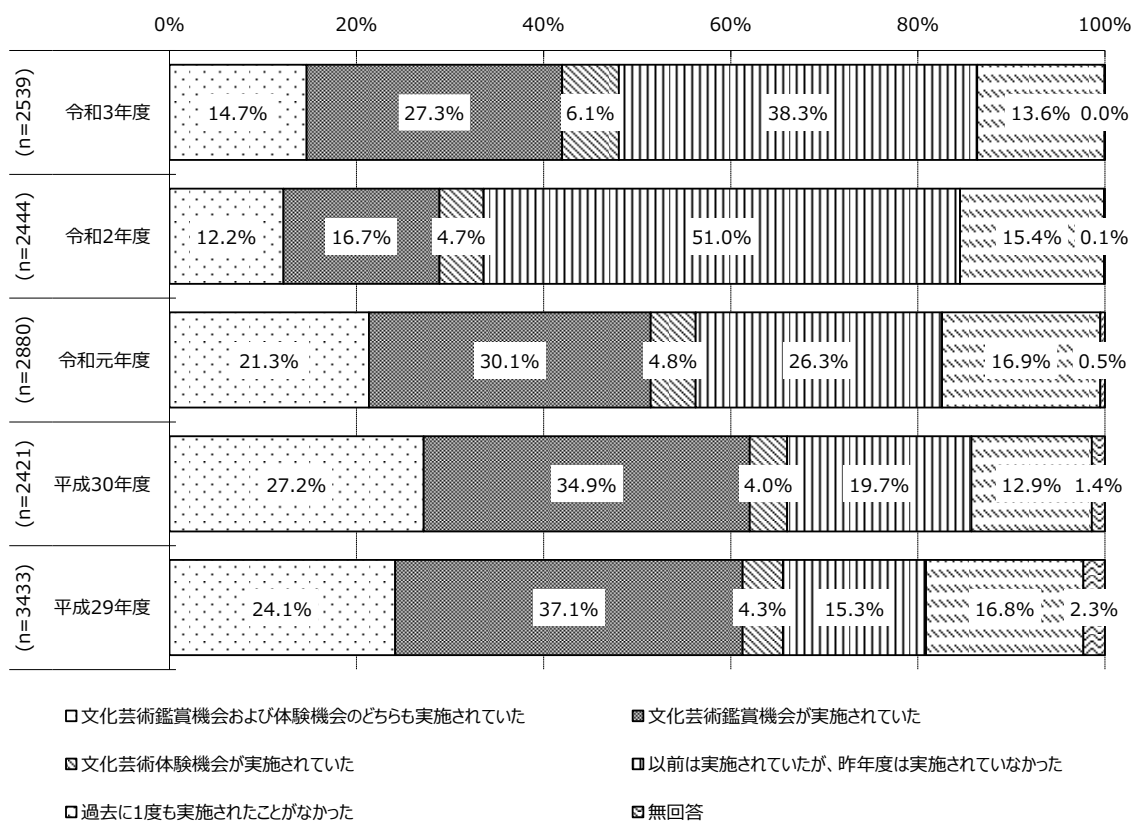


- 文化芸術鑑賞機会および体験機会のどちらも実施されていた
- 文化芸術鑑賞機会が実施されていた
- ▨ 文化芸術体験機会が実施されていた
- ▤ 以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった
- 過去に1度も実施されたことがなかった
- 無回答

3)過年度比較

令和3年度は、前年度と比較すると回復傾向にあり、「文化芸術鑑賞機会及び体験機会のどちらも実施されていた」は12.2%→14.7%、「文化芸術鑑賞体験が実施されていた」は16.7%→27.3%、「文化芸術体験機会が実施されていた」は4.7%→6.1%、「以前は実施されていたが、昨年度は実施されていなかった」は51.0%→38.3%となっている。

図表 2-9 【過年度比較】令和3年度における子供を対象にした文化芸術鑑賞・体験機会の提供を行う事業の実施状況（単一回答）

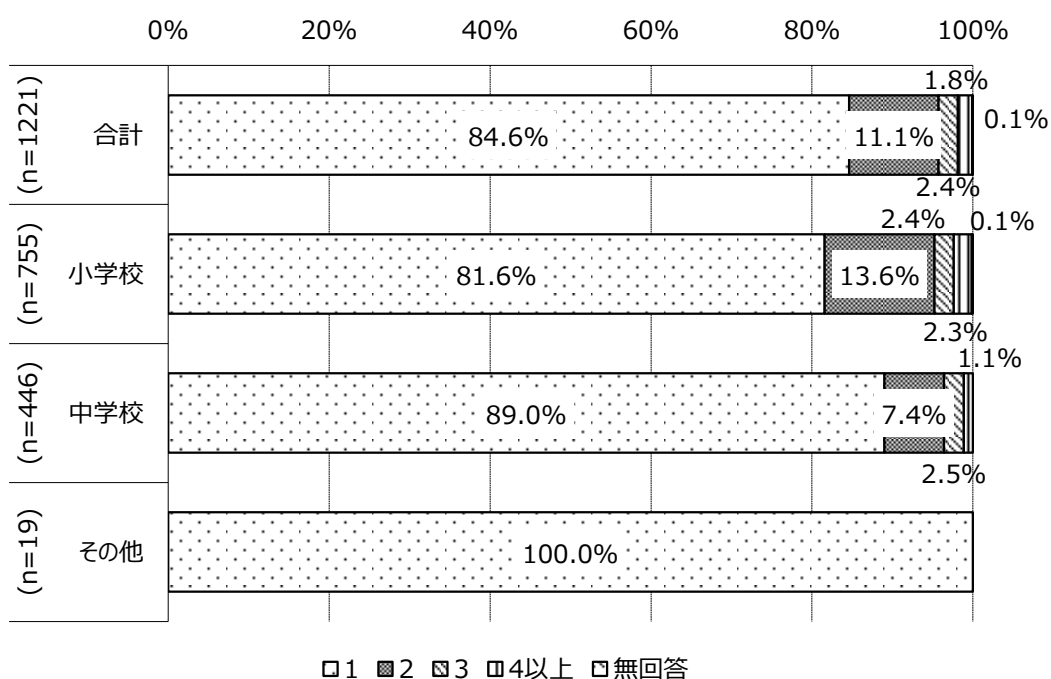


②令和3年度に実施した事業数について

1)全体・学校種別

「令和3年度における子供の鑑賞提供・体験機会の提供状況」において、「文化芸術鑑賞機会および体験機会のどちらも実施されていた」「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」「文化芸術体験機会が実施されていた」と回答した学校に、実施した事業数を尋ねたところ、80%以上の学校が、1事業の実施であった。学校種別にみると、「小学校」において、2事業以上実施している学校の割合が高くなっている。

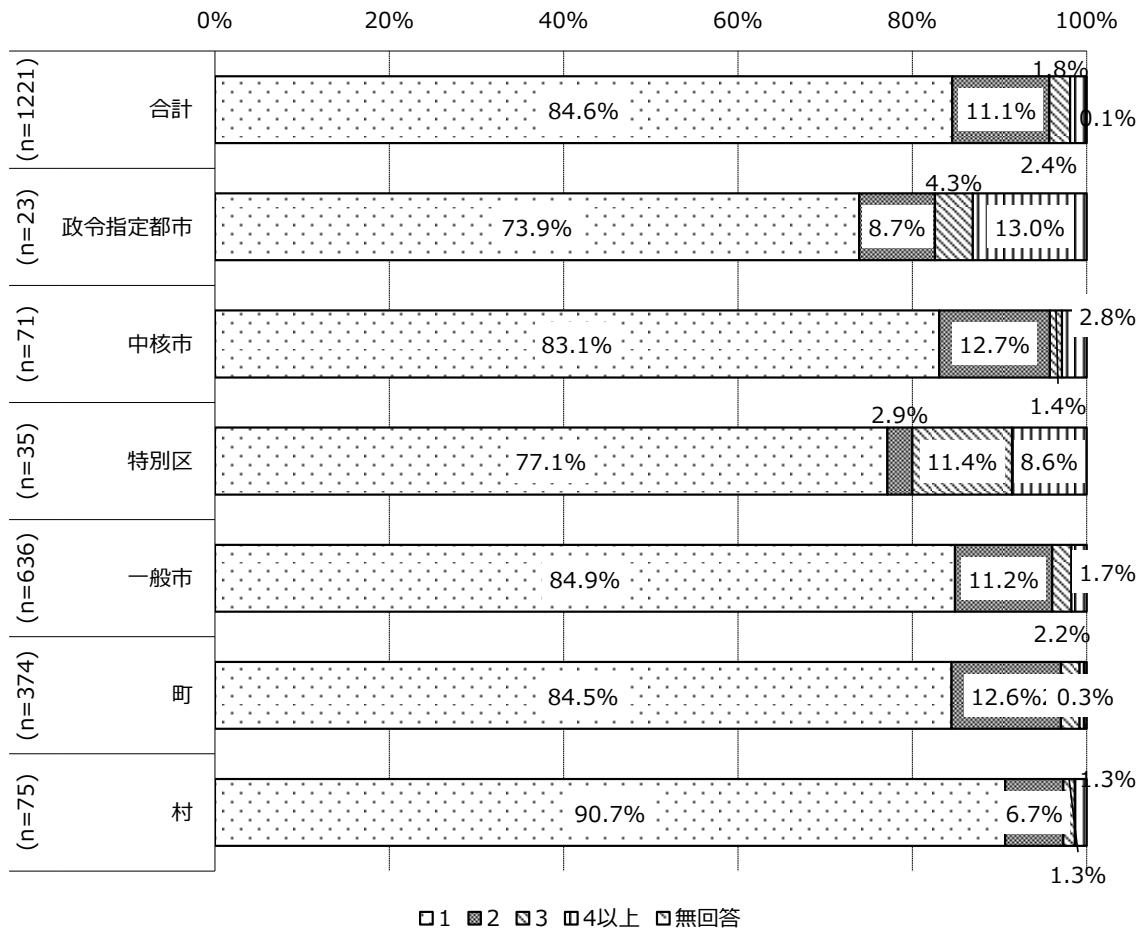
図表 2-10 令和3年度に実施した事業数について（単一回答）



2)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」や「特別区」において、他と比較して2事業以上実施している学校の割合が高くなっている。

図表 2-11 【自治体種別】令和3年度に実施した事業数について（単一回答）



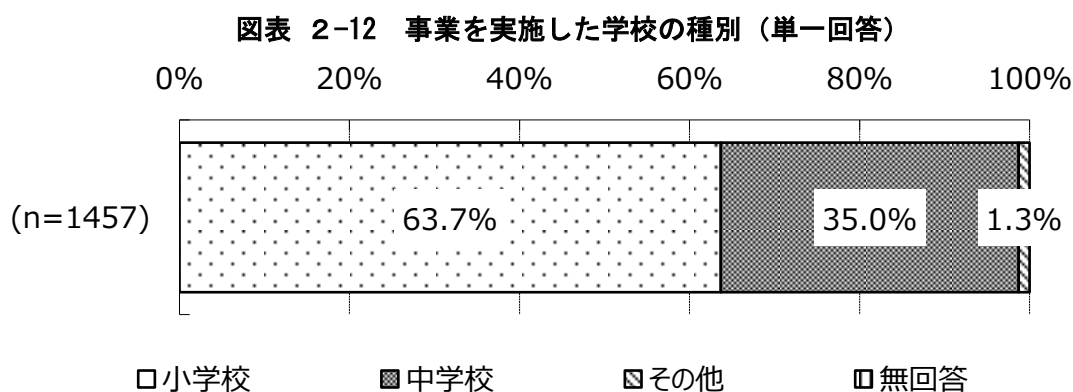
③具体的な事業の内容について⁴

事業を実施している学校を対象に、文化芸術鑑賞・体験機会について最大3つまで事業内容について回答を得た。集計においては、事業単位で集計を行い、対象となる事業数は1457件であった。

本節では主に学校種別で集計を行った。令和2年度の有効回答数が2444に対して952事業の回答があったことに対して、令和3年度の有効回答数が2539に対して1457事業の回答になるなど、回答を得た事業数は増加している。

1)回答した学校種別

具体的な事業の内容について回答のあった学校を学校種別にみると、「小学校」が63.7%、「中学校」が35.0%となっており、「その他」が1.3%であった。

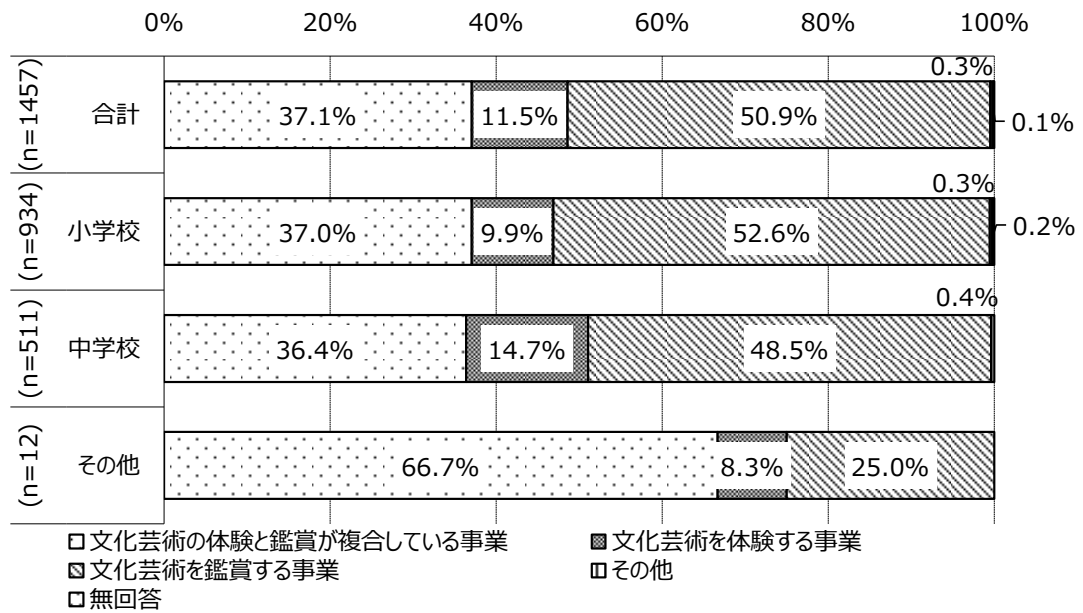


⁴ 本項目は、「令和3年度における子供の文化芸術鑑賞・体験機会の提供を行う事業の実施状況（第2章3.（2）①）」において「どちらも実施されていた」「文化芸術鑑賞機会が実施されていた」「文化芸術体験機会が実施されていた」のいずれかを回答した団体のうち、その具体的な内容について回答があった事業（計：1,457件）について、事業数ベースで集計を行った。

2)実施概要

実施概要を全体でみると「文化芸術を鑑賞する事業」の割合が最も高く、次いで「文化芸術の体験と鑑賞が複合している事業」、「文化芸術を体験する事業」となった。小学校と中学校の間では大きな差は見られなかった。

図表 2-13 実施概要（単一回答）

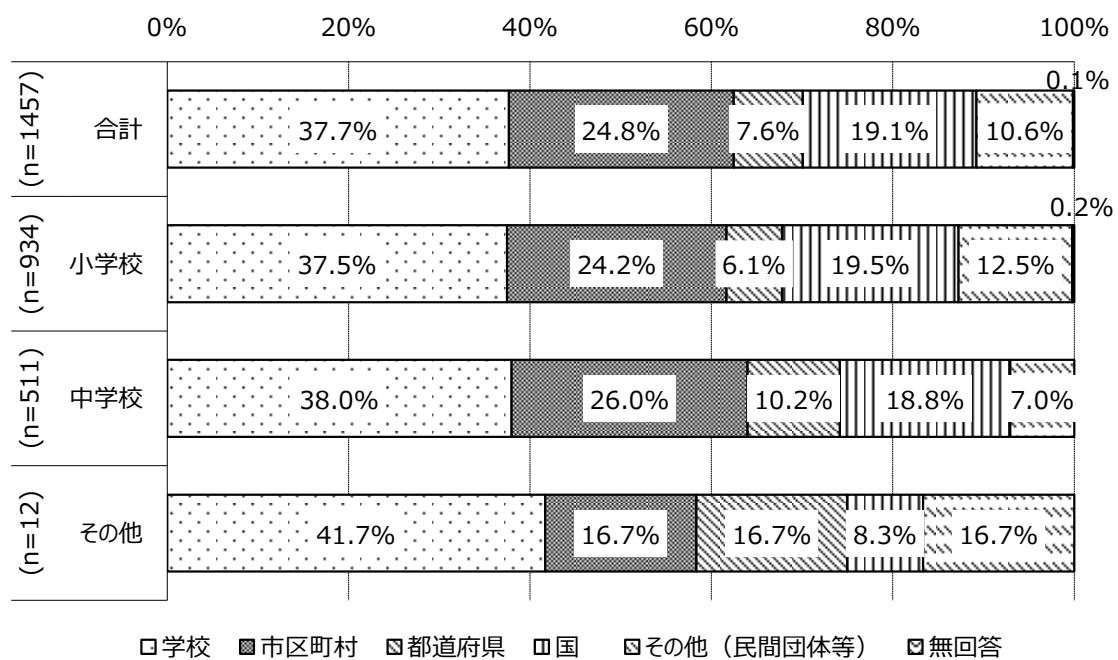


3)実施主体

実施主体を全体でみると「学校」の割合が最も高く、次いで「市区町村」、「国」、「都道府県」、「その他（民間団体等）」となっている。「学校」は昨年度とほぼ同等の割合であるが、「市区町村」が令和2年度は17.3%であったところ本年度は24.8%に上昇し、「国」が23.9%であったところ19.1%にまで減少した。

小学校と中学校を比較すると、「中学校」において「都道府県」の割合が他と比べてやや高いものの、大きな傾向の差は見られなかった。

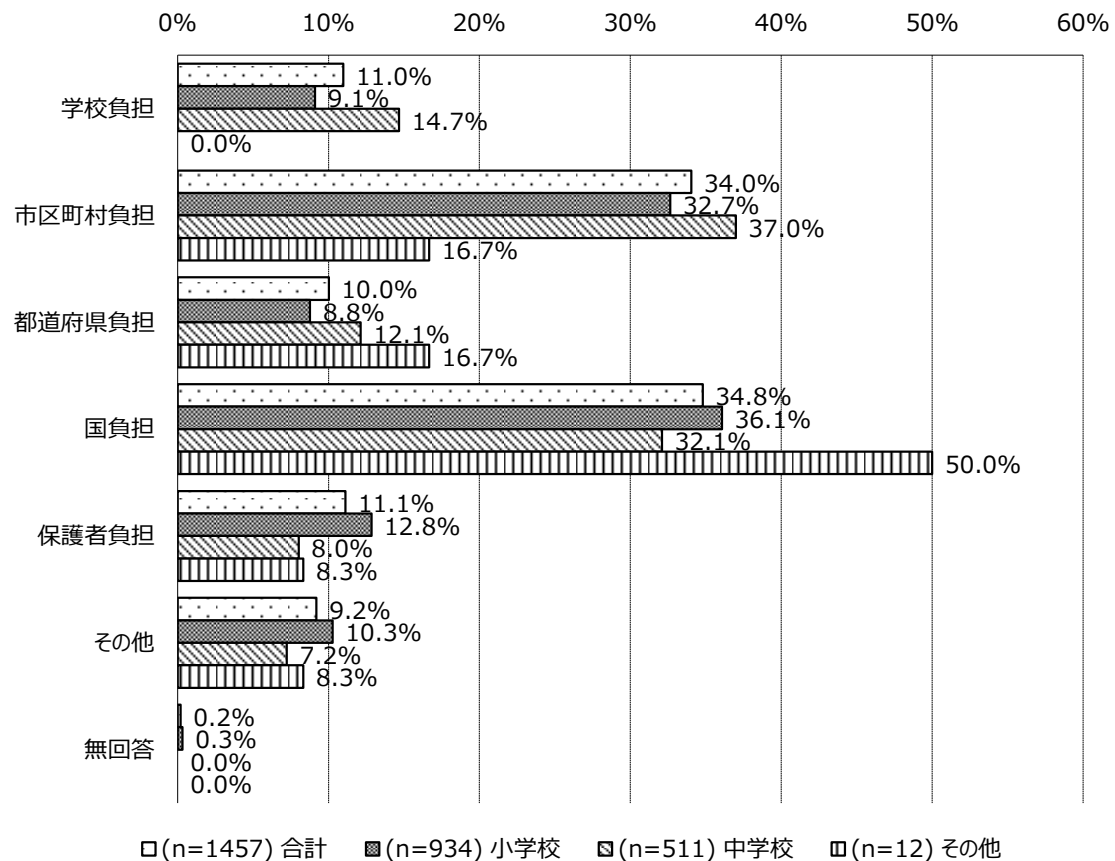
図表 2-14 実施主体（単一回答）



4)費用負担の主体

費用負担の主体を全体で見ると「国負担」と「市区町村負担」がいずれも 35%程度であった。次いで、「学校負担」「都道府県負担」「保護者負担」がいずれも 10%程度となった。小学校と中学校の間では、特段傾向の差は見られなかった。

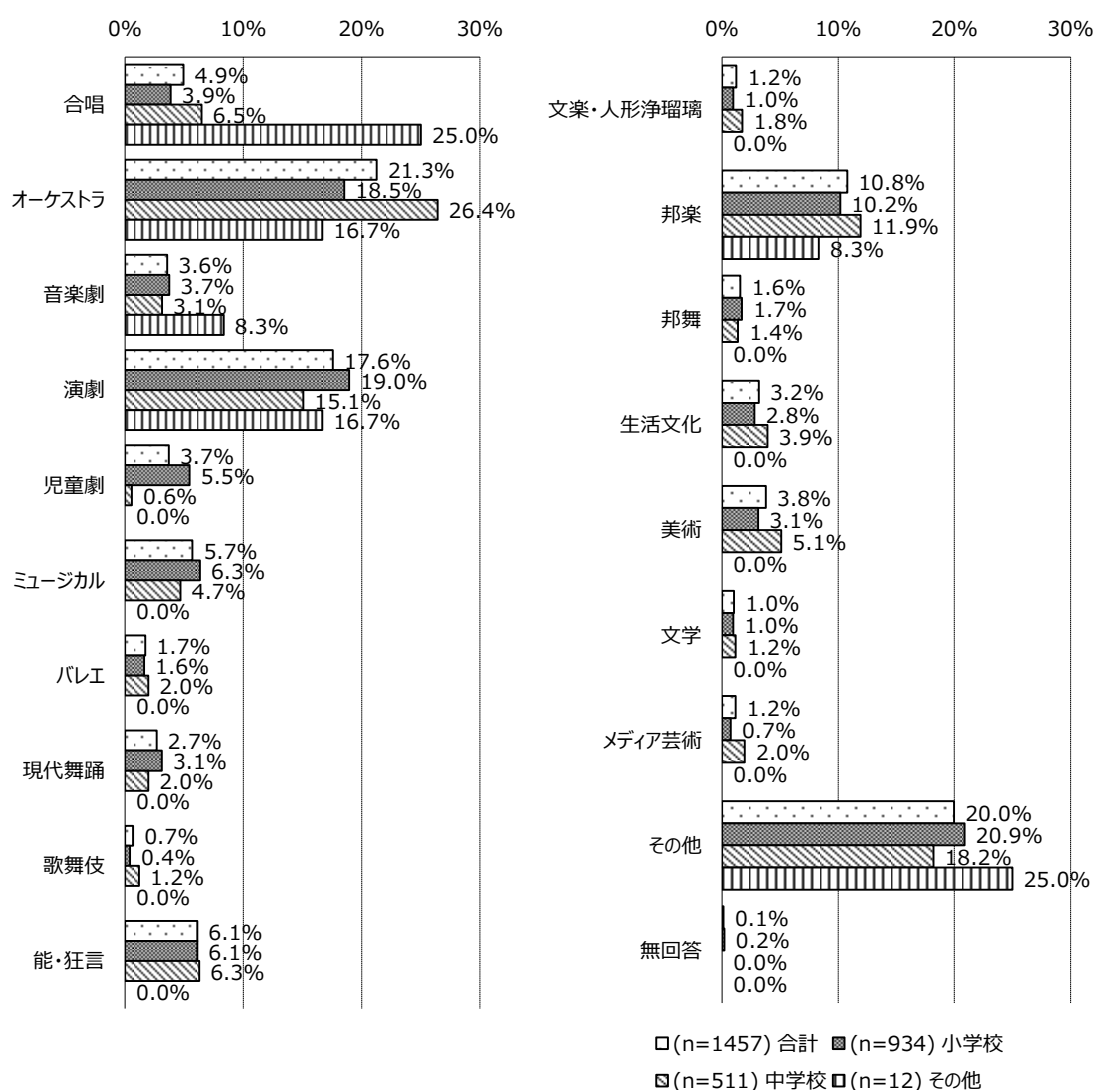
図表 2-15 費用負担の主体（単一回答）



5)芸術分野

芸術分野を全体でみると、「オーケストラ」の割合が最も高く、次いで「演劇」、「邦楽」、「能・狂言」と続いている（※「その他」は除く）。なお、「その他」の回答は20.0%であったが、その内容については「器楽演奏」「伝統芸能」「落語」など、選択肢に含まれると思われるものが多かった。

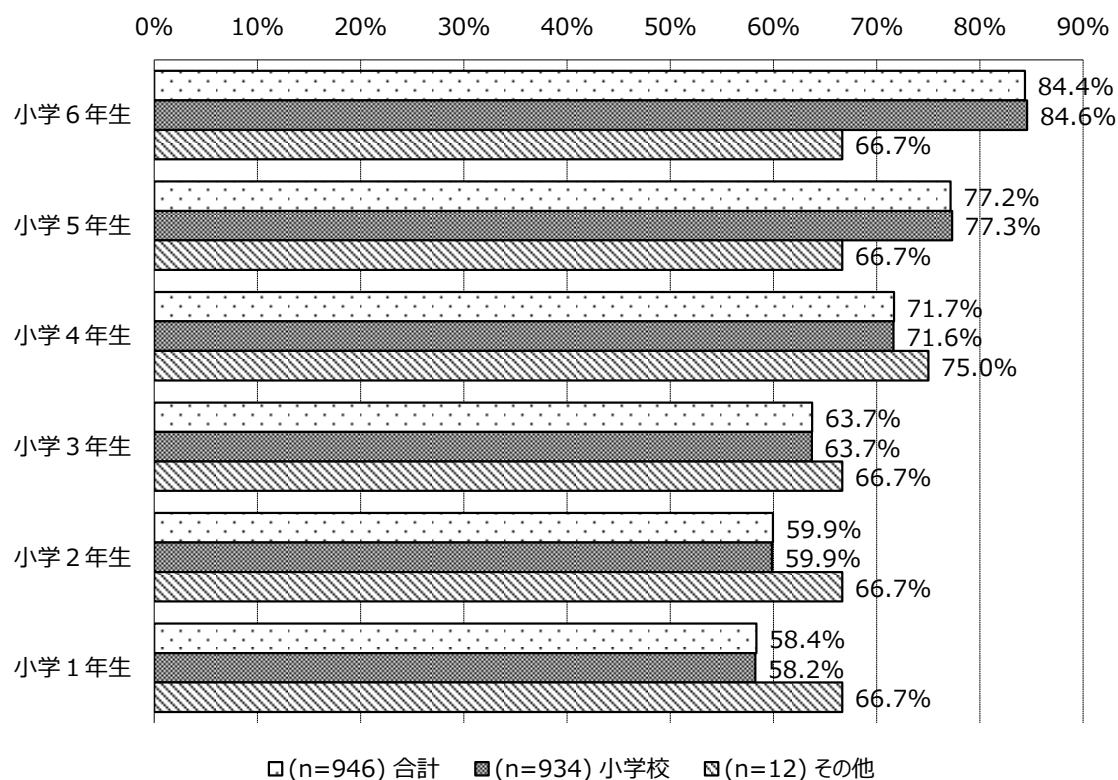
図表 2-16 芸術分野（単一回答）



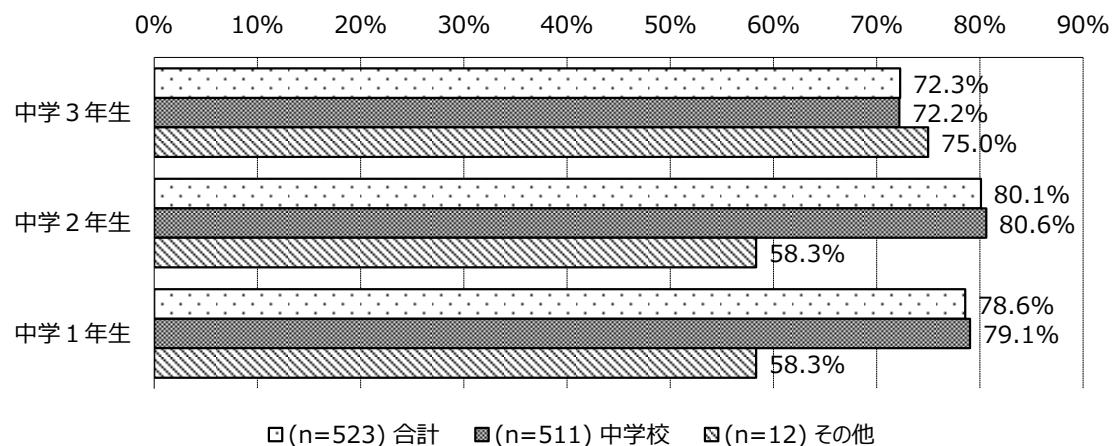
6)実施した学年

事業を実施した学年について、「中学校」は「中学校」および「その他」、「小学校」は「小学校」および「その他」の合算値で算出した。これをみると、「小学校」では学年が高くなるほど実施割合も高くなり、「中学校」では1・2年生と比較すると3年生において実施割合が低くなる傾向が見られた。

図表 2-17 実施した学年：小学校（複数回答）



図表 2-18 実施した学年：中学校（複数回答）

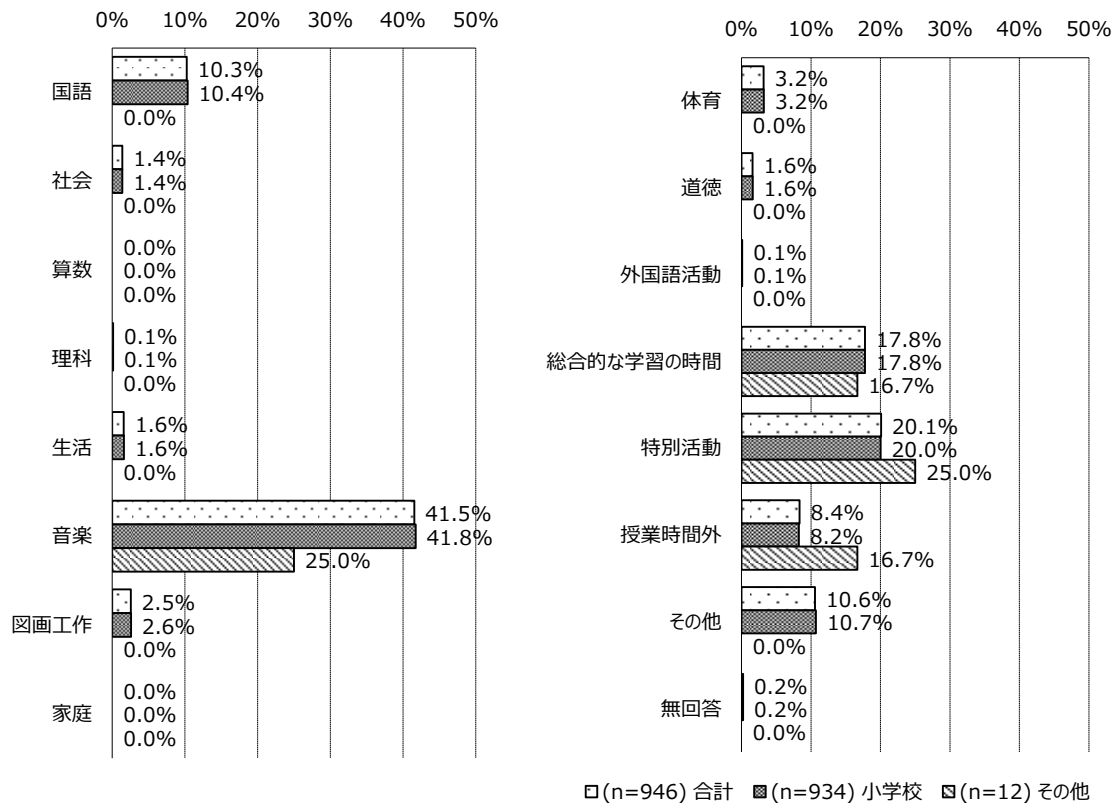


7)事業に用いた授業時間

【小学校】

事業に用いた授業時間をみると、小学校では「音楽」の割合が最も高く、次いで「特別活動」、「総合的な学習の時間」、「国語」となっている。

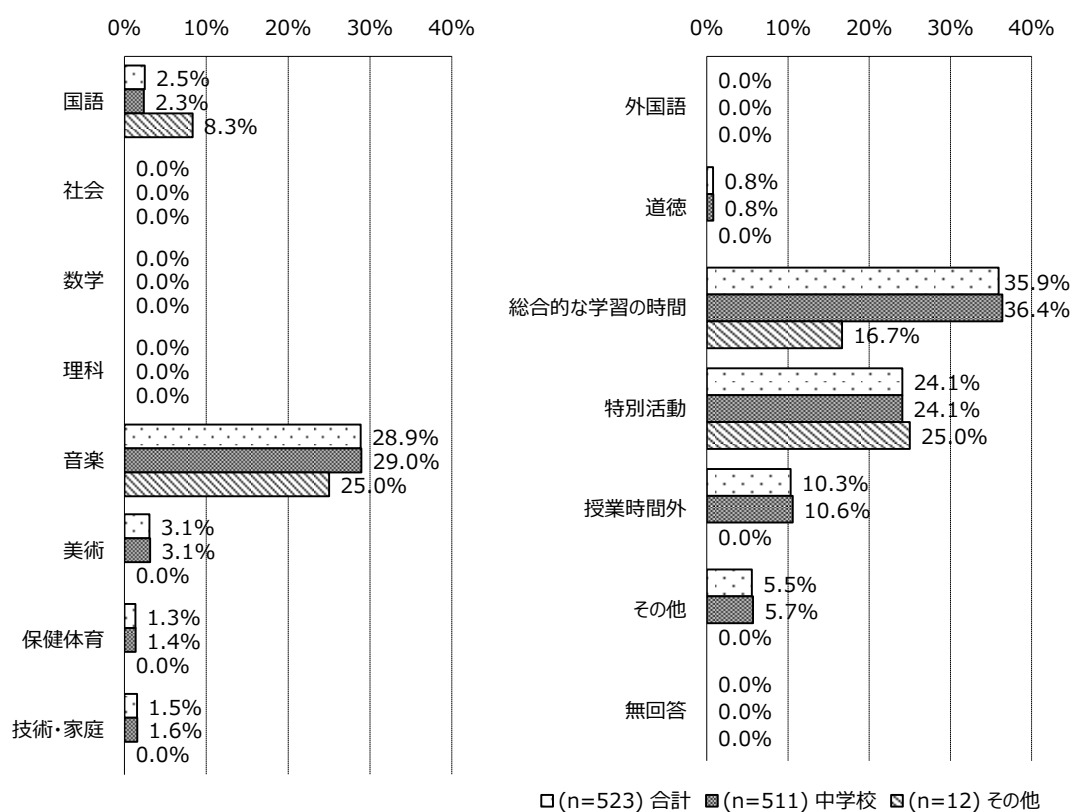
図表 2-19 事業に用いた授業時間：小学校（複数回答）



【中学校】

事業に用いた授業時間をみると、中学校では「総合的な学習の時間」の割合が最も高く、次いで「特別活動」、「音楽」、「授業時間外」となっている。

図表 2-20 事業に用いた授業時間：中学校（複数回答）

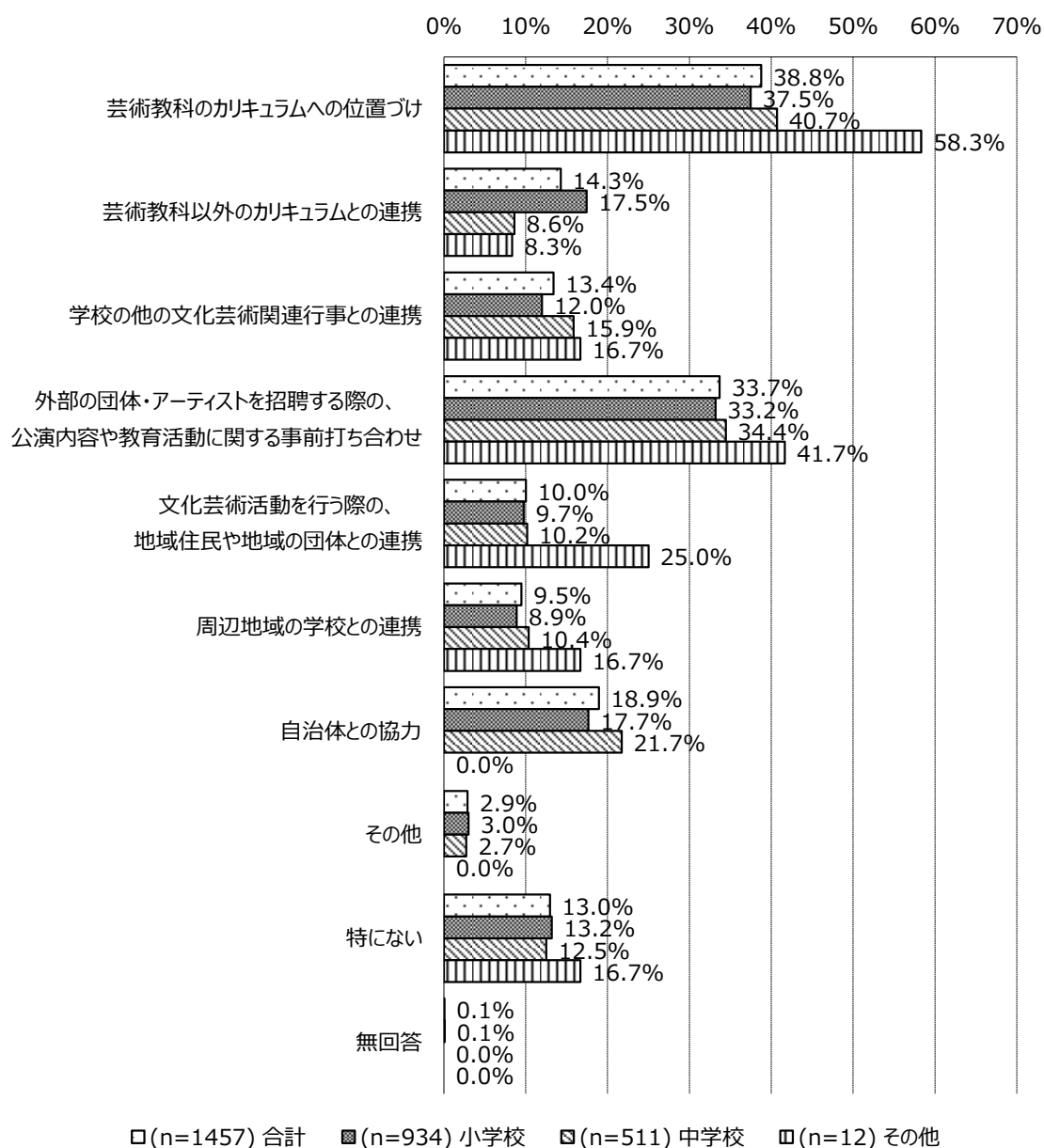


④効果的・持続的な事業実施のために行ったこと

効果的・持続的な事業実施のために行ったことについて尋ねたところ、全体でみると「芸術教科のカリキュラムへの位置づけ」の割合が最も高く38.8%であった。次いで、「外部の団体・アーティストを招聘する際の、公演内容や教育内容に関する事前打ち合わせ」が33.7%、「自治体との協力」が18.9%であった。

小学校と中学校の間で、特段の傾向の差は見られなかった。

図表 2-21 効果的・持続的な事業実施のための工夫

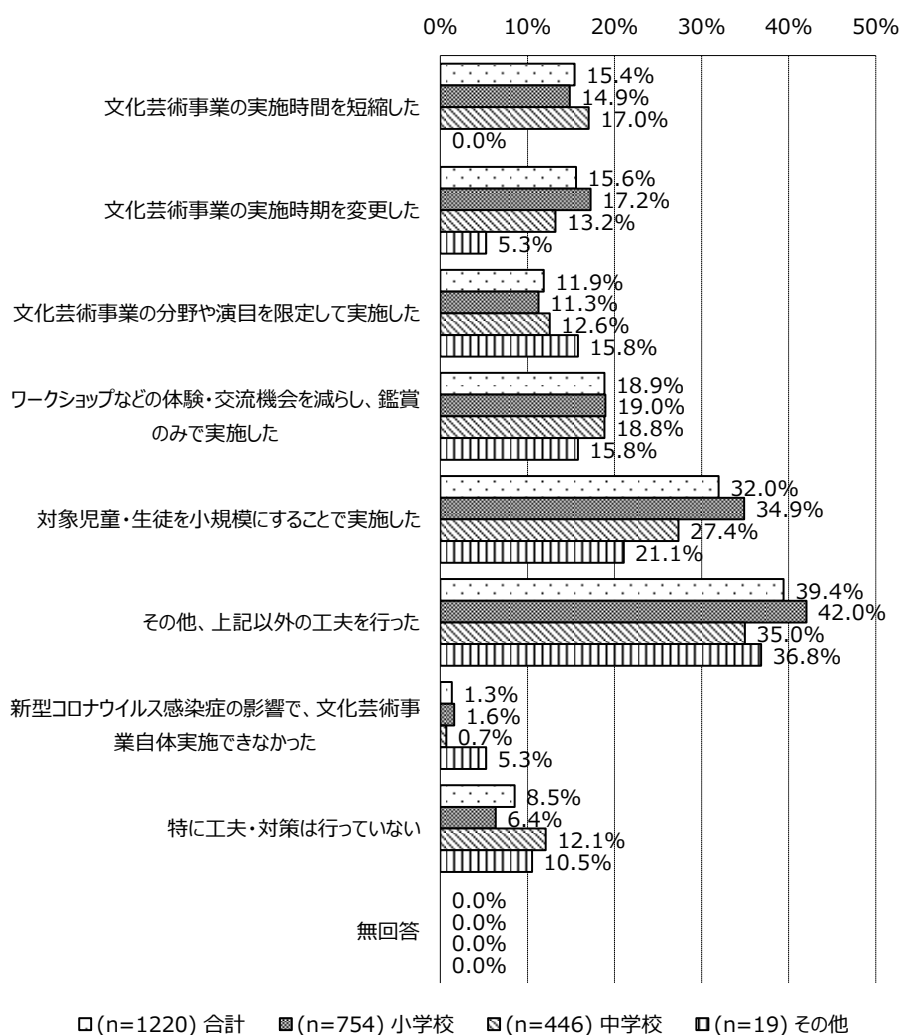


（３）新型コロナウイルスの影響について

①文化芸術鑑賞・体験事業の実施において、新型コロナウイルス感染症の流行に対し、どのような対策・工夫を行っているか

「文化芸術鑑賞・体験事業の実施において、新型コロナウイルス感染症の流行に対し、どのような対策・工夫を行っているかを尋ねたところ、「その他」が最も割合が高く、次いで「対象児童・生徒を小規模にすることで実施した」、「ワークショップなどの体験・交流機会を減らし、鑑賞のみで実施した」となっている。「その他」を回答した学校においては、マスク着用や、生徒間の距離の確保、換気の徹底といった基本的な感染対策の徹底に関する記載が多かったものの、「公演回数を２回に分けた」、「全校一斉ではなく、学年別に３回実施した」など、公演回数を分けることにより、感染対策を行いつつ、多くの生徒に体験機会を提供する工夫を実施する例も見られた。

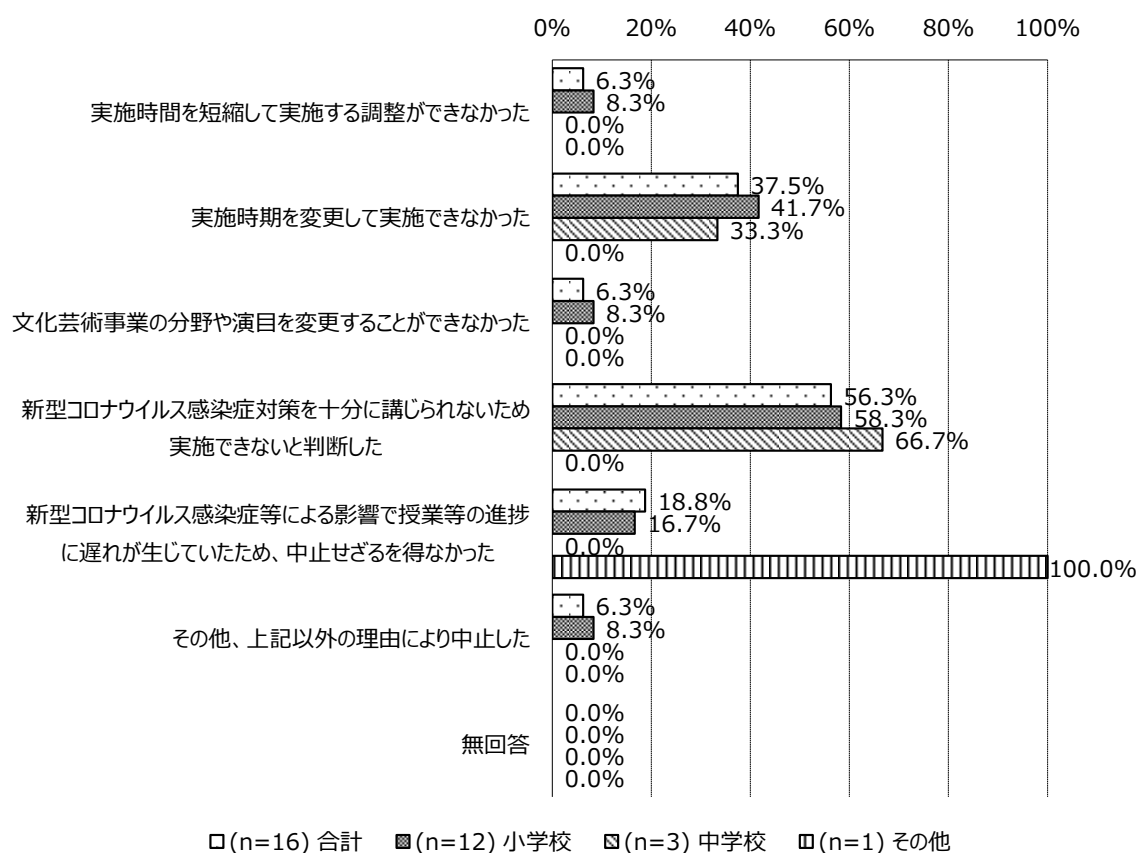
図表 2-22 実施した対策・工夫（複数回答）



②実施できなかった理由

「新型コロナウイルス感染症の影響で、文化芸術事業自体実施できなかった」と回答した学校に、具体的な変更内容を尋ねたところ、「新型コロナウイルス感染症対策を十分に講じられないため実施できないと判断した」の割合が最も高くとなっている。次いで、「実施時期を変更して実施できなかった」、「新型コロナウイルス感染症等による影響で授業等の進捗に遅れが生じていたため、中止せざるを得なかった」となっている。

図表 2-23 実施できなかった理由（複数回答）



(4) 文化芸術事業の実施・継続意向

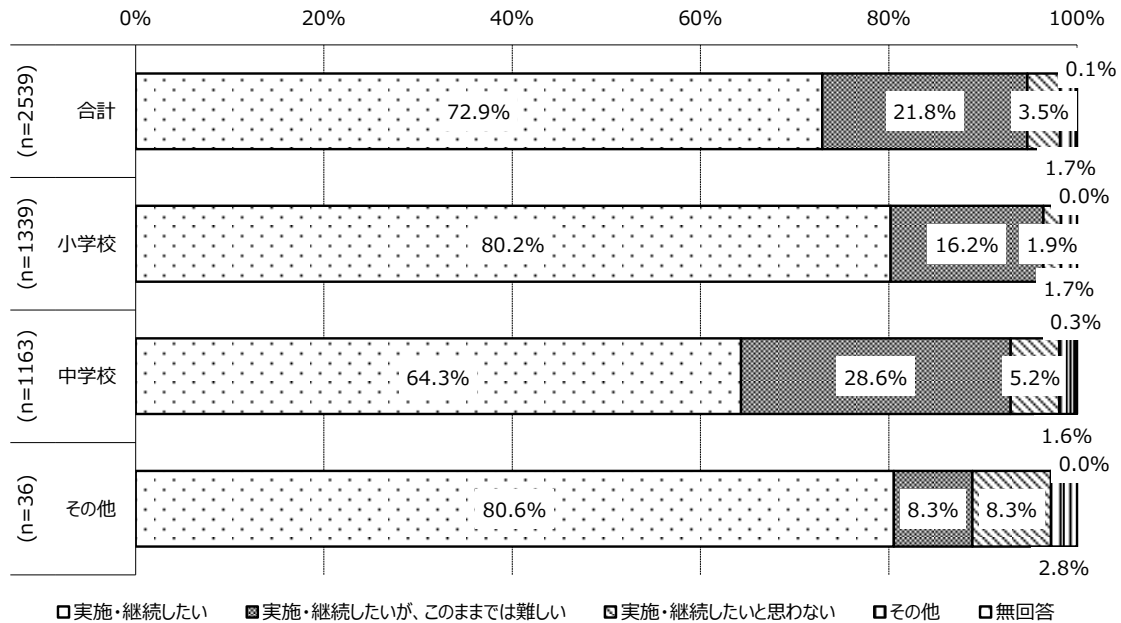
① 子供を対象にした文化芸術関連事業の実施・継続意向

1) 全体・学校種別

子供を対象にした文化芸術関連事業の実施・継続意向について尋ねたところ、「実施・継続したい」の割合が最も高く 72.9%となっている。次いで、「実施・継続したいが、このままでは難しい (21.8%)」、「実施・継続したいと思わない (3.5%)」となっている。

学校種別にみると、「実施・継続したい」の割合は小学校で 80.2%、中学校で 64.3%と、小学校において高いという結果になった。中学校では「実施・継続したいが、このままでは難しい」の割合が高い。

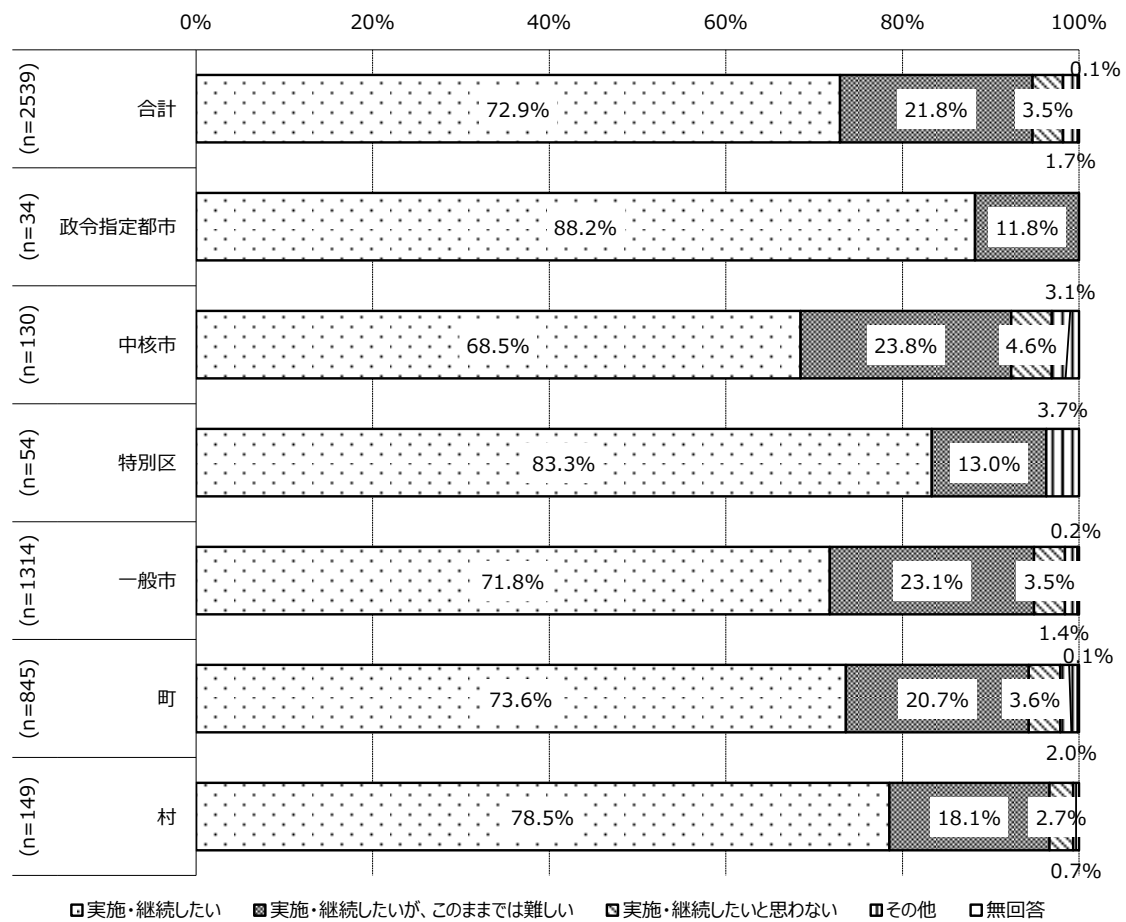
図表 2-24 文化芸術関連事業の実施・継続意向（単一回答）



2)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」と「特別区」において、「実施・継続したい」の割合が他と比較して高くなっている。

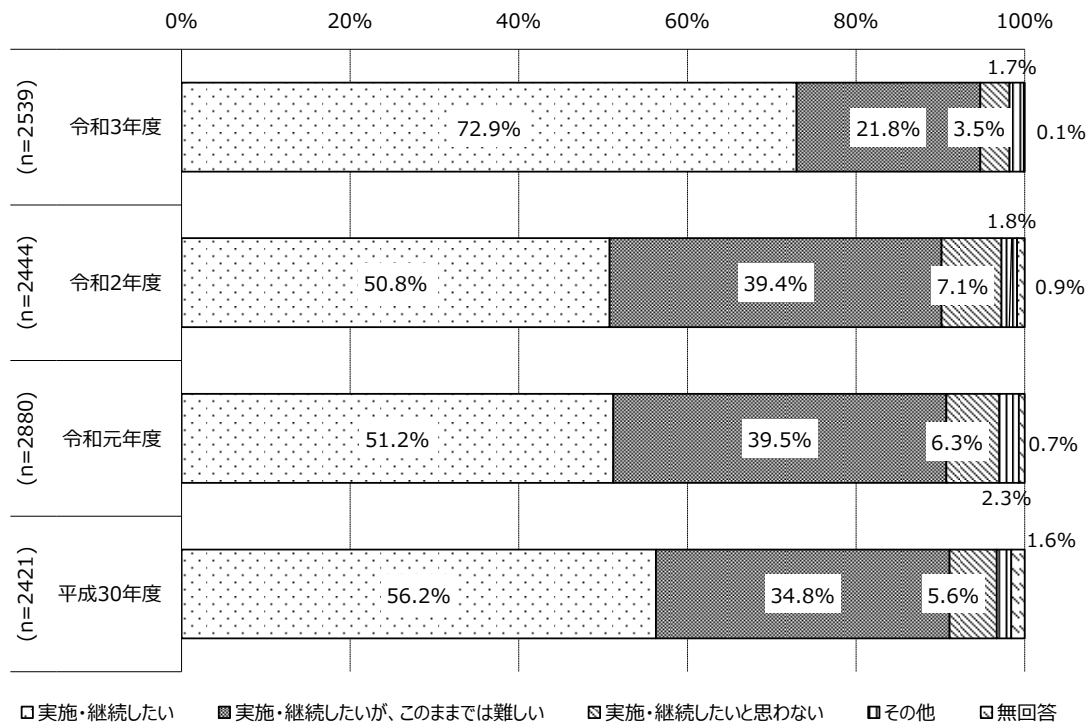
図表 2-25 【自治体種別】文化芸術関連事業の実施・継続意向（単一回答）



3)過年度調査との比較

過去4年間の結果を比較すると、令和3年度に「実施・継続したい」の割合が大きく上昇している。

図表 2-26 【過年度比較】文化芸術関連事業の実施・継続意向（単一回答）

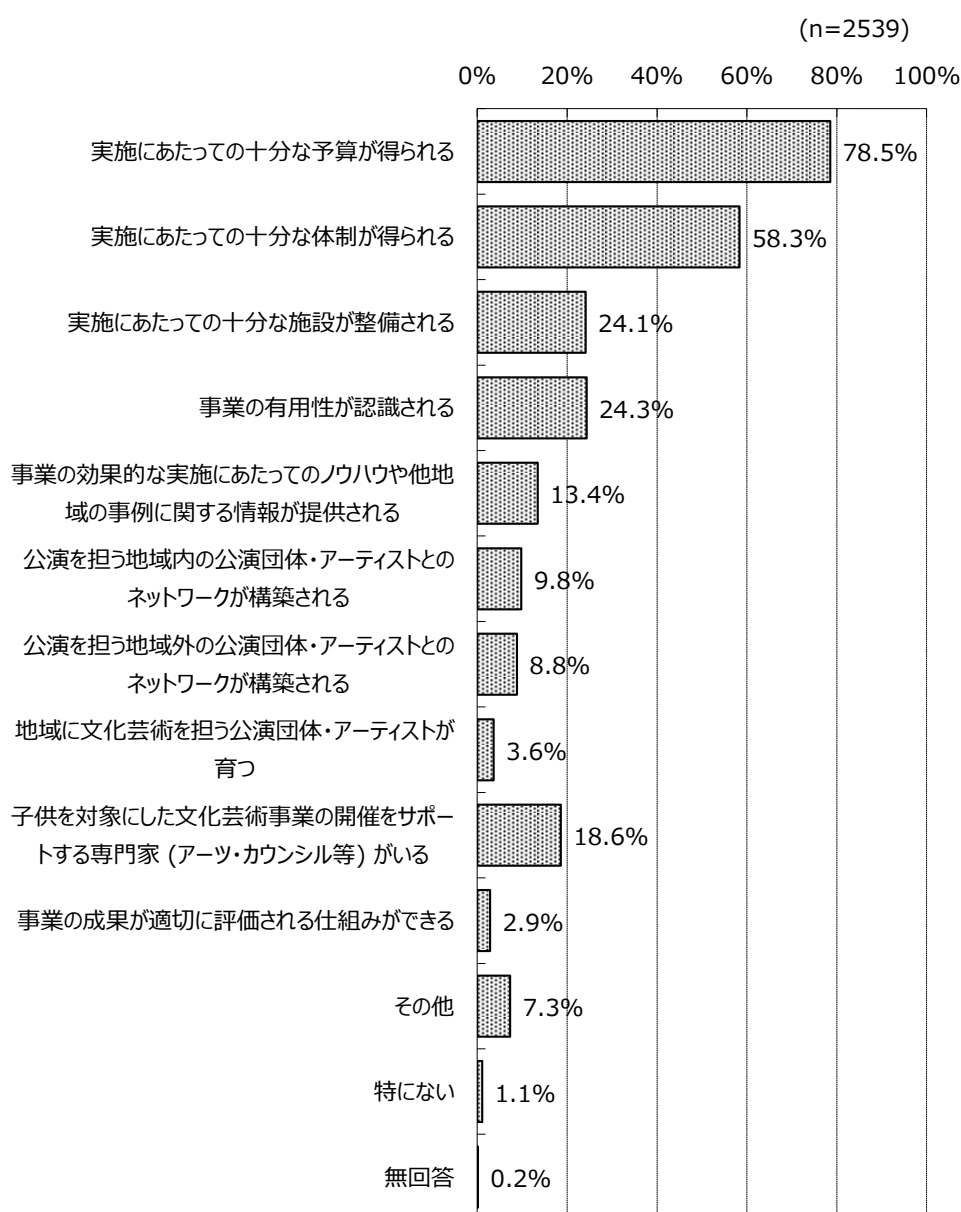


②子供を対象にした文化芸術関連事業の継続的实施に必要なこと

1)全体

子供を対象にした文化芸術関連事業の継続的实施に必要なことについて尋ねたところ、「実施にあたっての十分な予算が得られる」の割合が最も高く 78.5%となっている。次いで、「実施にあたっての十分な体制が得られる (58.3%)」、「実施にあたっての十分な施設が整備される (24.1%)」となっている。

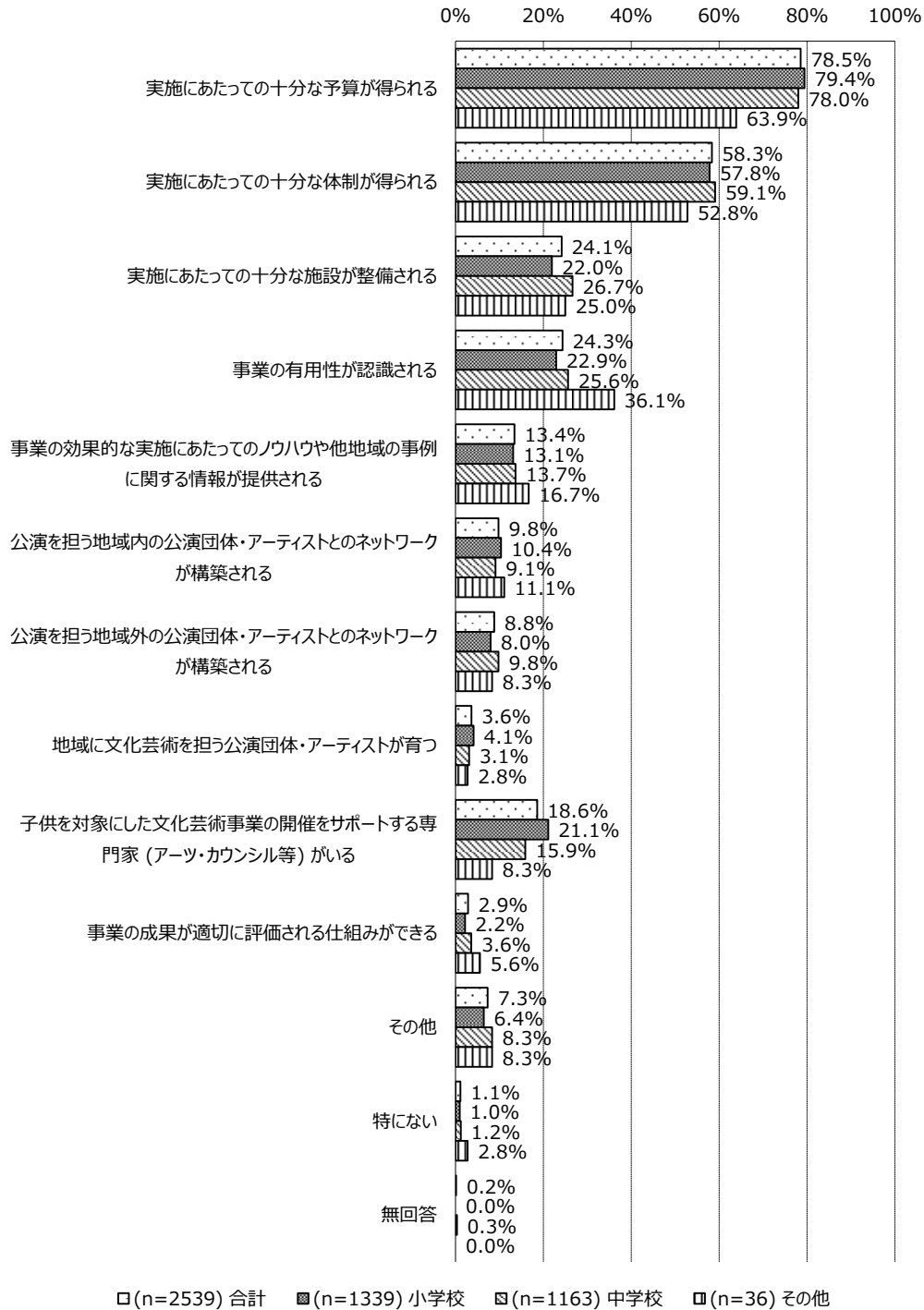
図表 2-27 文化芸術関連事業の継続的实施に必要なこと（複数回答）



2)学校種別

学校種別では特段の傾向の差は見られなかった。

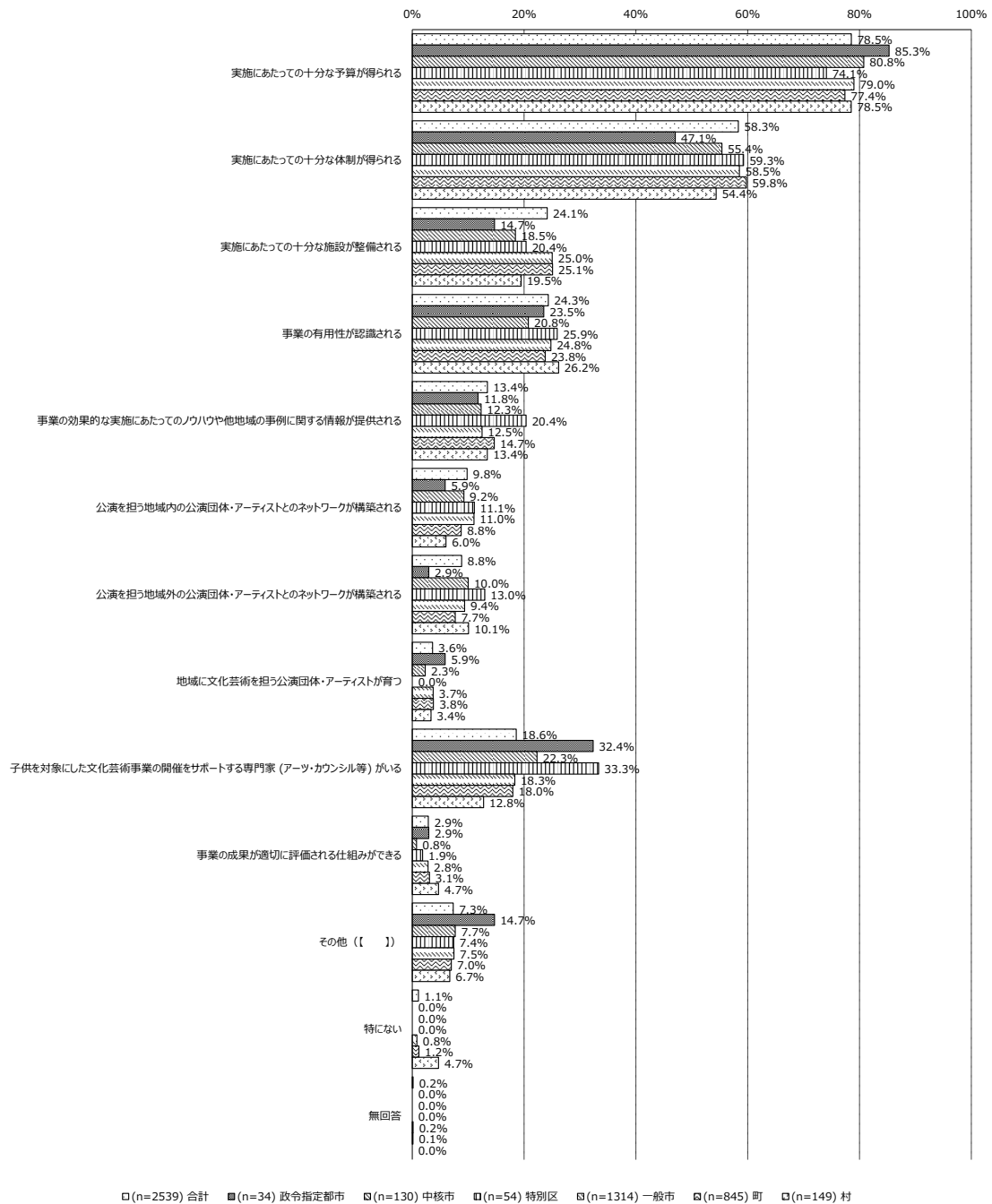
図表 2-28 【学校種別】文化芸術関連事業の継続的实施に必要なこと（複数回答）



3)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」において「実施にあたっての十分な予算が得られる」の割合が他と比較して高くなっている。

図表 2-29 【自治体種別】文化芸術関連事業の継続的实施に必要なこと（複数回答）

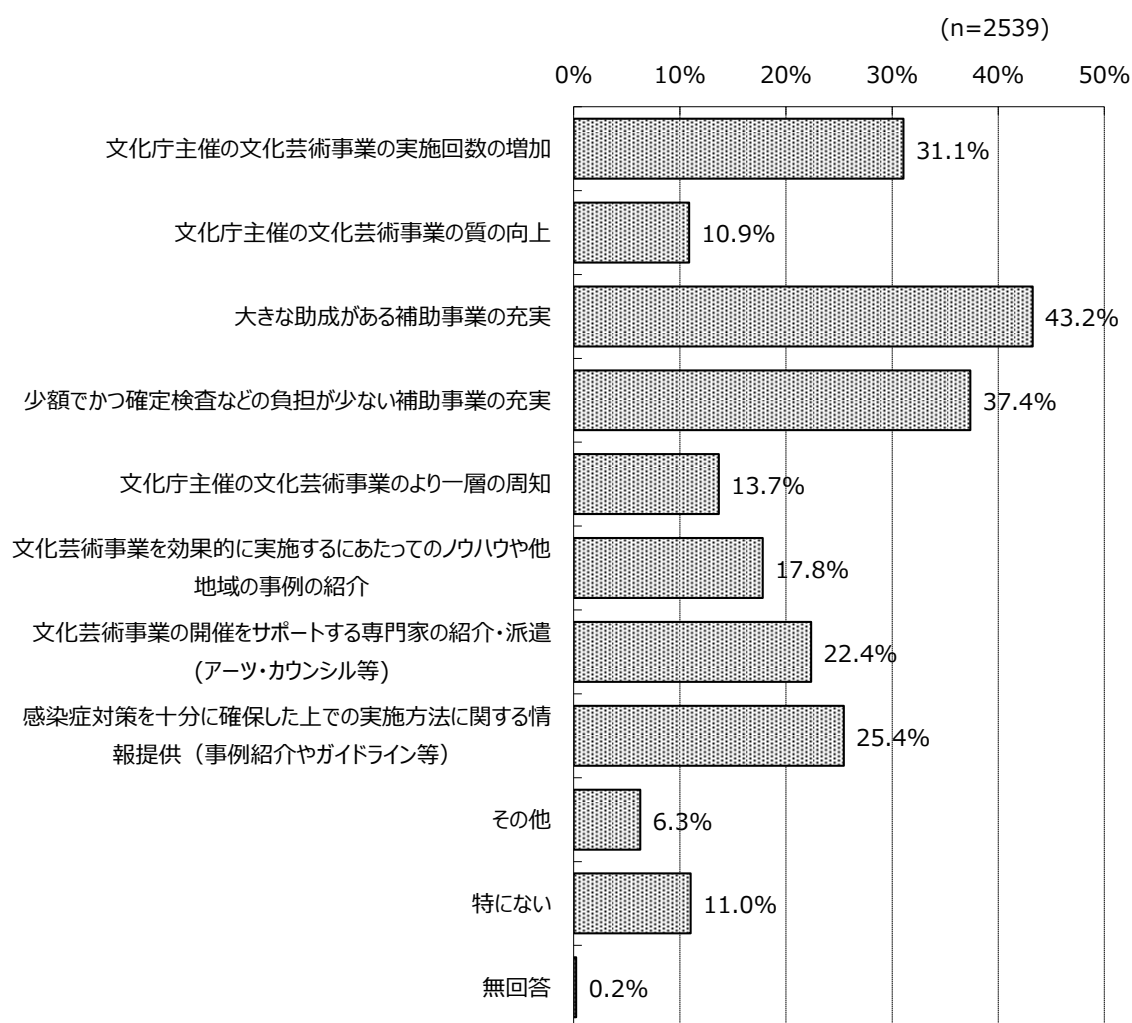


③子供を対象にした文化芸術関連事業を実施する上での文化庁に対する要望

1)全体

子供を対象にした文化芸術関連事業を実施する上での文化庁に対する要望について尋ねたところ、「大きな助成がある補助事業の充実」の割合が最も高く 43.2%となっている。次いで、「少額でかつ確定検査などの負担が少ない補助事業の充実（37.4%）」、「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加（31.1%）」となっている。

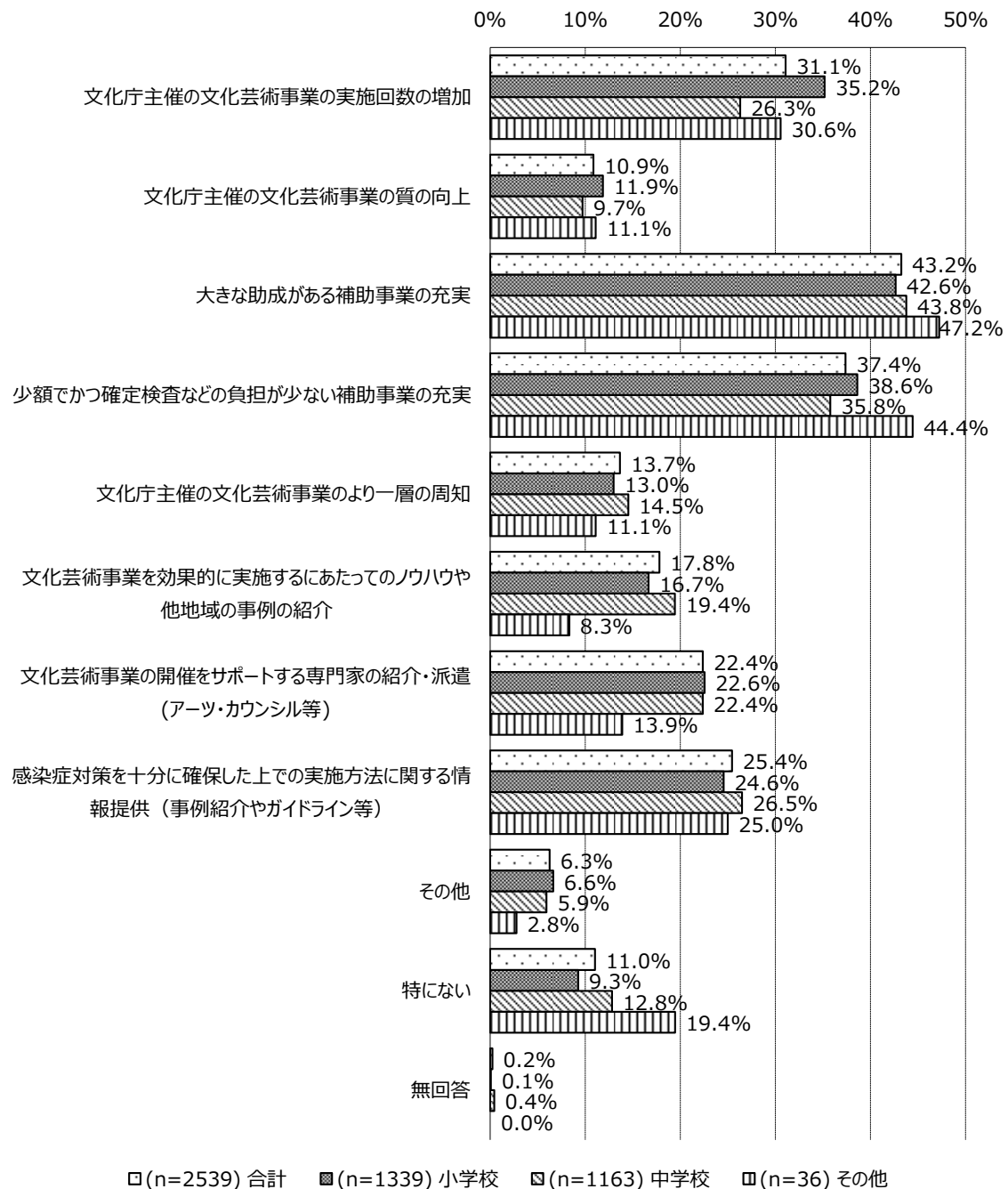
図表 2-30 文化庁に対する要望（複数回答）



2)学校種別

学校種別にみると、「小学校」において「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」の割合が他と比較して高くなっている。

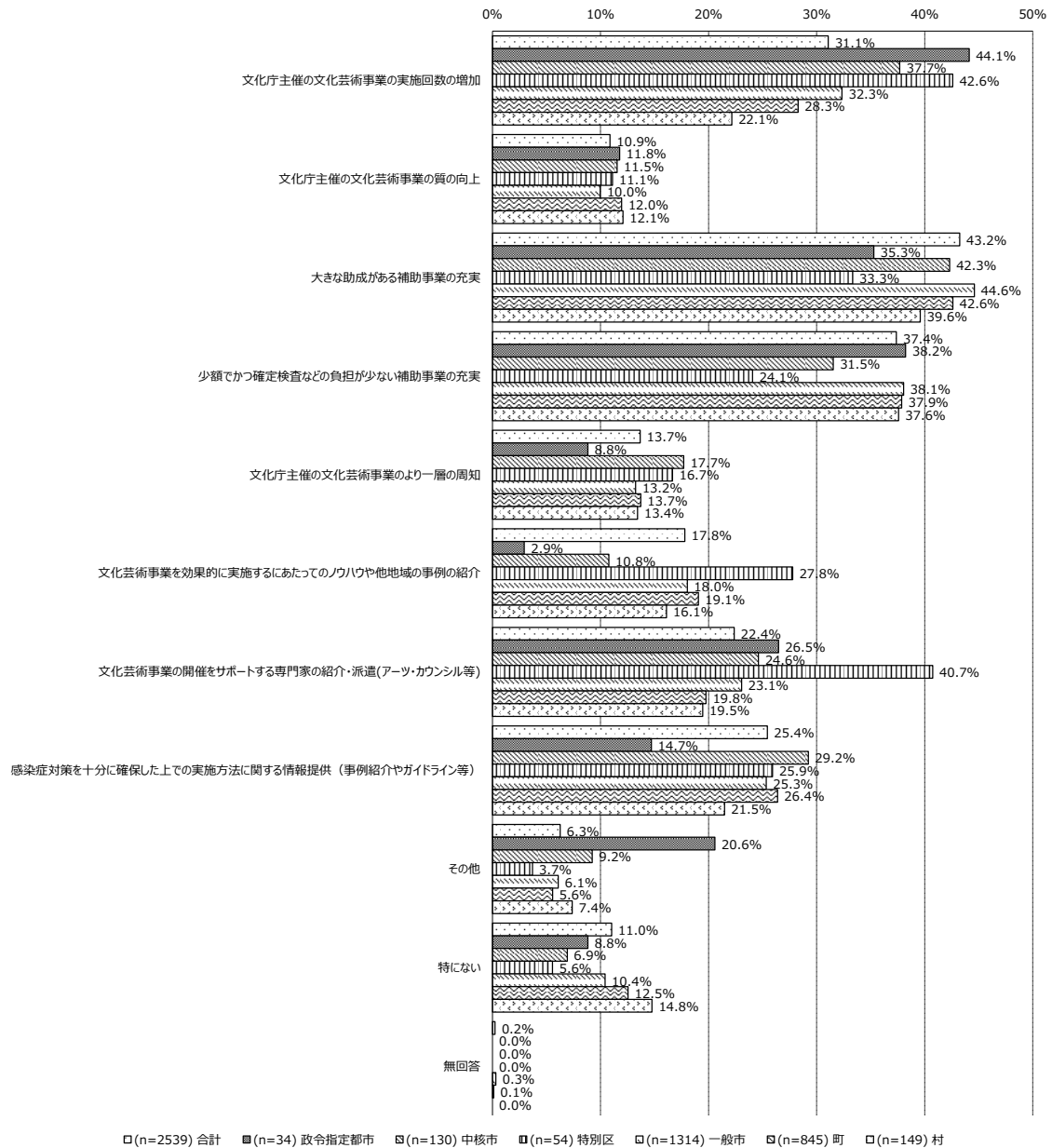
図表 2-31 【学校種別】文化庁に対する要望（複数回答）



3)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」「特別区」では「文化庁主催の文化芸術事業の実施回数の増加」が他と比較して高くなっている。

図表 2-32 【自治体種別】文化庁に対する要望（複数回答）



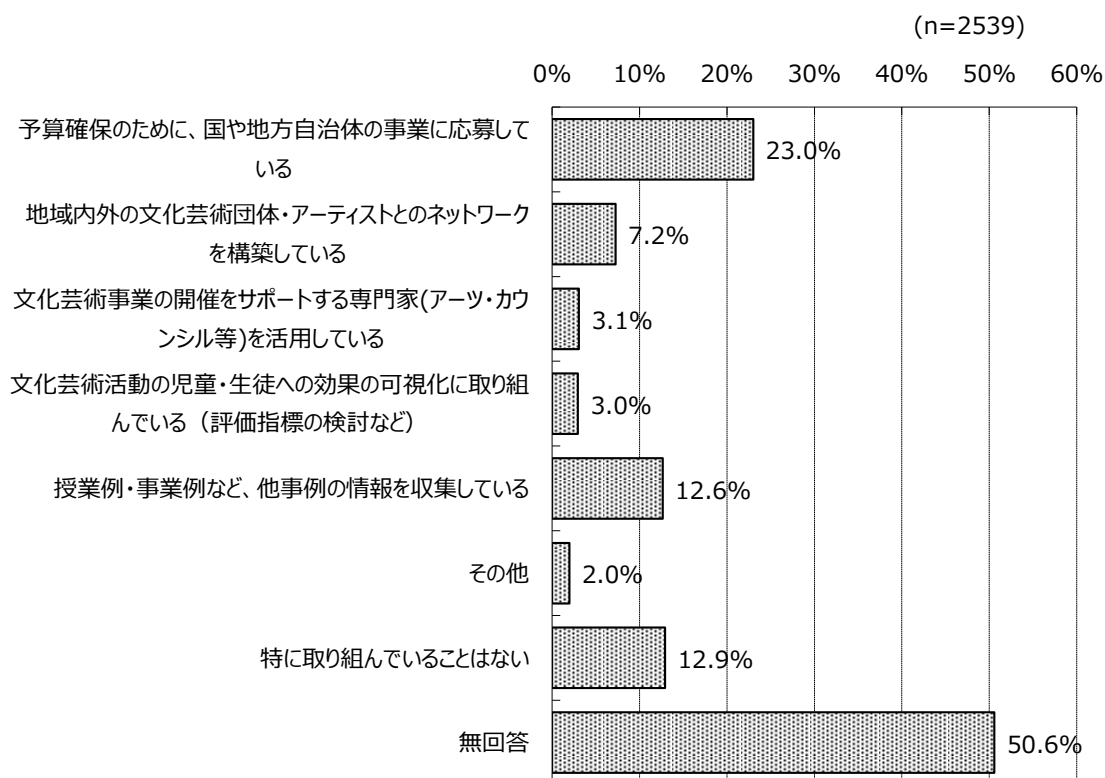
（５）文化芸術活動の質向上（効果的・持続的な事業実施）のための工夫

①効果的・持続的な実施のための工夫

1)全体

文化芸術活動（文化芸術鑑賞・体験事業及び芸術教科の授業）を行う際に、その質向上（効果的・持続的な実施）のために取り組んでいることについて尋ねたところ、「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」の割合が最も高く 23.0%となっている。次いで、「授業例・事業例など、他事例の情報を収集している（12.6%）」、「特に取り組んでいることはない（12.9%）」となっている。

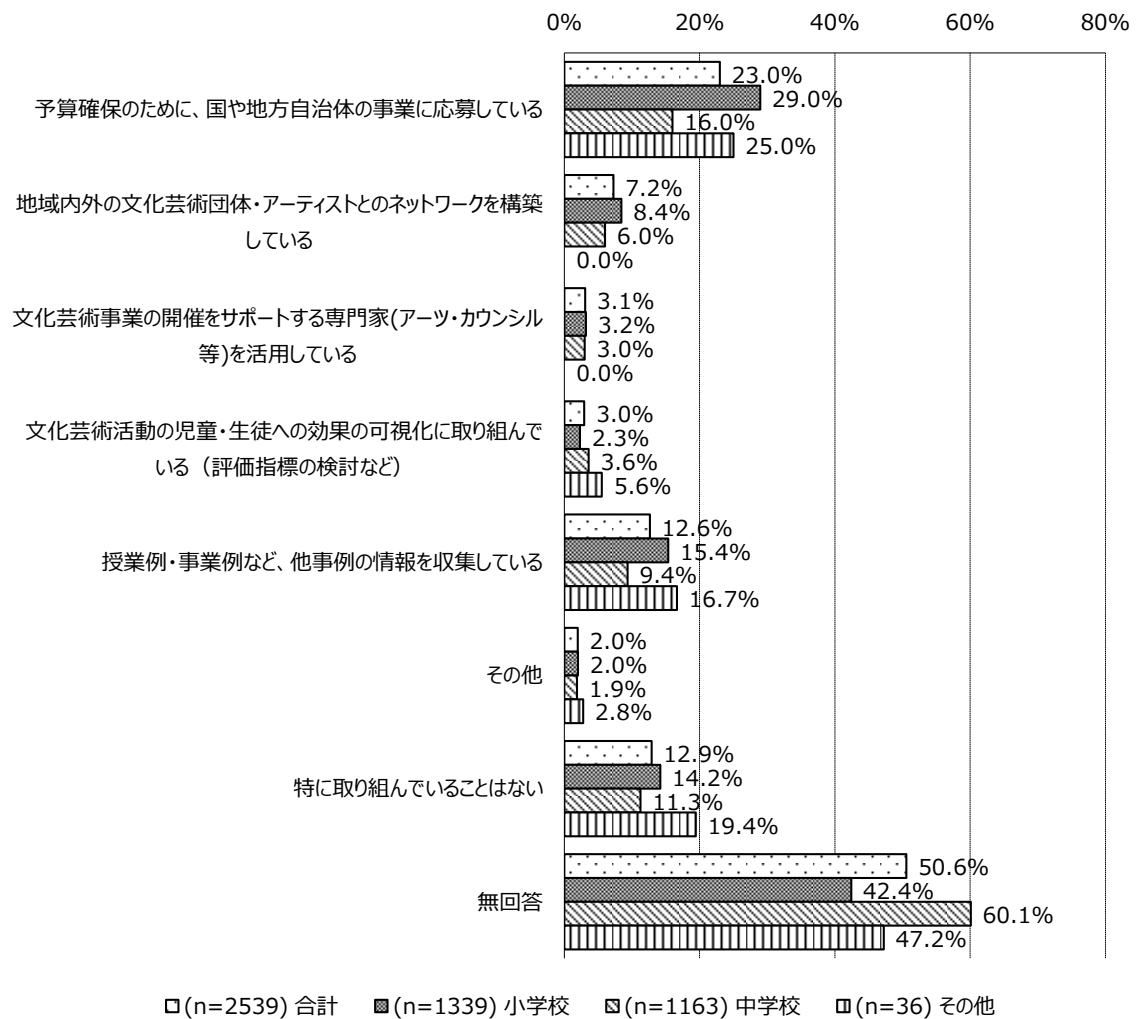
図表 2-33 効果的・持続的に事業実施するための工夫（複数回答）



2)学校種別

学校種別にみると、「小学校」において、「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」の割合がやや高い。

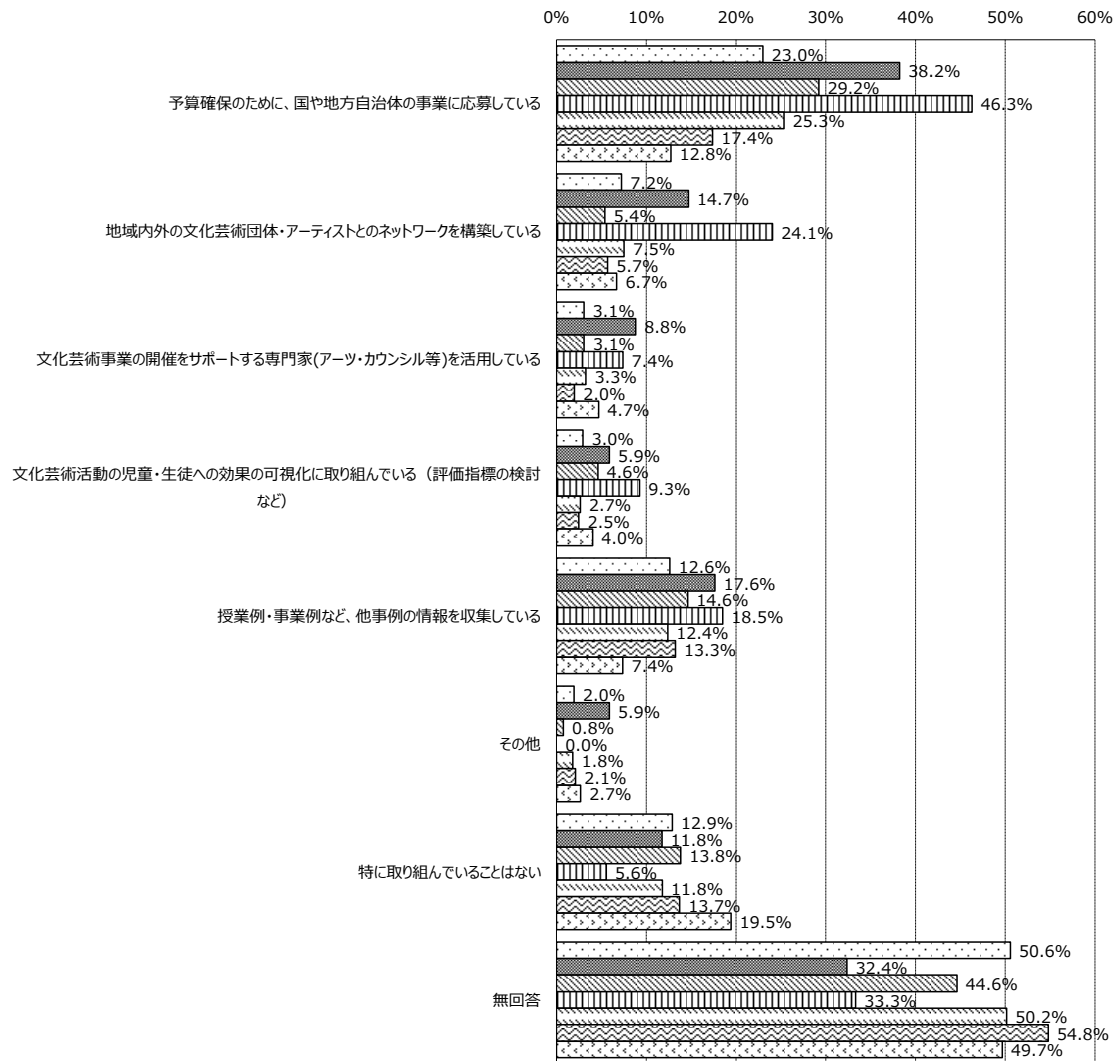
図表 2-34 【学校種別】効果的・持続的に事業実施するための工夫（複数回答）



3)自治体種別

自治体種別にみると、「特別区」において「予算確保のために、国や地方自治体の事業に応募している」、「地域内外の文化芸術団体・アーティストとのネットワークを構築している」が他と比較して相対的に高くなっている。

図表 2-35 【自治体種別】効果的・持続的に事業実施するための工夫（複数回答）



□(n=2539) 合計 ■(n=34) 政令指定都市 ▨(n=130) 中核市 ▩(n=54) 特別区 ▪(n=1314) 一般市 ▫(n=845) 町 ▬(n=149) 村

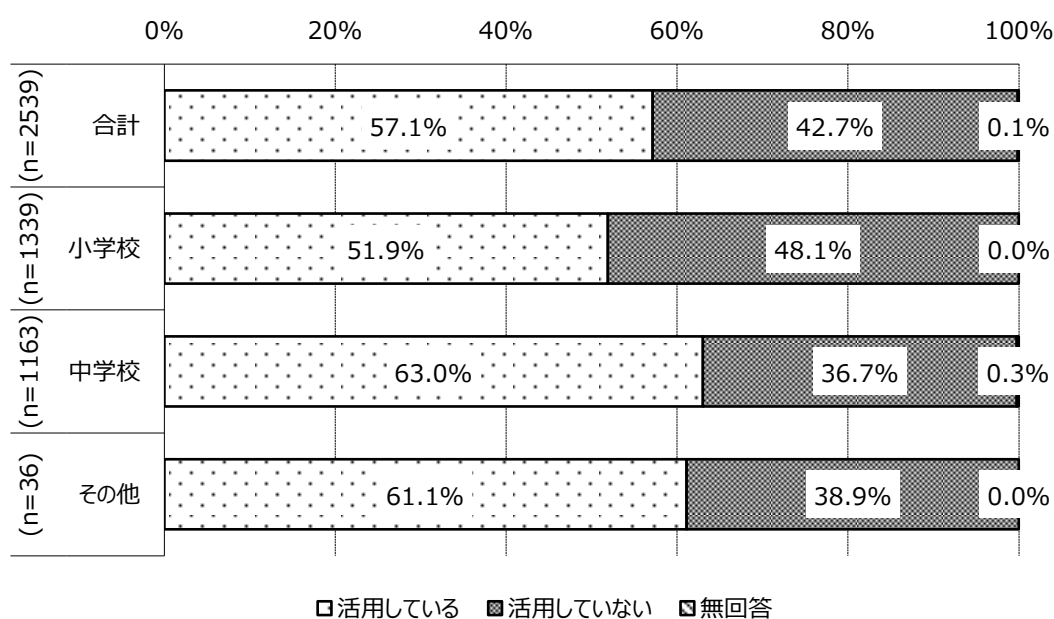
②文化芸術活動を行う際の ICT 機器活用状況

1)全体・学校種別

文化芸術活動を行う際のタブレット等の ICT 機器の活用状況について尋ねたところ、「活用している」の割合が最も高く 57.1%となっている。

学校種別にみると、「中学校」「その他」「小学校」の順で ICT を活用している割合が高くなっている。

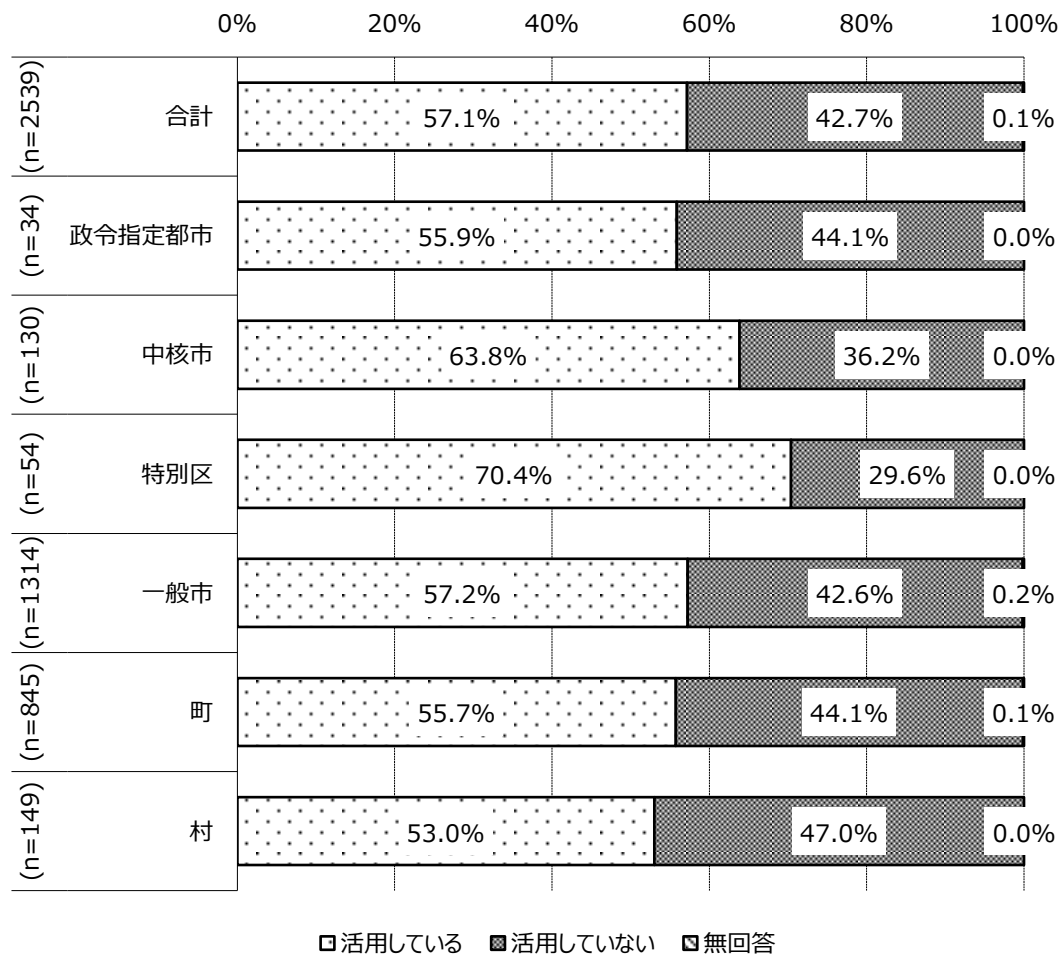
図表 2-5 文化芸術活動を行う際の ICT 機器活用状況（単一回答）



2)自治体種別

自治体種別にみると、「特別区」において活用割合が高く、「村」において活用割合が相対的に低くなっている。

図表 2-6 【自治体種別】文化芸術活動を行う際の ICT 機器活用状況（単一回答）



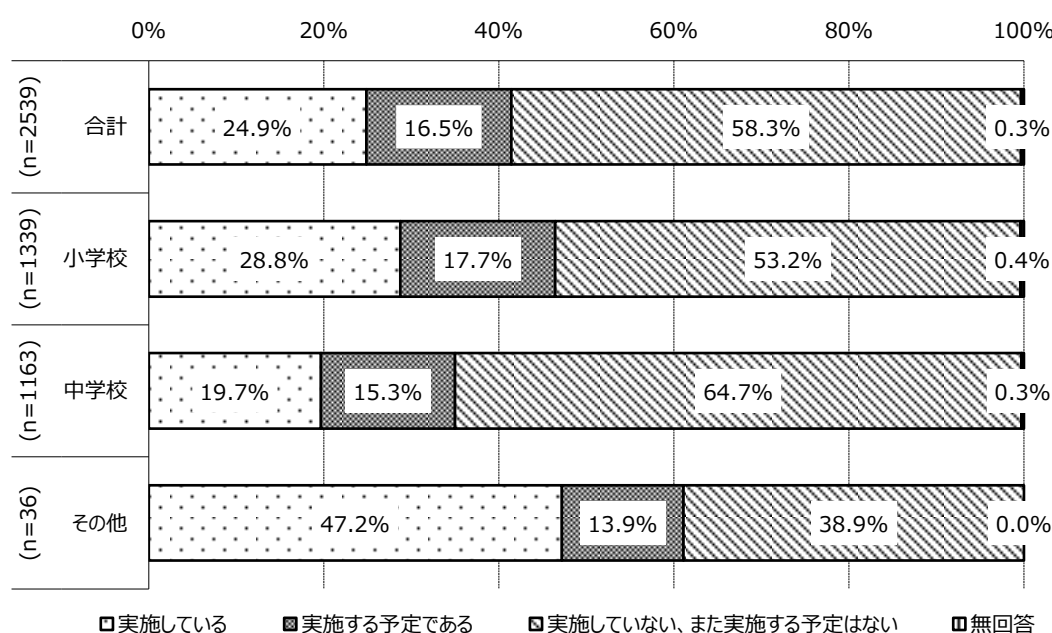
③教科横断的な学びへの取組状況

1)全体・学校種別

文化芸術活動と芸術教科以外の教科との間での教科横断的な学びへの取組状況について尋ねたところ、「実施していない、また実施する予定はない」の割合が 58.3%と過半数を超えた。「実施している」割合は 24.9%、「実施する予定である」割合は 16.5%となっている。

学校種別にみると、「その他」において「実施している」と「実施する予定である」を合わせた割合が 60%程度となっており、「小学校」「中学校」と比較すると高くなっている。

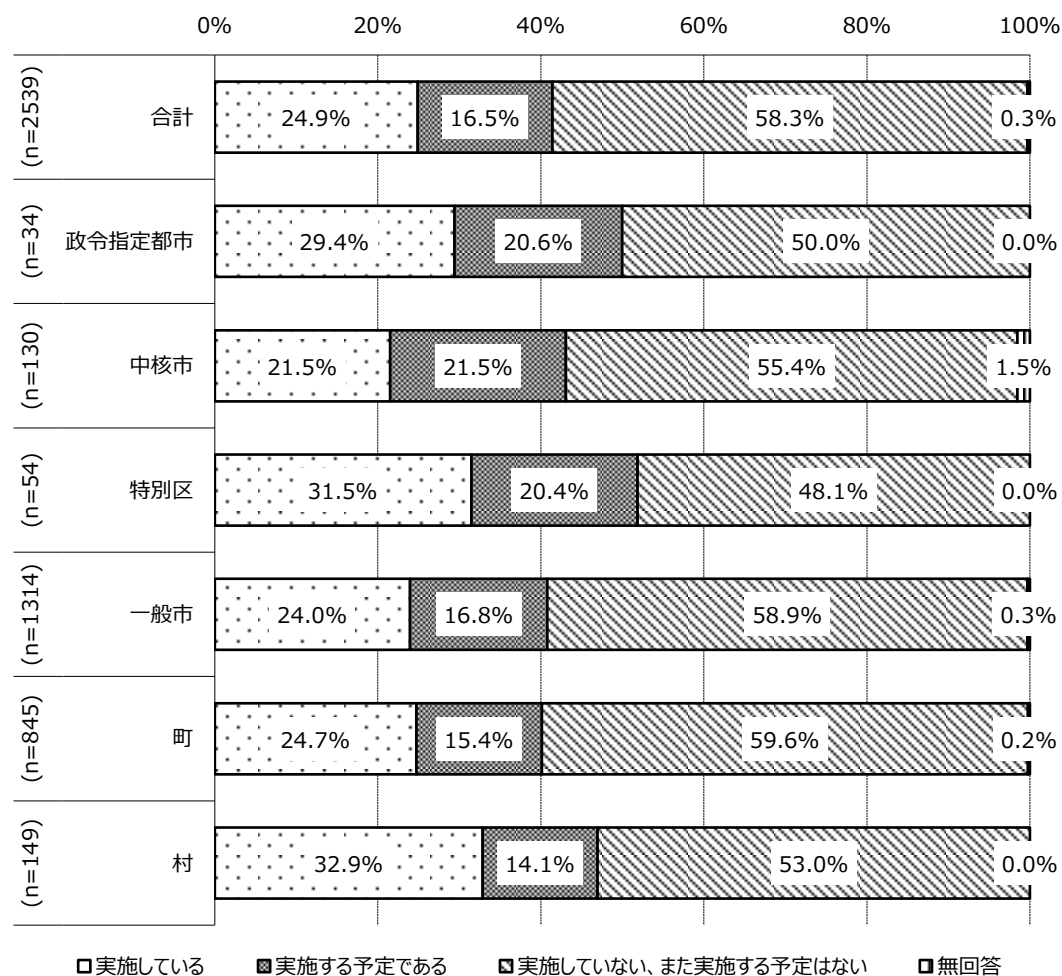
図表 2-11 教科横断的な学びへの取組状況（単一回答）



2)自治体種別

自治体種別にみると、「特別区」「政令指定都市」において「実施している」と「実施する予定である」を合わせた割合が5割程度となっており、他と比較して高い。また、「実施している」の割合をみると、「特別区」「政令指定都市」に加え「村」においても相対的に高くなっている。

図表 2-12 【自治体種別】教科横断的な学びへの取組状況（単一回答）

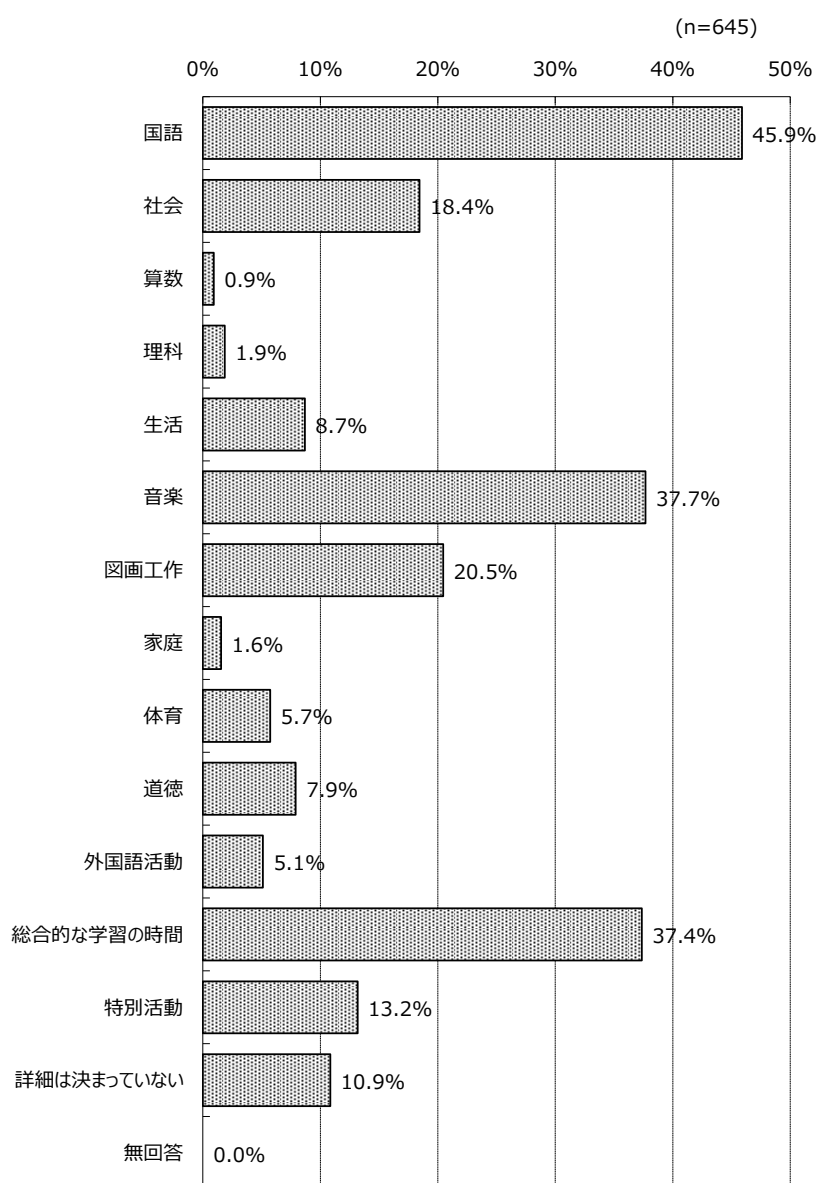


④教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科

1)小学校

小学校における教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科をみると、「国語」の割合が最も高く、45.9%となっている。次いで、「音楽（37.7%）」、「総合的な学習の時間（37.4%）」となっている。

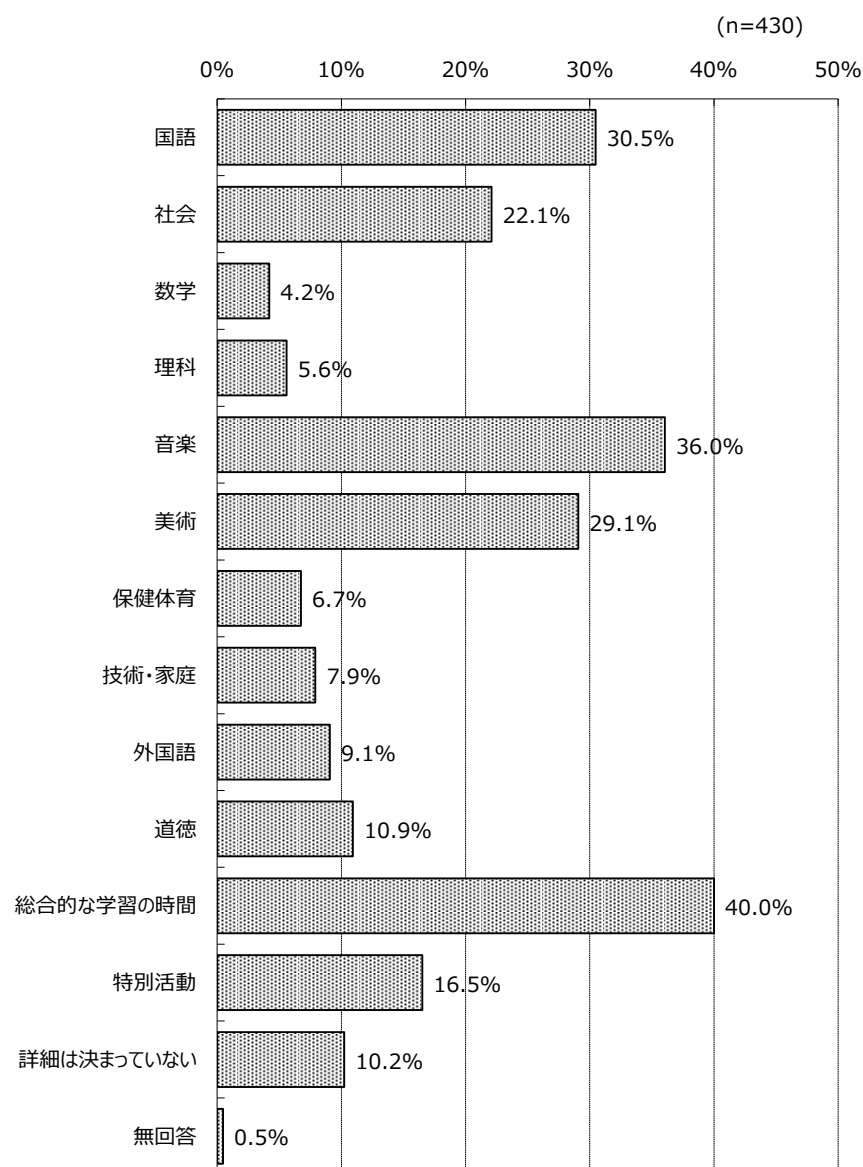
図表 2-16 教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科（小学校）（複数回答）



1)中学校

中学校における教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科をみると、「総合的な学習の時間」の割合が最も高く、40.0%となっている。次いで、「音楽（36.0%）」、「国語（30.5%）」となっている。

図表 2-16 教科横断的な学びに用いた教科、あるいは用いる予定の教科（中学校）（複数回答）

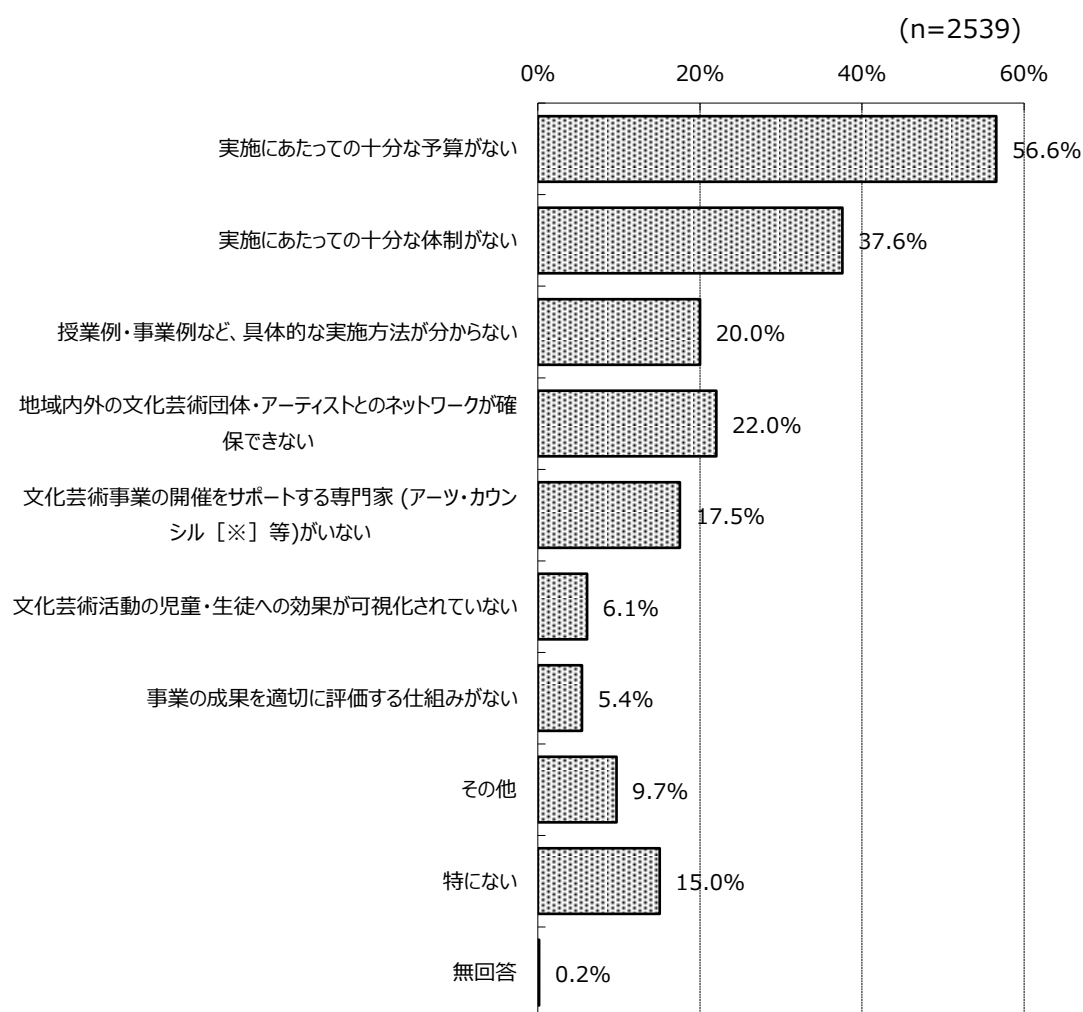


⑤文化芸術活動の質向上（効果的・持続的な実施）にあたっての課題

1)全体

文化芸術活動の効果的・持続的な事業実施にあたっての課題について尋ねたところ、「実施にあたっての十分な予算がない」の割合が最も高く 56.6%となっている。次いで、「実施にあたっての十分な体制がない（37.6%）」、「地域内外の文化芸術団体・アーティストとのネットワークが確保できない（22.0%）」となっている。

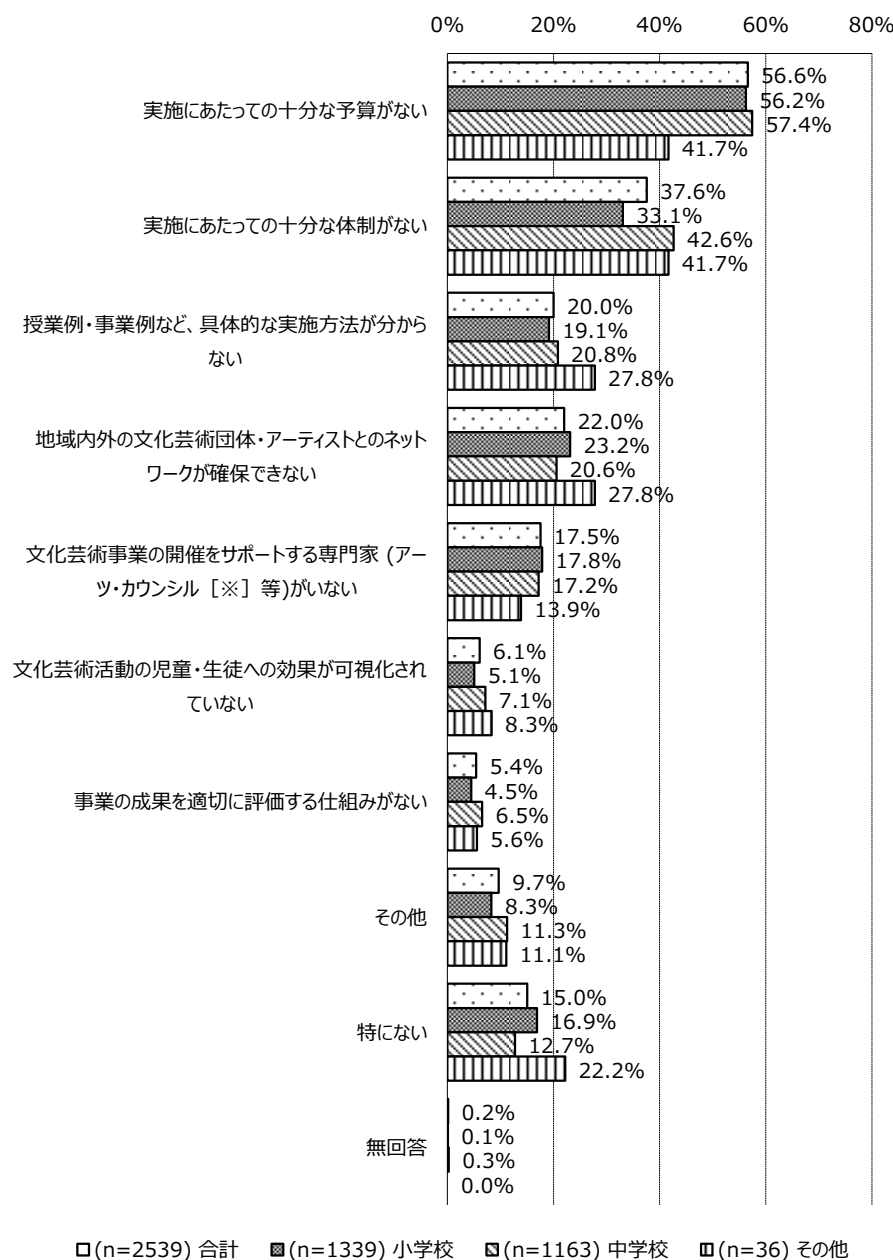
図表 2-16 効果的・持続的な事業実施にあたっての課題（複数回答）



2)学校種別

学校種別にみると、「中学校」において「実施にあたっての十分な体制がない」の割合が相対的に高くなっている。なお、サンプル数が少ないことに留意が必要だが、「その他」では「地域内外の文化芸術団体・アーティストとのネットワークが確保できない」「授業例・事業例など、具体的な実施方法が分からない」の割合も高い。

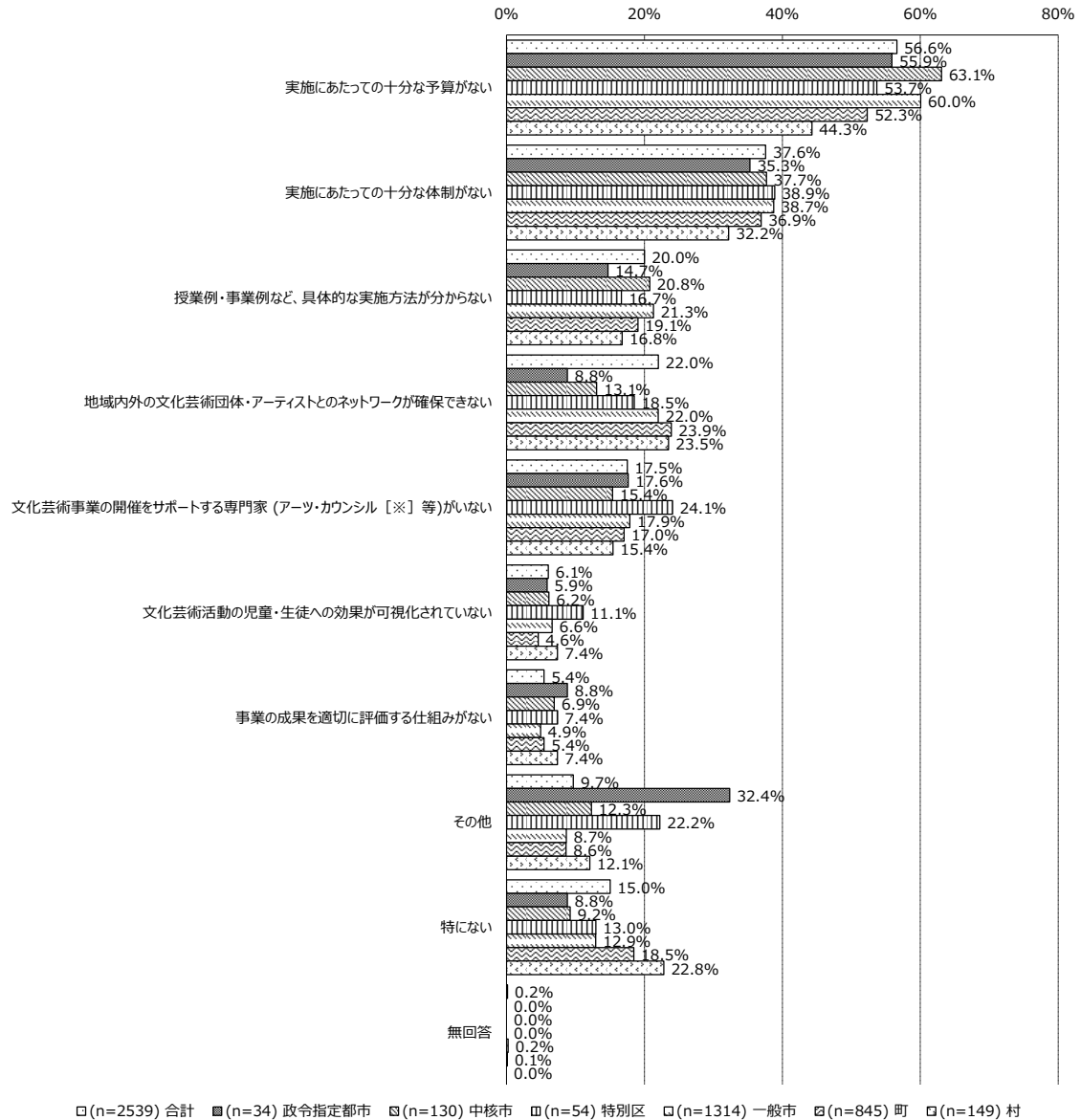
図表 2-17 【学校種別】効果的・持続的な事業実施にあたっての課題（複数回答）



3)自治体種別

自治体種別にみると、「特別区」では「実施にあたっての十分な予算がない」の割合が他と比較して低い傾向がある。一方で、地域内外の文化芸術団体・アーティストとのネットワークに課題を感じている傾向も確認できる。

図表 2-18 【自治体種別】効果的・持続的な事業実施にあたっての課題（複数回答）



（６）文化芸術活動の効果認識

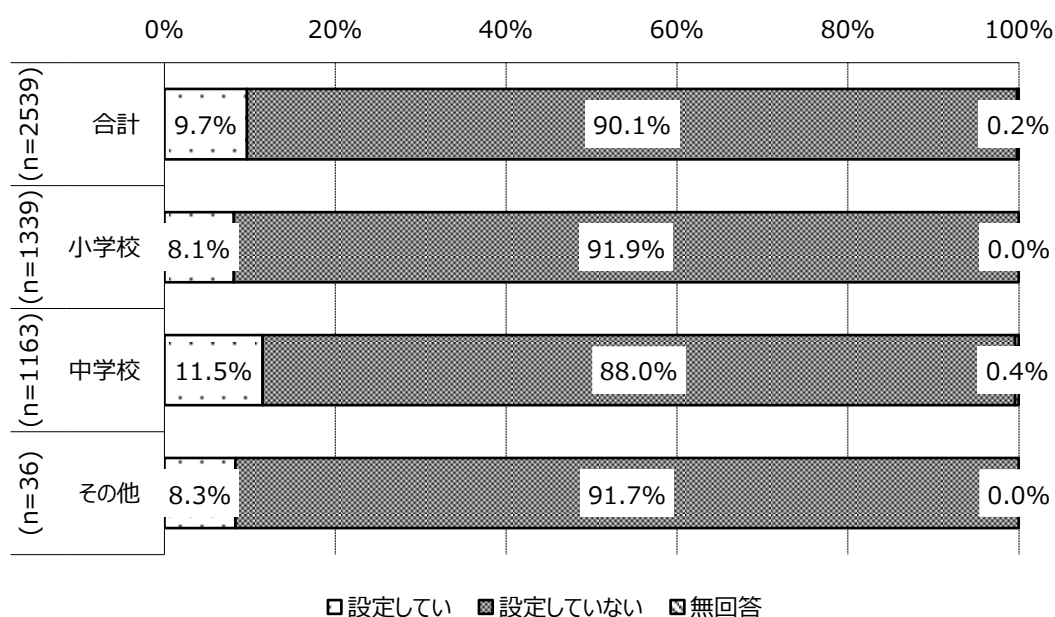
①文化芸術活動の事業評価、授業評価などにおける成果指標の設定

1)全体・学校種別

文化芸術活動の事業評価や、授業評価などにおける成果指標の設定について尋ねたところ、「設定していない」の割合が最も高く 90.1%となっている。

団体種別にみると、特段の傾向の差は見られなかった。

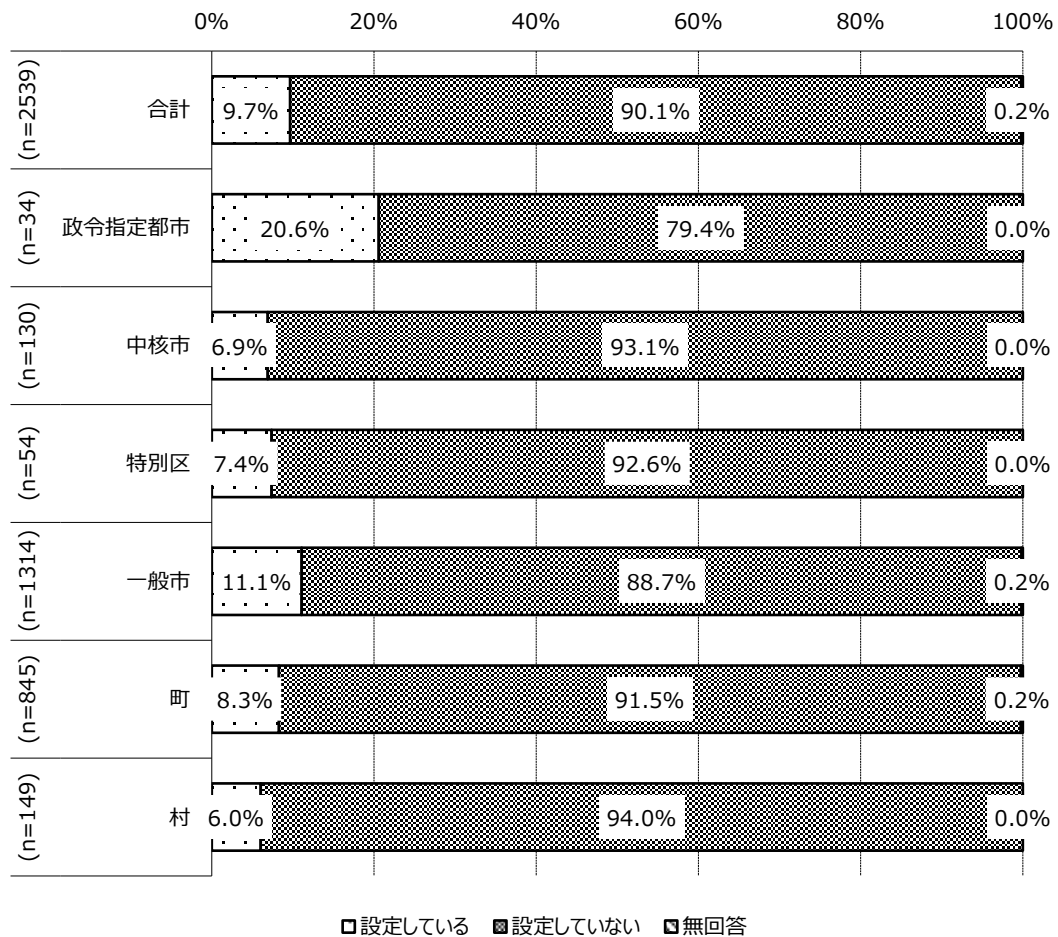
図表 2-20 【団体種別】事業評価、授業評価などにおける成果指標の設定（単一回答）



2)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」において、「設定している」の割合が他と比較して高くなっている。

図表 2-21 【自治体種別】事業評価、授業評価などにおける成果指標の設定（単一回答）

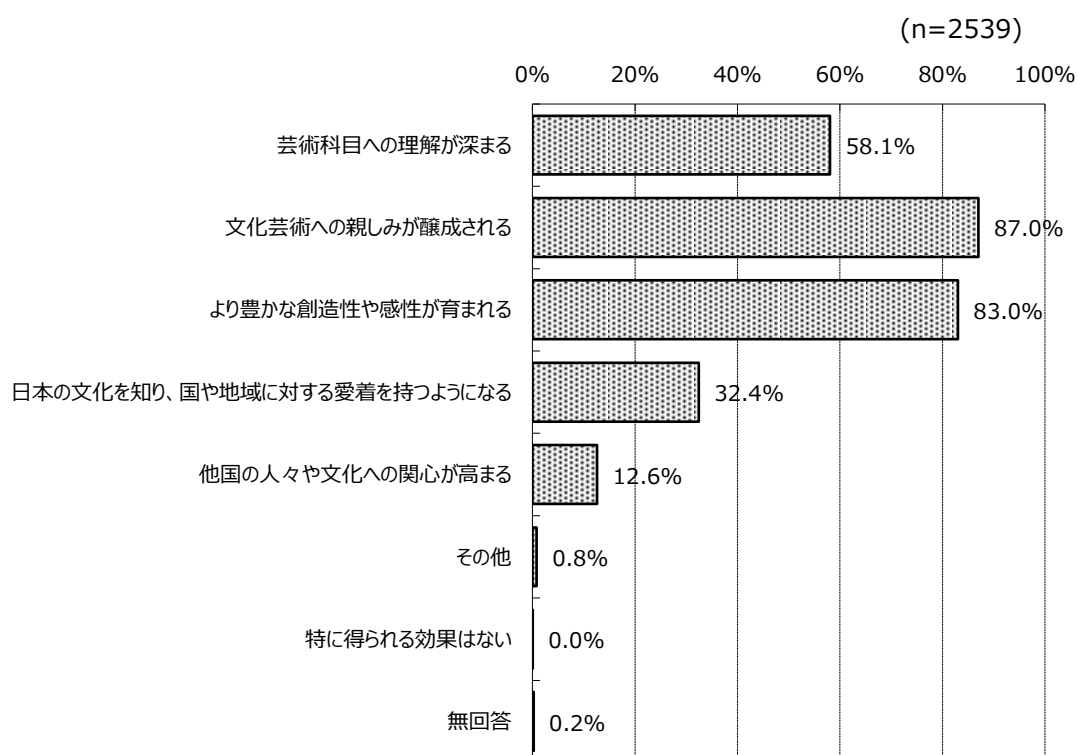


②文化芸術活動を通して得られる効果①（文化芸術への関心）

1)全体

文化芸術活動を通して得られる文化芸術への関心等の効果について尋ねたところ、「文化芸術への親しみが醸成される」の割合が最も高く 87.0%となっている。次いで、「より豊かな創造性や感性が育まれる（83.0%）」、「芸術科目への理解が深まる（58.1%）」となっている。

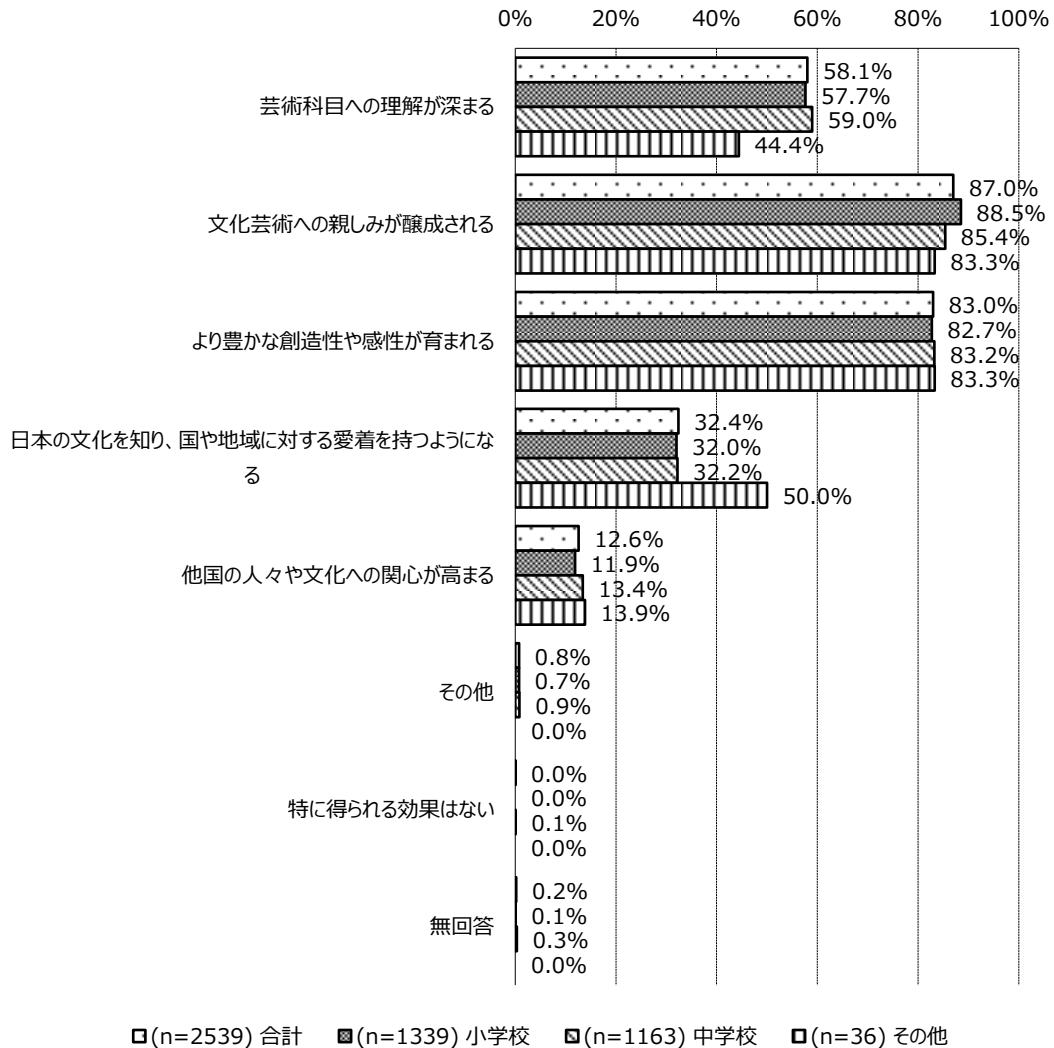
図表 2-22 文化芸術活動を通して得られる効果①（複数回答）



2)学校種別

「その他」を除き、学校種別では特段の傾向の差は見られなかった。

図表 2-23 【学校種別】文化芸術活動を通して得られる効果①（複数回答）

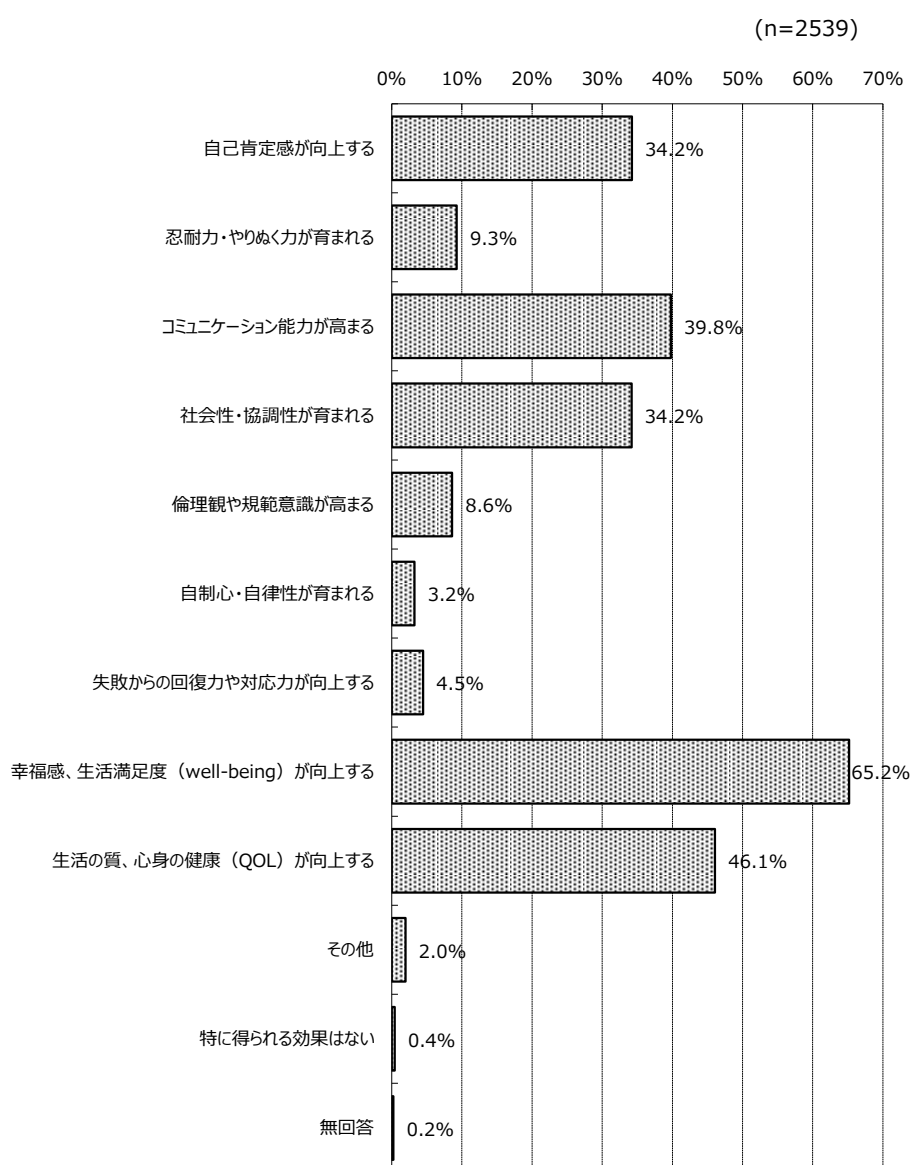


③文化芸術活動を通して得られる効果②（非認知能力や well-being、QOL）

1)全体

文化芸術活動を通して得られる非認知能力や well-being、QOL 等の効果について尋ねたところ、「幸福感、生活満足度（well-being）が向上する」の割合が最も高く 65.2%となっている。次いで、「生活の質、心身の健康（QOL）が向上する（46.1%）」、「コミュニケーション能力が高まる（39.8%）」となっている。

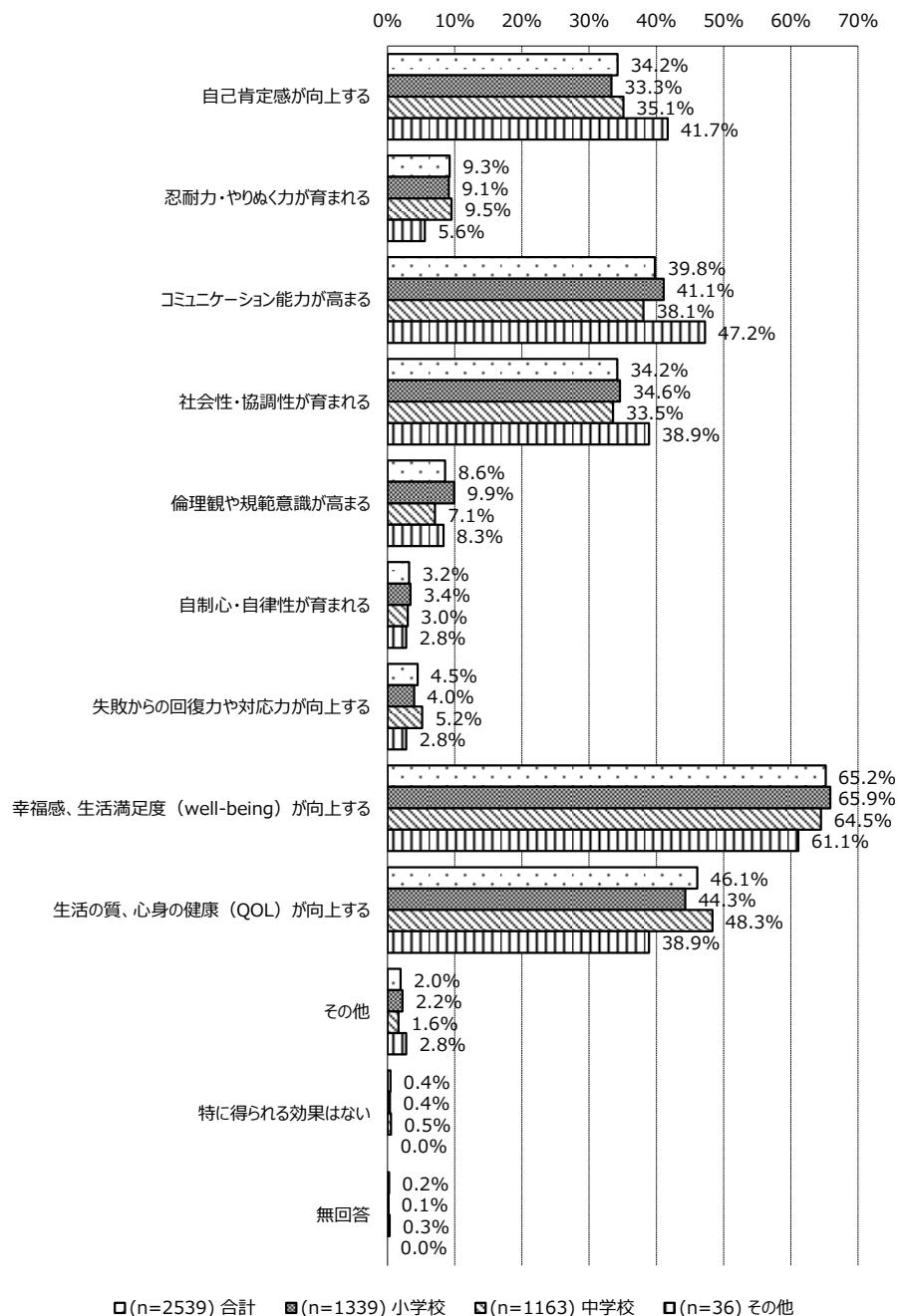
図表 2-25 文化芸術活動を通して得られる効果②（複数回答）



2)学校種別

学校種別にみると、大きな傾向の差はないものの、「中学校」において「生活の質、心身の健康（QOL）が向上する」の割合が他と比較して高くなっている。

図表 2-26 【学校種別】文化芸術活動を通して得られる効果②（複数回答）



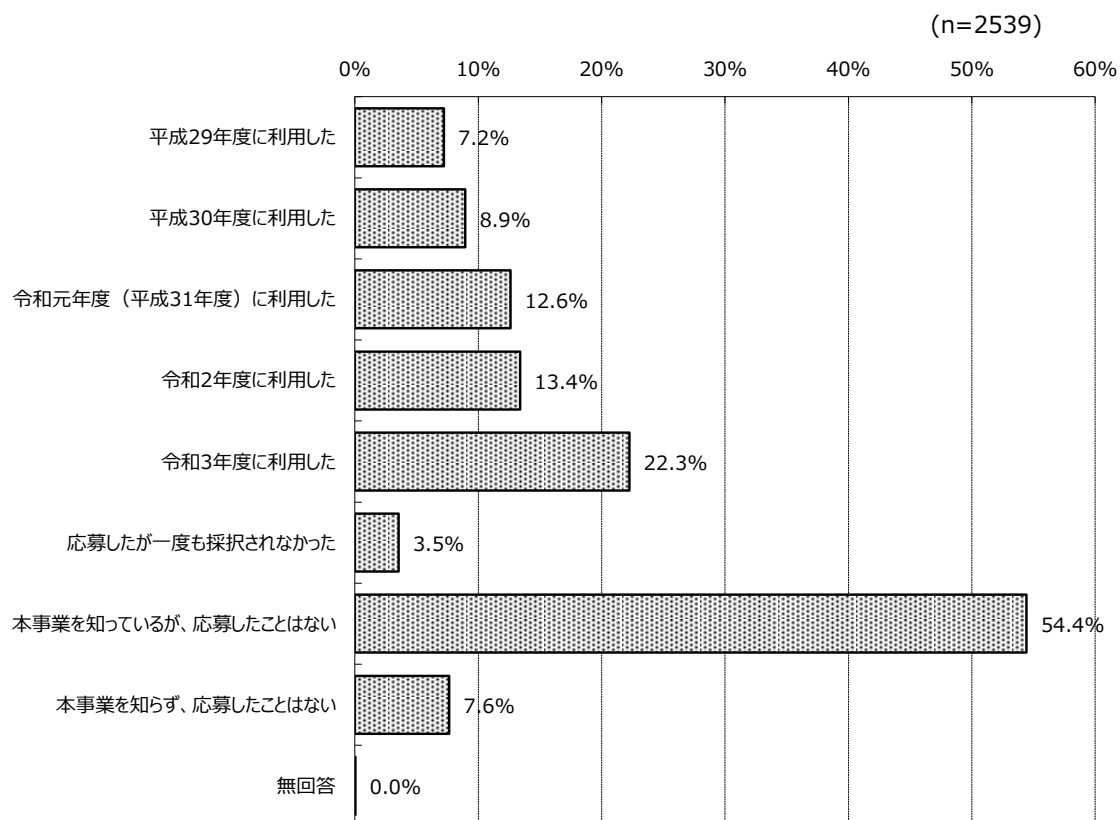
（７）文化庁「文化芸術による子供育成総合事業」について

①「文化芸術による子供育成総合事業」の利用実績

1)全体

「文化芸術による子供育成総合事業」の過去５年間^５（平成 29 年度～令和 3 年度（2017 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日））における利用実績について尋ねたところ、「本事業を知っているが、応募したことはない」の割合が最も高く 54.4%となっている。次いで、「令和 3 年度（22.3%）」、「令和 2 年度（13.4%）」となっている。

図表 2-36 過去５年間における利用実績（複数回答）

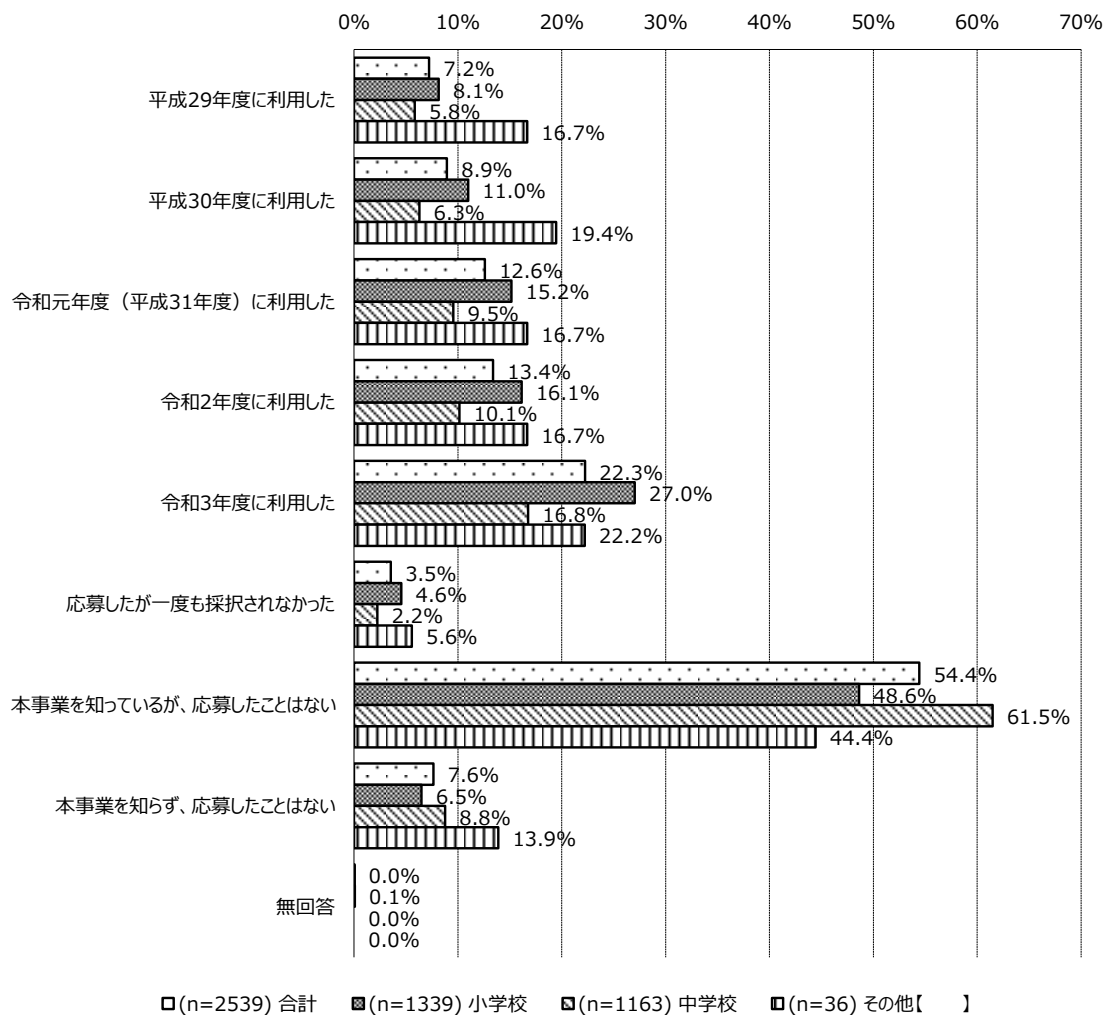


^５ 平成 29 年度・平成 30 年度は文化芸術による子供の育成事業、令和元年度～令和 3 年度までは文化芸術による子供育成総合事業となっている。

2)学校種別

学校種別にみると、いずれの年度も「中学校」よりも「小学校」において利用実績のある割合が高い。「中学校」では、「本事業を知っているが、応募したことはない」の割合が高くなった。

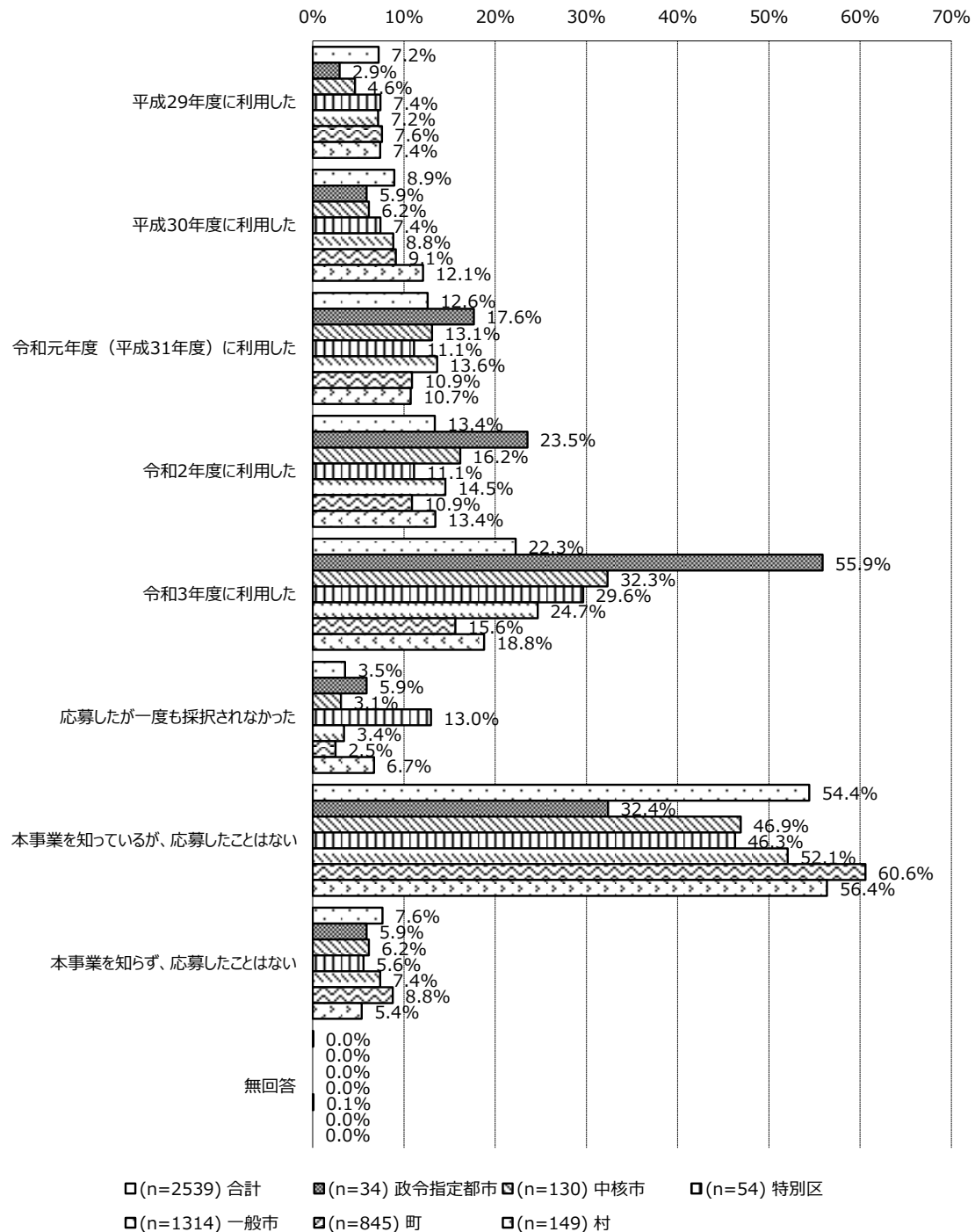
図表 2-37 【学校種別】過去5年間における利用実績（複数回答）



3)自治体種別

自治体種別にみると、「政令指定都市」において他と比較して利用実績のある割合が高い傾向にある。

図表 2-38 【自治体種別】過去5年間における利用実績（複数回答）

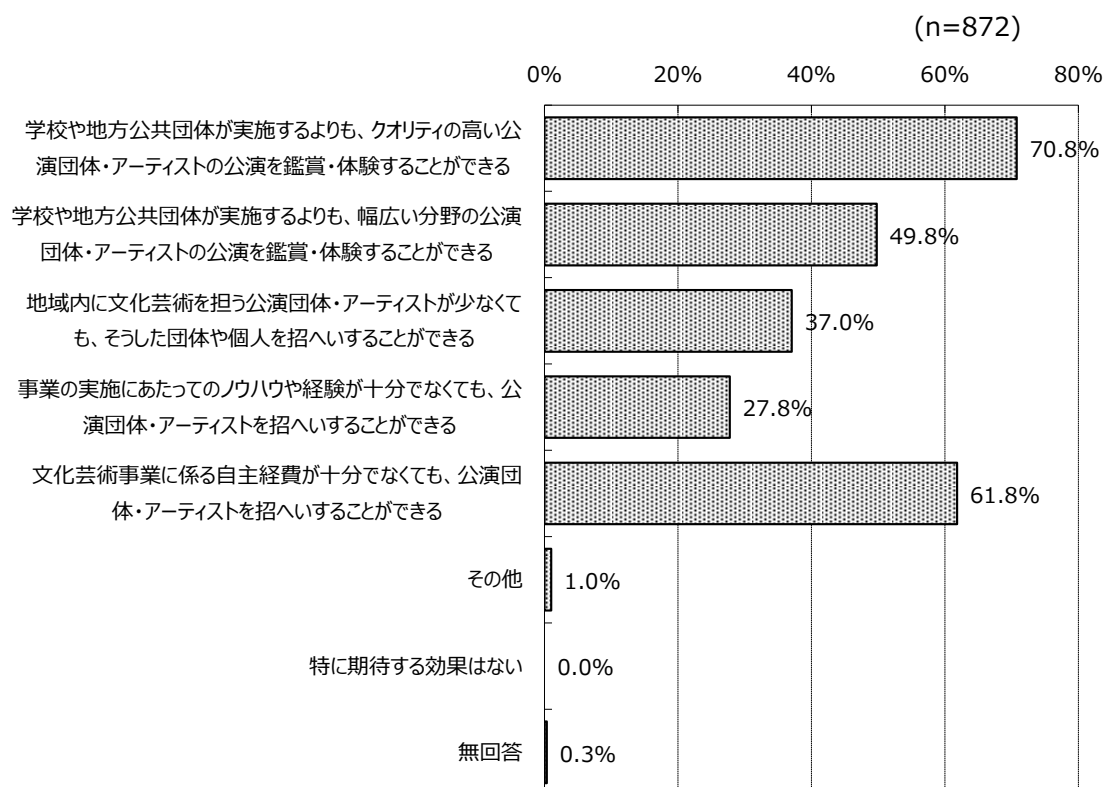


②「文化芸術による子供育成総合事業」を利用することで得られる利点

1)全体

学校が「文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）」を利用することで得られる利点について尋ねたところ、「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる」の割合が最も高く 70.8%となっている。次いで、「文化芸術事業に係る自主経費が十分でなくても、公演団体・アーティストを招へいすることができる（61.8%）」、「学校や地方公共団体が実施するよりも、幅広い分野の公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる（49.8%）」となっている。

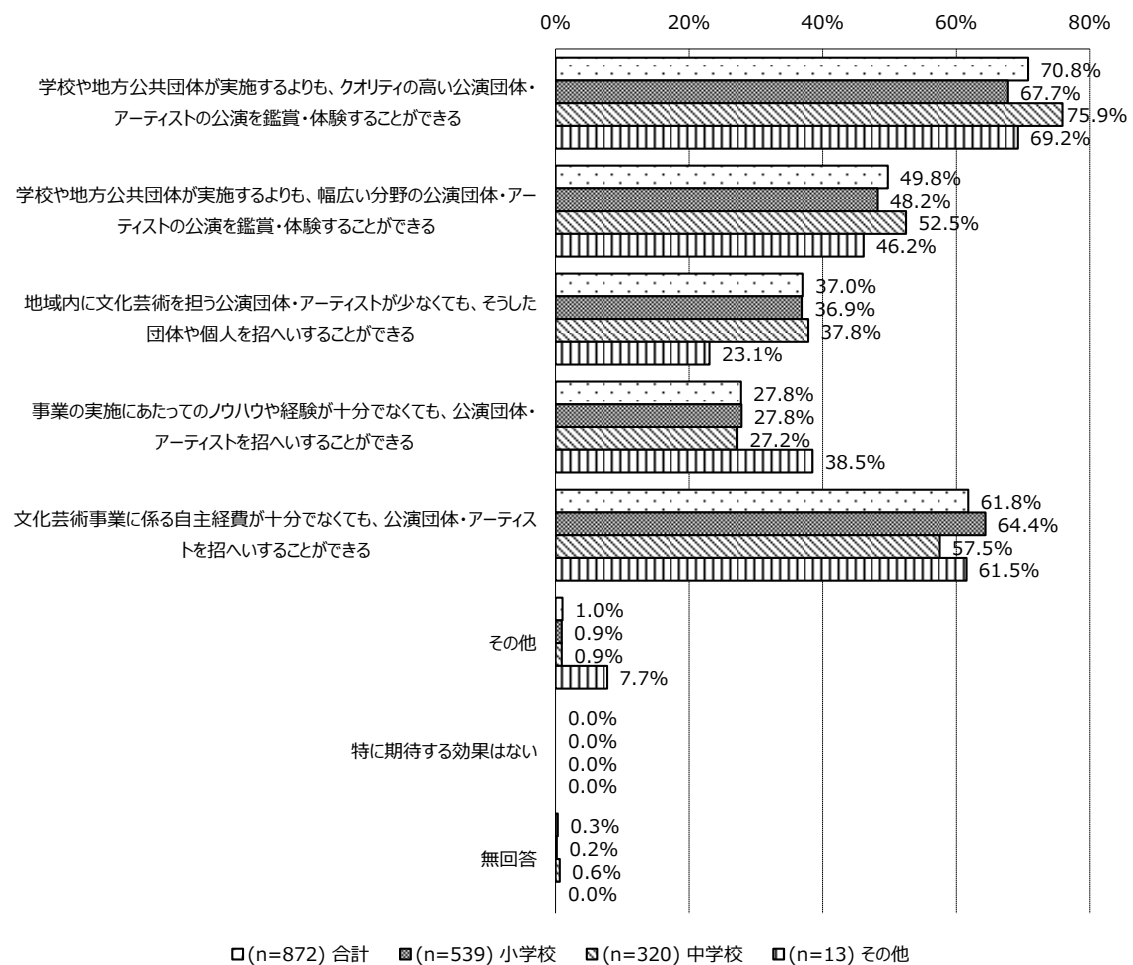
図表 2-39 「文化芸術による子供育成総合事業」で得られる利点（複数回答）



2)学校種別

学校種別にみると、「中学校」において、「学校や地方公共団体が実施するよりも、クオリティの高い公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる」、「学校や地方公共団体が実施するよりも、幅広い分野の公演団体・アーティストの公演を鑑賞・体験することができる」の割合が他と比較して高くなっている。

図表 2-40 【学校種別】「文化芸術による子供育成総合事業」で得られる利点（複数回答）

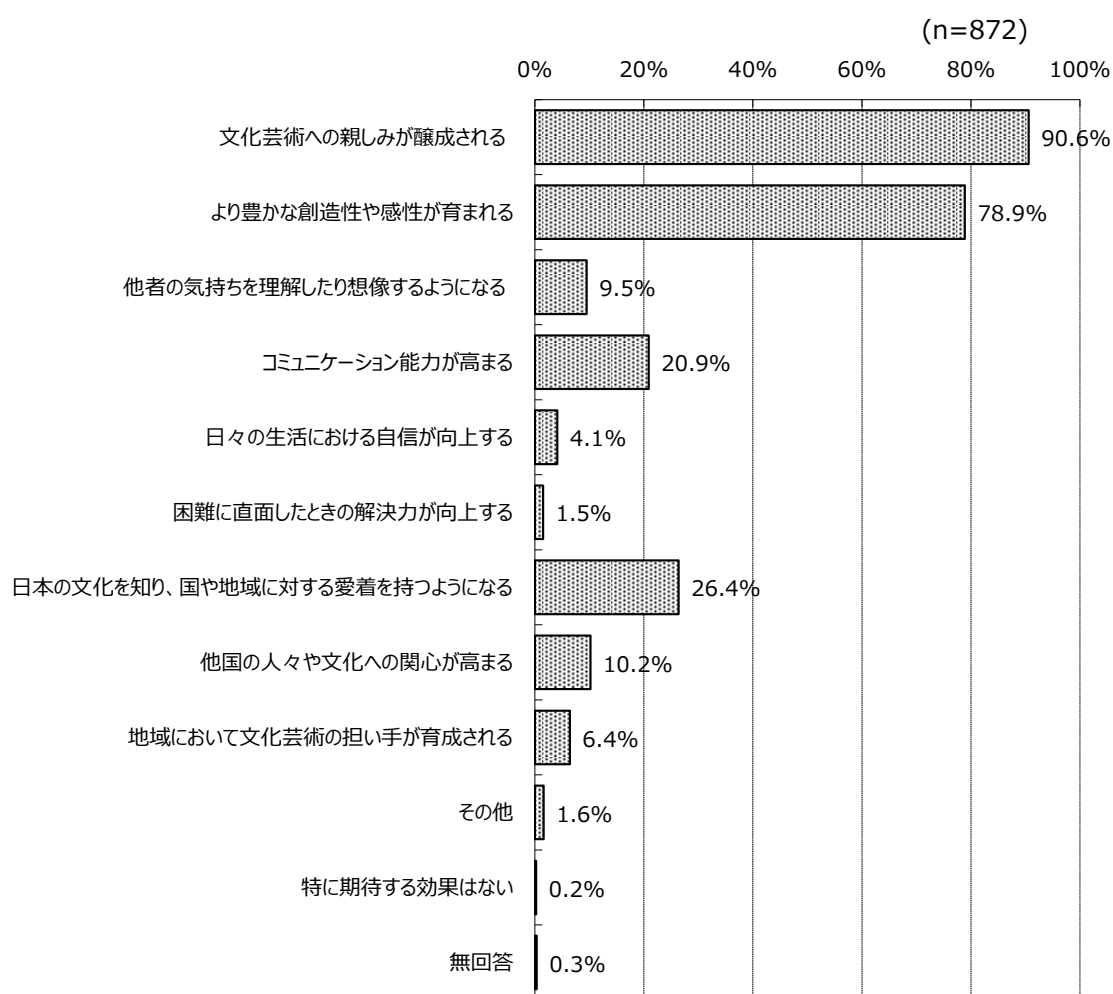


③「文化芸術による子供育成総合事業」の子供への効果

1)全体

子供が「文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）」に参加することで得られる効果について尋ねたところ、「文化芸術への親しみが醸成される」の割合が最も高く 90.6% となっている。次いで、「より豊かな創造性や感性が育まれる（78.9%）」、「日本の文化を知り、国や地域に対する愛着を持つようになる（26.4%）」となっている。

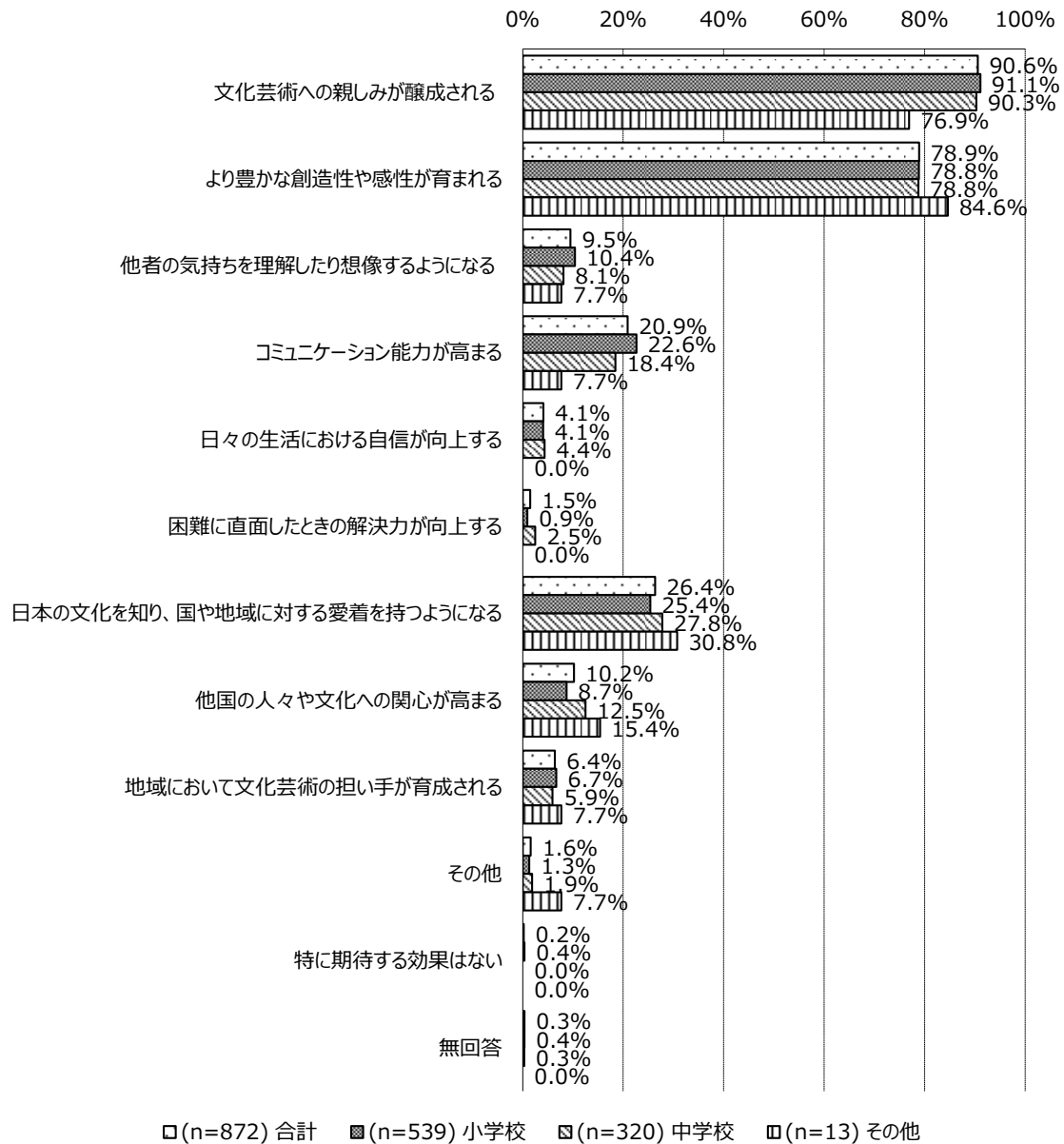
図表 2-41 「文化芸術による子供育成総合事業」の子供への効果（複数回答）



2)学校種別

学校種別では特段の傾向の差は見られなかった。

図表 2-42 【学校種別】「文化芸術による子供育成総合事業」の子供への効果（複数回答）



3)子供への効果に関する具体的な内容

「文化芸術による子供育成総合事業」の子供への効果について、その具体的な内容についての自由記述回答を求めた。子供への効果として特に回答割合の高かった、「文化芸術への親しみが醸成される」「より豊かな創造性や感性が育まれる」の具体的な内容としては、以下のような回答が寄せられた。

a) 「文化芸術への親しみが醸成される」に関する自由回答例（一部抜粋、編集）

■本物（一流）に触れる感動があった

- ・ 普段の学校生活では触れることができない生の音楽・演劇・伝統文化に直に触れることにより、その素晴らしさを実感することができる。
- ・ 打楽器演奏者の表現や技術は、特に、本校吹奏楽部のモデルとなり、高みを目指す子どもたちの姿が見られた。
- ・ 直接の良質な文化芸術に触れる機会を多く持つ機会で、その良さを感受する感性が育っていくと考える。本事業を体験した学年は、音楽を主とする表現活動への関心が高い。昨年度経験した学年の学校評価（児童アンケート）の「表現」の評価項目で93%の児童が肯定的回答を得ることができた。

■直接体験することで興味関心が高まった

- ・ 地方では、文化芸術の講演や体験があまり身近でない生徒も多い。感想に「初めて鑑賞・体験したが・・・」と書く生徒も多いので、学校で実施することで文化芸術に触れる機会を保障することが大切であると考えます。
- ・ 画像のアニメーション化やプログラミングによるアート作品の作製は、興味はあっても、とても高度な技術が必要と思われることから、「自ら取り組もうとする」意欲につながりにくいが、専門の講師が目の前で、また、親しみを持って指導していただけることから、意欲的に講師に質問して解決していこうという姿が見られた。

■学校（授業）以外でも文化芸術に触れるようになった

- ・ また演奏会を見に行きたいと言っており、実際に演奏された曲を自分で鑑賞していた。
- ・ 実際に演奏を聴くことで感動し、自分でもコンサートに行ってみたいという感想が聞かれた。

b) 「より豊かな創造性や感性が育まれる」に関する自由回答例（一部抜粋、編集）

■参加を通して想像力が豊かになった

- ・ 高度な文化芸術を鑑賞する・体験すること自体の効果に加えて、体育館という馴染みのある場所が、非日常空間に変わっていく様子を体感することで創造力・想像力が一層広がった。生徒が自然と文化芸術の世界に惹き込まれていく契機となった。
- ・ 日頃、演奏家による演奏を生で聴く機会がほとんどない地域にいる子どもたちにとって、生の演奏を聴き、肌で感じることで、豊かな感性が育まれると感じた。
- ・ 影絵劇を鑑賞した際の児童の反応がとてもよかった。VFX や CG など驚くような映像に慣れている現代の児童にとって、影絵の世界で想像を広げることは、感性の育ちに大いに役立っていると感じられた。

■体験後の表現方法が豊かになった

- ・ 能を体験することにより、歩き方や礼の仕方など、所作について意識する児童が出てきた。
- ・ 役割演技を体験し発表することで、以前より積極性が見られるようになったり、感情表現が豊かになった。
- ・ 普段はなかなか触れることができない外国語の曲を聞けて良かった。音楽のすばらしさを体感することができた。言葉を丁寧に発音することの大切さを学んだ等の感想があった。
- ・ 学習発表や文化祭などの取組内容・表現手段に工夫が見られた。

■体験後、真似する生徒が増えた

- ・ 狂言師の動作や言葉の発し方をまねている生徒がいた。
- ・ 楽器等に触れることで、その演奏をまねしたり、身体を動かしたりしている。
- ・ 演奏者の表現を真似しようとしたり、演奏された音楽を再現しようとする中で、工夫の領域が広がった。
- ・ 楽器の演奏方法について解説があったのでそれを真似している姿が見られた。児童なりのアレンジも加えながら演奏の真似をしていた。

■固定観念から解放された

- ・ 今まで自分で気がつかなかった感性に気づいた生徒が多くいたことが、鑑賞後の感想から見て取れた。
- ・ アニメーションやプログラミングの作品の成り立ちを想像でき、メディアの世界の見方について、より豊かなものの見方ができるようになった。

（８）学校における文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況の試算

令和３年度時点の学校における文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況について、学校種別にみると、中学校では 29.6%であり、小学校では 39.0%であった。また、学年別でみると、小学校では学年があがるほど文化芸術鑑賞・体験機会を得ている一方で、中学生ではいずれの学年も３割程度となっており、中学３年生でややパーセンテージが低くなる傾向が見られた。

その割合から享受できた生徒数を試算すると、令和３年度では中学生総数で約 96 万人、小学生総数で 243 万人となる。各年度におけるアンケートへの回答状況に左右される点には留意が必要だが、令和２年度は中学生総数で約 64 万人・小学生総数で 170 万人、令和元年度は中学生総数で約 114 万人・小学生総数で 214 万人であったことを踏まえると、令和３年度においては享受できた割合が戻ってきているといえる。

図表 ２-43 学校における文化芸術鑑賞・体験機会に関する事業の学年別の享受状況の試算（令和３年度）

学年	①学年別の享受状況	②全生徒数	③享受できた生徒数
中学校総数	29.6%	3,229,697	957,399
中学校３年	27.7%	1,078,156	298,567
中学校２年	30.9%	1,079,907	333,901
中学校１年	30.3%	1,071,634	324,909
小学校総数	39.0%	6,223,395	2,425,715
小学校６年	47.6%	1,064,456	506,989
小学校５年	43.5%	1,062,309	462,415
小学校４年	40.3%	1,043,698	420,964
小学校３年	35.9%	1,028,188	368,836
小学校２年	33.7%	1,017,256	342,836
小学校１年	32.8%	1,007,488	330,432

注 1) 学年別の享受状況は「１）令和３年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会の提供状況」と「２）令和３年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会を提供している中学校・小学校における学年別の事業の実施率」を乗じた値である。詳細は次頁の「参考」をご参照。

注 2) 全生徒数は文部科学省「学校基本調査」令和３年度値を用いた。

①参考：令和3年度学年別の文化芸術鑑賞・体験機会の提供状況の算出方法

1)令和3年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会の提供状況

団体種別	提供している		提供していない	
	回答数	割合	回答数	割合
中学校	446	38.35%	717	61.65%
小学校	754	56.31%	584	43.61%
合計	1,200	47.98%	1,301	52.02%

注1)「提供している」は、「問3 令和3年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会の提供事業の実施状況」で選択肢1～3を回答した回答数及び割合である。

注2)「提供していない」は、「問3 令和2年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会の提供事業の実施状況」で選択肢4～5を回答した回答数及び割合である。

注3) なお、学校種別「その他」及び「無回答」については除外している。

2)令和3年度における子供対象の文化芸術鑑賞・体験機会を提供している中学校・小学校における学年別の事業の実施率

	事業実施率
中学校総数	77.3%
中学3年生	72.2%
中学2年生	80.6%
中学1年生	79.1%
小学校総数	69.2%
小学6年生	84.6%
小学5年生	77.3%
小学4年生	71.6%
小学3年生	63.7%
小学2年生	59.9%
小学1年生	58.2%

注1)「問4⑦参加した全生徒・児童数」の「A:本事業に参加した学年」の回答から学年別の実施率を算出している。なお、学校種別「その他」及び「無回答」については除外しているため、「(2)③6)実施した学年」のパーセンテージとは一致しない。

第3章 児童・生徒向けアンケート調査

1. 児童・生徒向けアンケート調査 実施概要

(1) 実施目的

全国の小・中学校における文化芸術活動の鑑賞・体験の効果について児童・生徒本人の実感を把握するため、児童・生徒向けアンケート調査を実施した。

アンケートの対象者は文化庁「文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）」を利用した学校の児童・生徒とし、巡回公演事業の直後にアンケート調査を実施する形とした。

アンケートでは、児童・生徒の、巡回公演事業以前の文化芸術に関する興味関心の状況や、文化芸術に関する活動の実態について把握したうえで、巡回公演事業の感想及びその時点での文化芸術に対する意識について尋ねた。

(2) 調査方法

調査結果は以下のとおりである。

図表 3-1 調査方法

項目	内容
調査対象数	全体：10校 〔内訳〕 小学校：5校 中学校：4校 義務教育学校：1校
有効回答数	全体：1,201名 〔内訳〕 小学生：237名 中学生：963名 ※その他・無回答：1名
調査方法	・ 本調査は、実施時期の制約上、12月中旬以降に本公演を実施する学校を対象に実施した。 ・ 広域ブロック（北海道・東北、関東、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）、学校種別（小学校、中学校、義務教育学校）、公演の種目の条件のバランスを鑑みて対象校10校を選定した。 ・ 調査対象校に対しては、電子データのメール送付または紙調査票の郵送への送付をした。 ・ 対象校の児童生徒には対象校の教員より紙面で配布し、回答を収集した。なお、一部の調査対象校では、Google Forms を活用して児童生徒に回答いただいた。
調査期間	令和4年12月15日（木）～ 令和元年1月31日（火） ※アンケートは本公演実施より数日以内の実施を依頼しており、実施日は各対象校の本公演実施時期による。
調査項目	1. 子どもの鑑賞、体験機会の状況について ・ 巡回公演事業以前の文化芸術に対する興味・関心の状況を把握するため、芸術教科への意識や文化芸術に関する活動状況（習い事、劇場・美術館への訪問など）を尋ねた。

項目	内容
	2. 学校で行う文化芸術の鑑賞・体験の評価について ・ 巡回公演事業を実施したことの効果や事業後の意識について把握するため、公演の感想・評価や、公演後の文化芸術に対する意識（楽しかったか、またやってみたいか、劇場等に足を運びたいか等）を尋ねた。 3. 学校で行う文化芸術の鑑賞・体験による行動変容について ・ 巡回公演事業後が子どもの行動変容にどのような影響を与えたか把握するため、文化芸術に対する興味・関心の状況を把握するため、巡回公演事業の感想、公演をきっかけにとった行動について尋ねた。
調査結果をみる上での注意事項	・ 本文、表、グラフなどに使われる「n」は、各設問に対する回答者数を指す。 ・ 百分率（％）の計算は、小数第 2 位を四捨五入し、小数第 1 位まで表示している。したがって、四捨五入の影響で、％を足し合わせて 100％にならない場合がある。 ・ 本文中の％の小計は、各項目の値を四捨五入した上で足し合わせている。 ・ 本文、表、グラフは、表示の都合上、調査票の選択肢等の文言を一部簡略化している場合がある。 ・ 属性別の傾向をみるためにクロス集計を行っている。クロス集計の属性のうち、「合計」は単純集計の値と一致する。

2. 児童・生徒向けアンケート調査結果のサマリー

(1) 子供の鑑賞・体験機会の状況について

巡回公演事業以前の子供の意識として、芸術教科に対しては好意的な捉え方をする者の割合が9割を超えている。一方で、習い事をしたことがある（現在している場合も含む）割合は3.5～4.5割、劇場や美術館に行く（よく行く／時々行く）割合が1～1.5割であった。

- ・ 巡回公演事業以前の子供の意識として、音楽の授業は楽しいと回答した者、美術・図画工作の授業は楽しいと回答した者の割合はいずれも9割を超えており、芸術教科に対しては好意的な意識を持つものが多い。
- ・ 現在あるいは過去に習い事をしたことがある者の割合は、小学生で4.5割程度、中学生で3.5割程度であった。
- ・ 劇場での演劇やコンサートに行く頻度については、小中学生ともに「よく行く」「時々行く」を合わせて1割前後にとどまり、反対に「ほとんど行かない」「今まで一度も行っていない」を合わせて7割程度であった。
- ・ 美術館の展覧会に行く頻度も同様で、「よく行く」「時々行く」を合わせた割合が1～1.5割程度で、「ほとんど行かない」「今まで一度も行っていない」を合わせて6.5～7割程度であった。

(2) 学校で行う文化芸術の鑑賞・体験の評価について

巡回公演事業について、楽しかったという肯定的な評価の割合は8.5割程度であった。巡回公演後の意識として、「文化芸術を友達・家族に勧めたい（約7.5割）」「学校での芸術教科が楽しみになった（6.5～7割）」「自分でも文化芸術活動をしたい（約6.5割）」となった。全体として小学生の方が肯定的に回答する傾向があり、また巡回公演事業に文化芸術に親しんでいる子供ほど肯定的に回答する傾向があった。

- ・ 巡回公演事業は楽しかったかについて、肯定的な回答をした者が8.5割程度であった。なお演目別にみると、「舞踊」において最も肯定的な回答割合が高く、「伝統芸能」「音楽」と続いた。
- ・ 巡回公演事業は楽しかったかについて、巡回公演事業以前の文化芸術への意識や活動状況別にみると、もともと音楽や美術・図画工作の授業を楽しんでいる子供ほど、巡回公演事業での体験を「楽しかった」と評価する割合が高い傾向があった（特に音楽）。同様に、習い事をしている・したことがある子供も、巡回公演事業での体験を好意的に評価する傾向があった。
- ・ 文化芸術体験を友達や家族に勧めたいかについて、肯定的な回答をした者は小中学生ともに7.5割程度であった。
- ・ 劇場や美術館に行って再度文化芸術体験をしたいかについて、肯定的な回答をした者は小中学生ともに7.5割であった。
- ・ 自分でも文化芸術活動（楽器を弾いたり歌ったり）をしたくなったかについて、肯定的な回答をした者は小中学生ともに6.5割程度であった。

- ・ 学校の芸術教科の授業が楽しみになったかについて、肯定的な回答をした者は小中学生ともに 6.5～7 割程度であった。
- ・ 上記はいずれも、小学生の方が肯定的な回答割合がやや高い傾向があった。

（３）学校で行う文化芸術の鑑賞・体験による行動変容

巡回公演事業を含む学校での文化芸術鑑賞・体験をきっかけに行動変容を起こした子供の割合は高くはないが、「自分で文化芸術に関することを始めた」という者が 2.5 割程度は存在しており、子供の行動に影響を与えうることが示された。

- ・ 巡回公演事業を含む学校での文化芸術の鑑賞・体験をきっかけとしてとった行動について、「あてはまるものはない」が 4 割程度であったが、自分で文化芸術に関すること（楽器など）を始めたという者が 2.5 割程度、家族や友達と劇場や音楽ホール、美術館や博物館に行ったという者が 2 割程度であった。
- ・ （２）に記載のとおり、もともと芸術教科に肯定的な評価をしている児童・生徒や習い事をして
いる児童・生徒など、文化芸術に親しみを持つ子供ほど巡回公演事業を楽しかったと感じる割合が多い。（学校での）文化芸術鑑賞・体験→行動変容→文化芸術に対する関心・愛着の醸成→（学校での）文化芸術鑑賞・体験といった好循環が生まれ得る可能性が示唆される。

3. 調査結果

(1) 調査対象校について

調査対象校 10 校は下記の表のとおりである。

図表 3-2 調査対象校

No.	都道府県	学校種別	アンケート 対象学年	演目	アンケート 回収数
1	福島県	中学校	中2	舞踊	13
2	茨城県	中学校	中2	演劇	138
3	神奈川県	小学校	小6	音楽	141
4	石川県	義務教育学校	小5～中3	伝統芸能	98
5	愛知県	小学校	小5～小6	演劇	26
6	静岡県	小学校	小5～小6	音楽	12
7	和歌山県	中学校	中1～中3	伝統芸能	8
8	山口県	中学校	中1～中3	音楽	418
9	高知県	中学校	中1～中3	音楽	329
10	鹿児島県	小学校	小5～小6	演劇	18
合計					1201

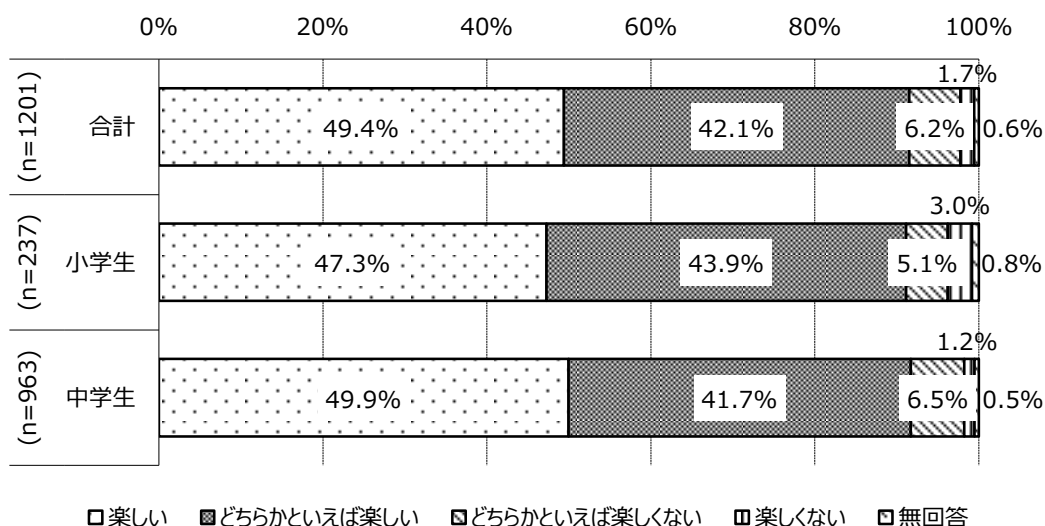
（２）子供の鑑賞、体験機会の状況について

①文化芸術に関連する科目の嗜好性

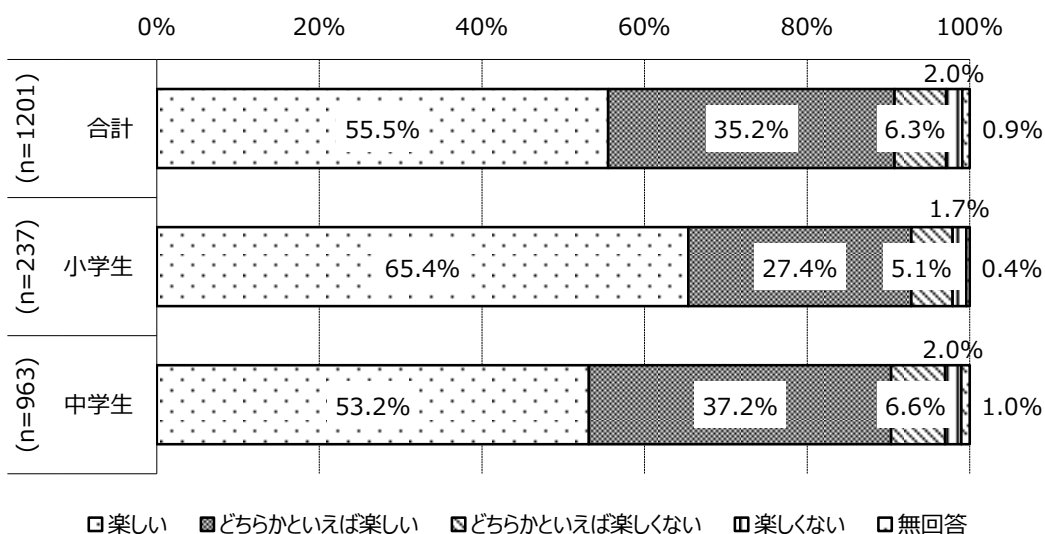
音楽の授業は楽しいか尋ねたところ、「楽しい」の割合が49.4%と最も高く、「どちらかといえば楽しい」(42.1%)と合計すると9割を超えている。音楽の授業については、学校種別による違い特にはみられなかった。

美術・図画工作では、「楽しい」の割合が55.5%と最も高く、「どちらかといえば楽しい」(35.2%)と合計すると合計で9割を超えている。学校段階別にみると、美術・図画工作の授業は「楽しい」と回答した割合は、「小学生」の方が高くなっている。

図表 3-3 音楽の授業は楽しいか



図表 3-4 美術・図画工作の授業は楽しいか

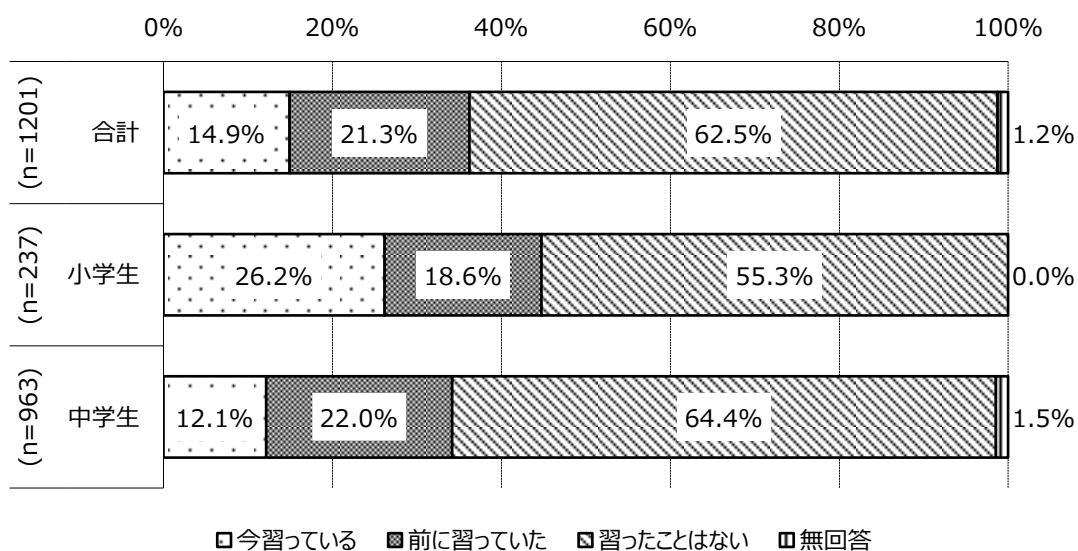


②習い事の状況

文化芸術に関する習い事を行っているか尋ねたところ、「今習っている」の割合が 14.9%、「前に習っていた」の割合が 21.3%となっている。

学校段階別にみると、「小学生」の方が「今習っている」の割合が高くなっている。

図表 3-5 文化芸術に関する習い事

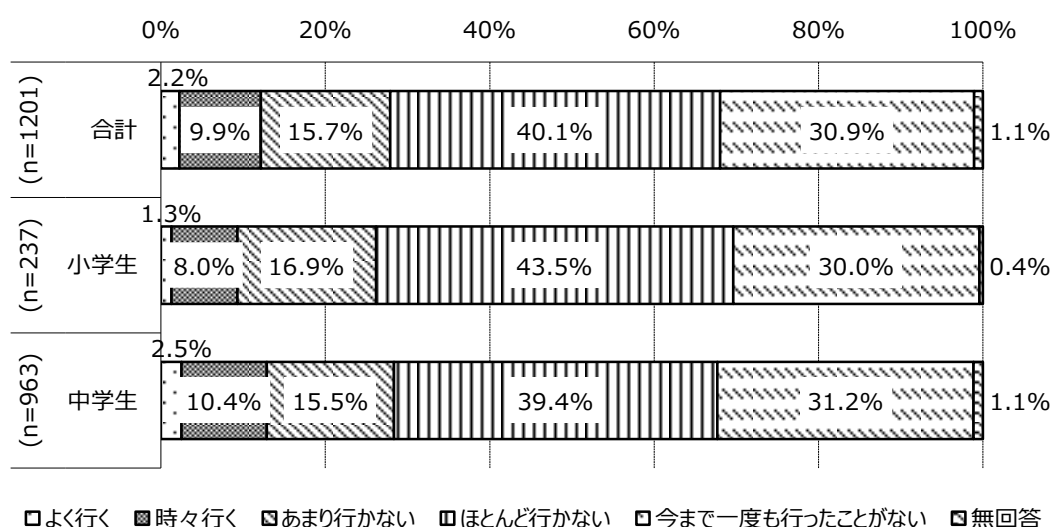


③鑑賞機会の状況

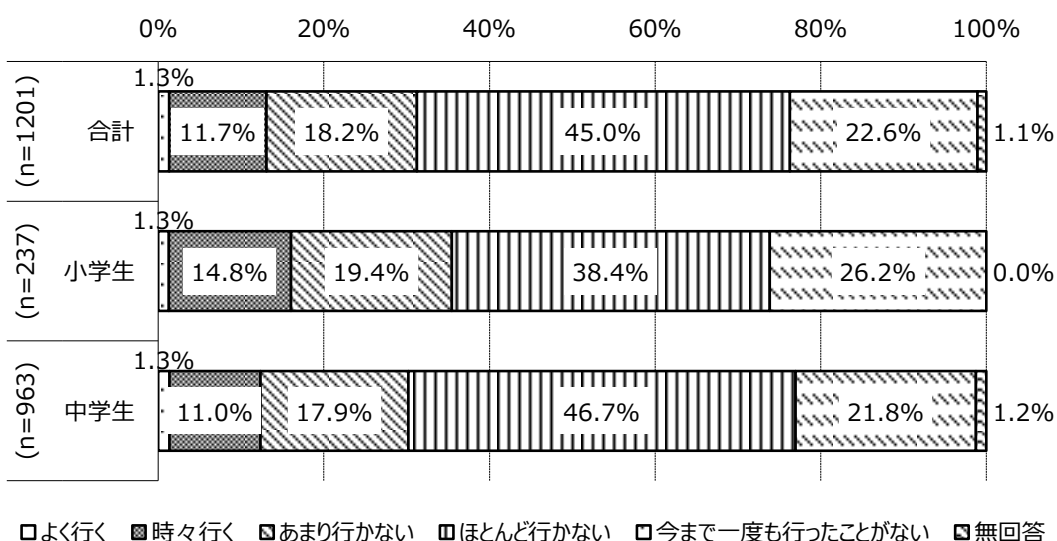
劇場での演劇や音楽のコンサートに行く頻度について尋ねたところ、「ほとんど行かない」の割合が40.1%と最も高く、「よく行く」(2.2%)や「時々行く」(9.9%)という児童生徒は合わせてもおおよそ8人に1人である。学校段階別にみると、「よく行く」、「時々行く」の割合の合計は「中学生」の方がわずかに高くなっている。

美術館での展覧会に行く頻度でも、「ほとんど行かない」の割合が45.0%と最も高く、「よく行く」(1.3%)や「時々行く」(11.7%)という児童生徒も同様におおよそ8人に1人である。学校段階別に見てみると、「よく行く」、「時々行く」の割合の合計は「小学生」の方がわずかに高くなっている。

図表 3-6 劇場での演劇や音楽のコンサートに行く頻度



図表 3-7 美術館での展覧会に行く頻度

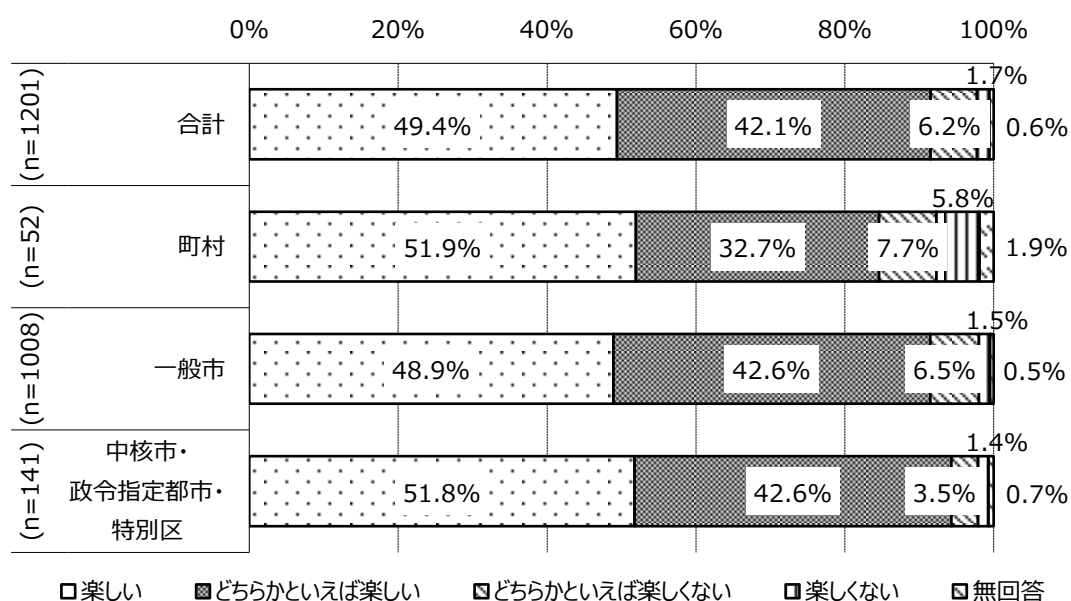


④ 所在自治体の規模別の状況

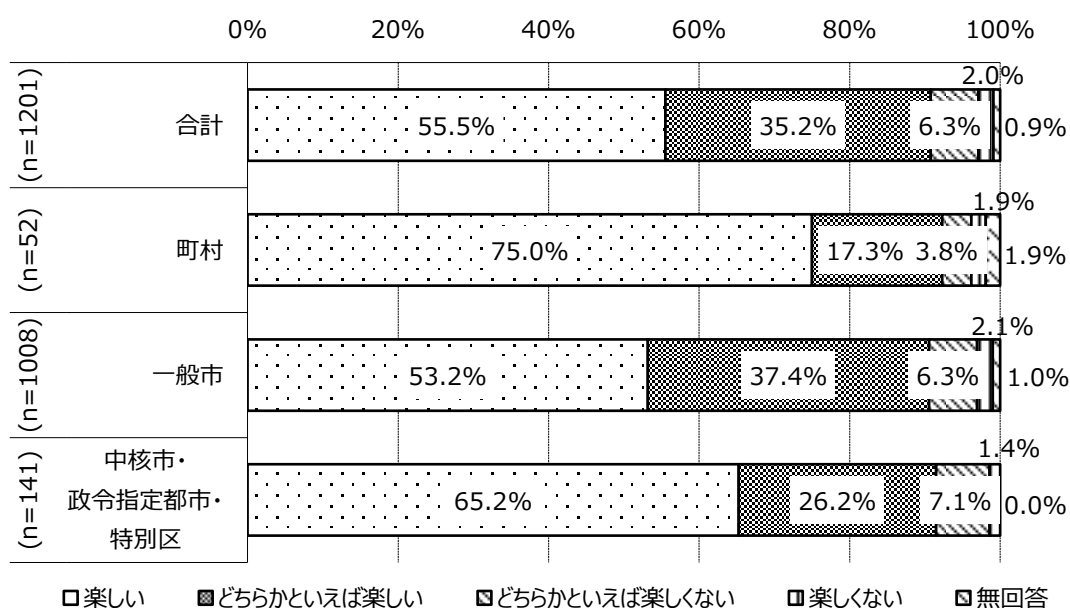
「音楽の授業は楽しいか」について所在自治体の規模別にみると、どの自治体規模においても、5割前後の児童生徒が「楽しい」と回答している。

「美術・図画工作の授業は楽しいか」については、「町村」で「楽しい」の割合が75.0%となっており、「一般市」や「中核市・政令指定都市・特別区」と比較して割合が高くなっている。

図表 3-8 【自治体規模別】音楽の授業は楽しいか

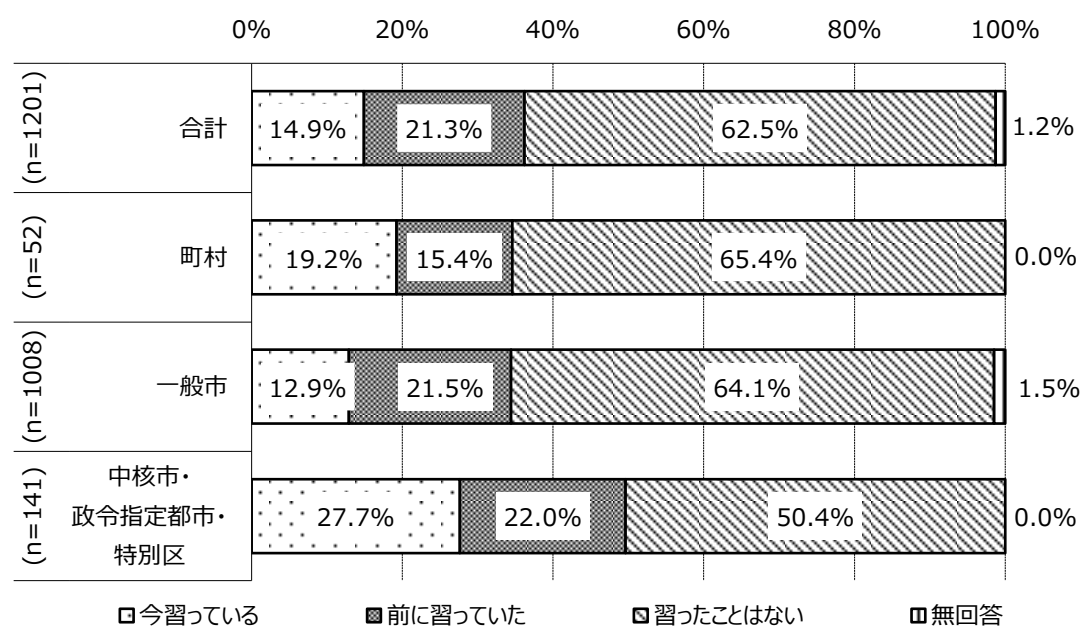


図表 3-9 【自治体規模別】美術・図画工作の授業は楽しいか



「文化芸術に関する習い事を行っているか」について所在自治体の規模別にみると、「今習っている」の割合が「中核市・政令指定都市・特別区」で 27.7%となっており、「町村」や「一般市」と比較して割合が高くなっている。

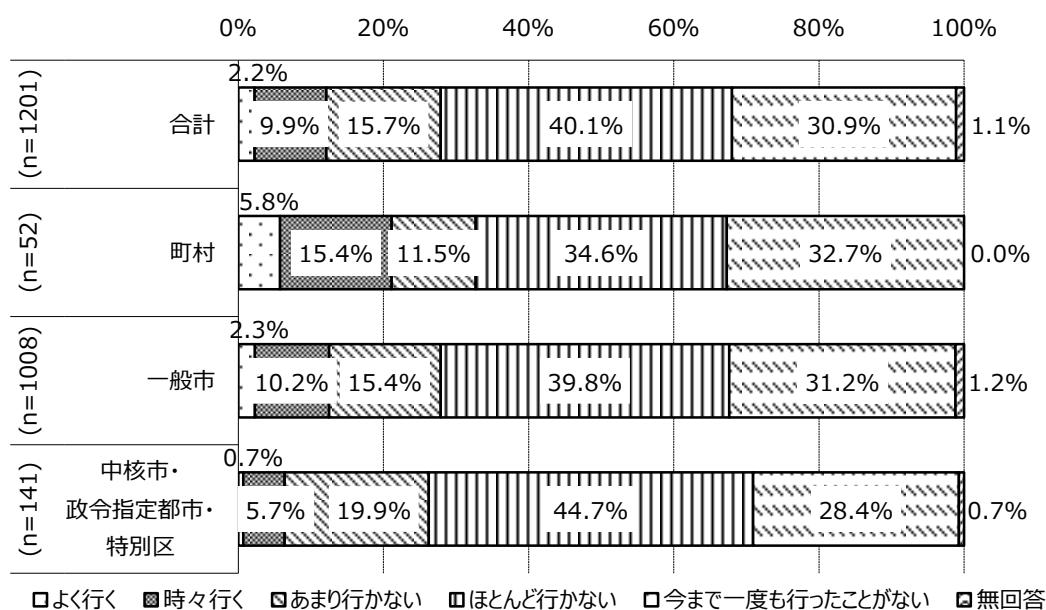
図表 3-10 【自治体規模別】文化芸術に関する習い事



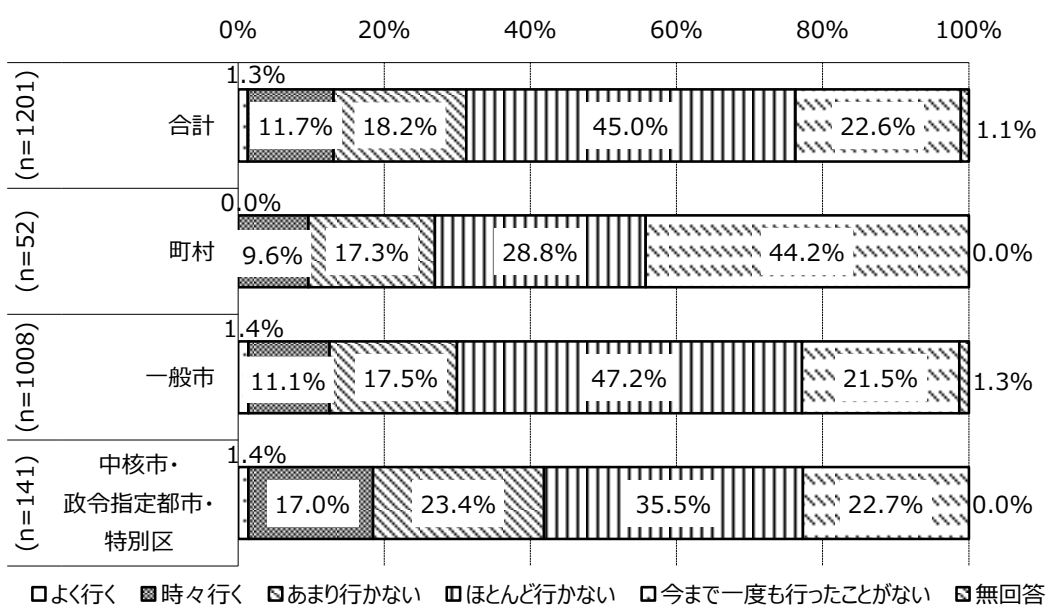
「劇場での演劇や音楽のコンサートに行く頻度」について所在自治体の規模別にみると、「町村」で「よく行く」(5.8%)、「時々行く」(15.4%)となっており、「一般市」や「中核市・政令指定都市・特別区」と比較して割合が高くなっている。

「美術館での展覧会に行く頻度」については、「中核市・政令指定都市・特別区」で「よく行く」(1.4%)、「時々行く」(17.0%)となっており、「町村」や「一般市」と比較して割合が高くなっている。

図表 3-11 【自治体規模別】劇場での演劇や音楽のコンサートに行く頻度



図表 3-12 【自治体規模別】美術館での展覧会に行く頻度

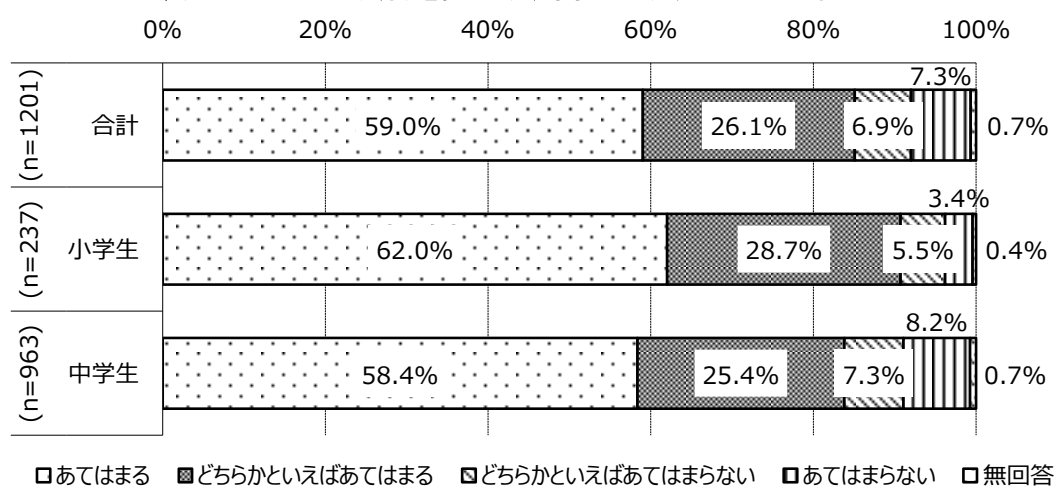


(3) 学校で行う文化芸術の鑑賞・体験の評価について

①全体

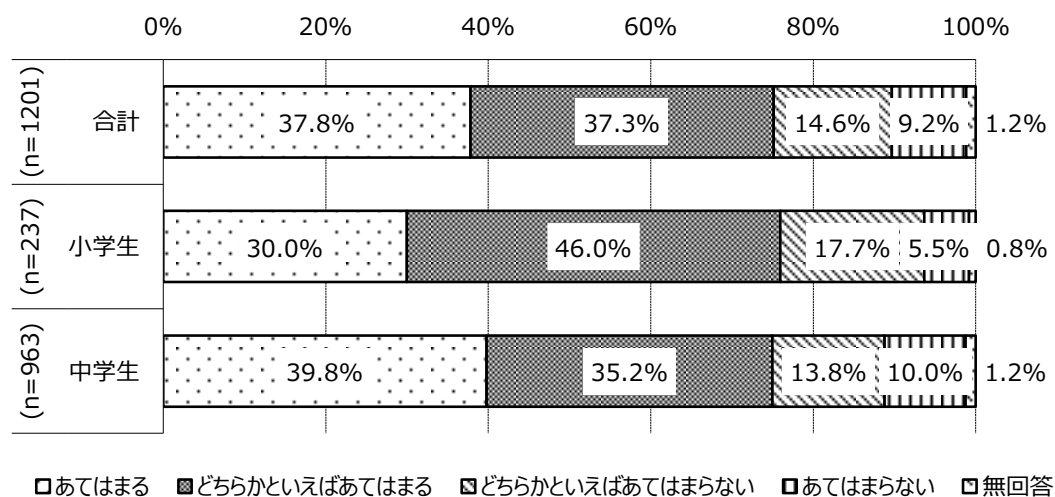
「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」に対して4件法（あてはまる／どちらかといえばあてはまる／どちらかといえばあてはまらない／あてはまらない）で回答してもらったところ、「あてはまる」が59.0%、「どちらかといえばあてはまる」が26.1%となっており、合計は85.1%となっている。学校段階別にみると、「あてはまる」、「どちらか」とあてはまる」の割合は、ともに「小学生」の方が高くなっている。

図表 3-13 文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった



「友だちや家族に、今日のような文化芸術を見たり、聞いたりすることをおすすめしたい」については、「あてはまる」が37.8%、「どちらかといえばあてはまる」が37.3%となっており、合計は75.1%となっている。学校段階別にみると、「あてはまる」のみでは「中学生」方が高いが、「どちらかといえばあてはまる」もあわせるとほとんど同じ割合となっている。

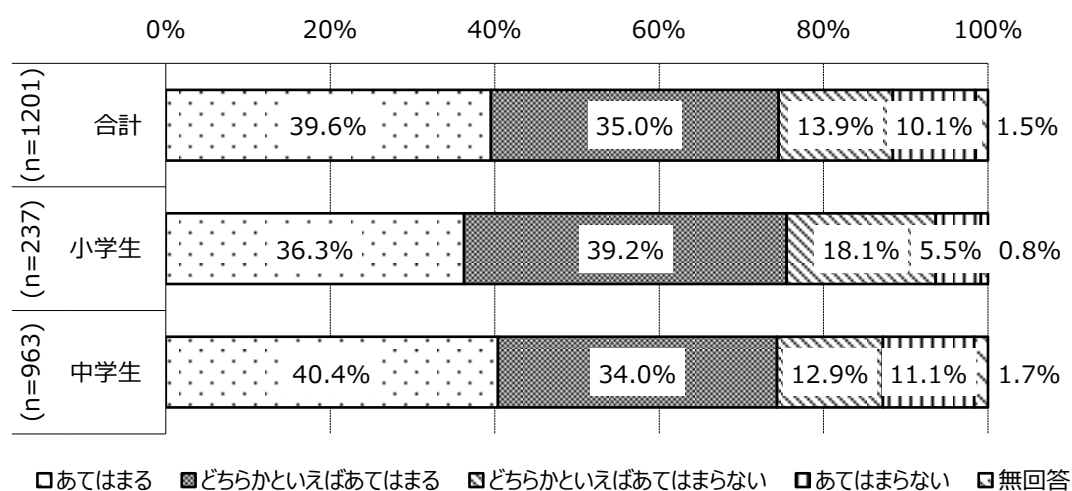
図表 3-14 友達や家族にお勧めしたい



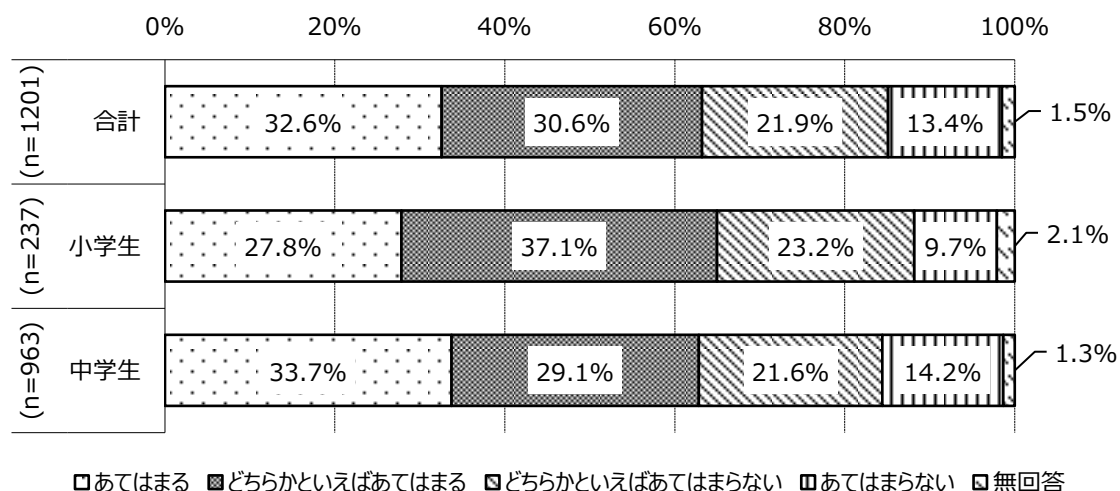
「劇場や美術館に行って、もう一度、今日のような文化芸術を見たり、聞いたりしたい」では、「あてはまる」が39.6%、「どちらかといえばあてはまる」が35.0%となっており、合計は74.6%となっている。学校段階別にみると、「あてはまる」のみでは「中学生」方が高いが、「どちらかといえばあてはまる」もあわせるとほとんど同じ割合となっている。

「自分で楽器を弾いたり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊ったりしてみたくなった」では、「あてはまる」が32.6%、「どちらかといえばあてはまる」が30.6%となっている。学校段階別にみると、「あてはまる」のみでは「中学生」方が高いが、「どちらかといえばあてはまる」もあわせるとほとんど同じ割合となっている。

図表 3-15 劇場や美術館に行ってもう一度見たり、聞いたりしたい

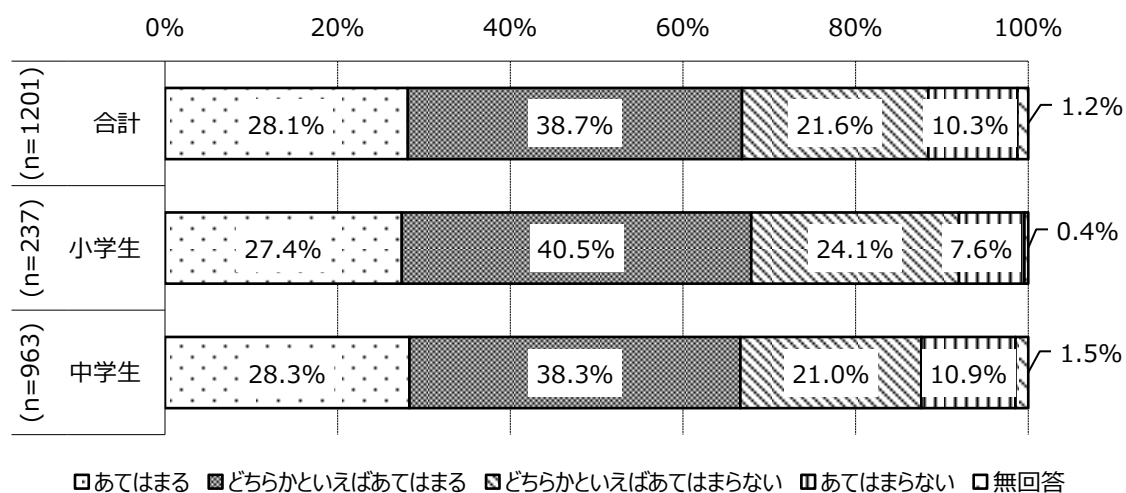


図表 3-16 自分で楽器を弾いたり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊ったりしてみたくなった



「文化芸術を見たり、聞いたりして、学校の音楽・美術・図画工作などの授業がもっと楽しになった」では、「あてはまる」が28.1%、「どちらかといえばあてはまる」が38.7%となっている。学校段階別の違いは特にみられなかった。

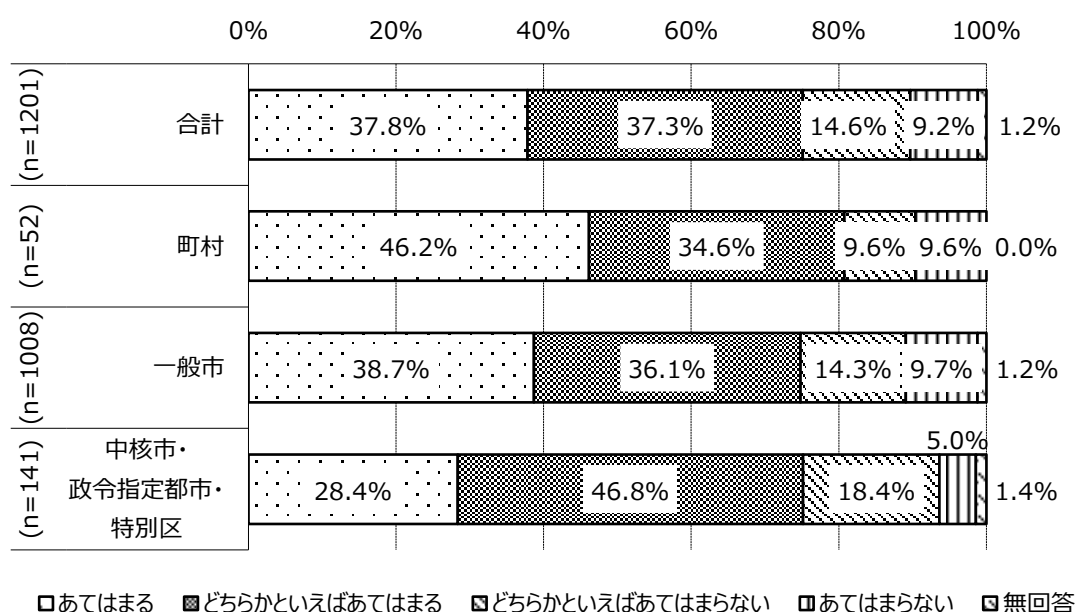
図表 3-17 学校の音楽・美術・図画工作などの授業がもっと楽しになった



②所在自治体の規模別の結果

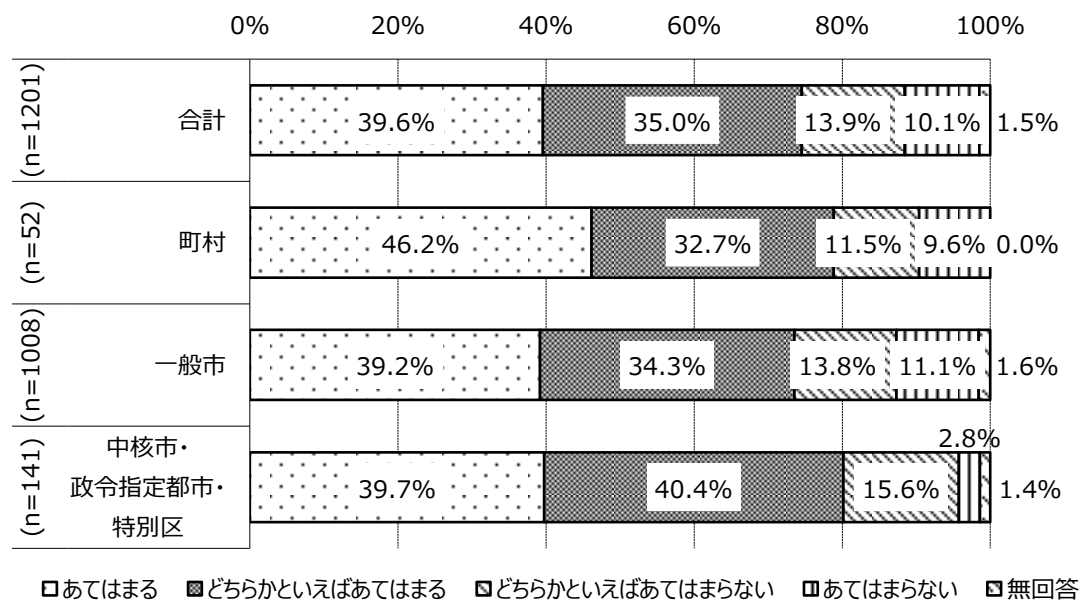
「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」について所在自治体の規模別にみると、「あてはまる」と回答している割合が、「町村」では 65.4%となっており、「一般市」や「中核市・政令指定都市・特別区」と比較すると文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかったと感じている割合が高くなっている。「中核市・政令指定都市・特別区」は、「あてはまる」の割合が 28.4%と低い、「どちらかといえばあてはまる」の割合が 46.8%と高く、合計の割合では「一般市」と同程度となっている。

図表 3-18 【自治体規模別】文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった



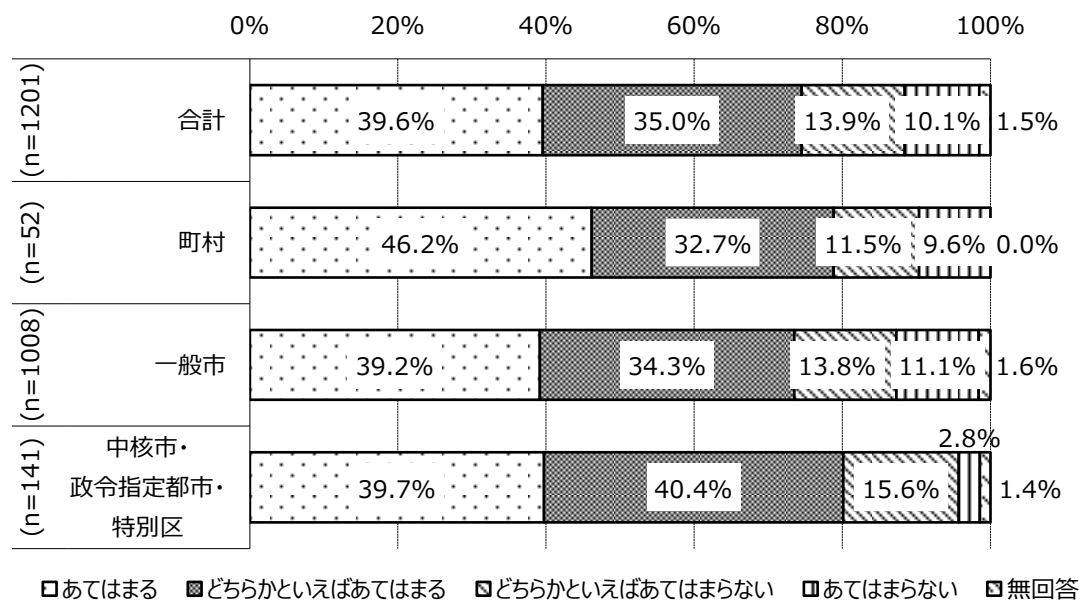
「友だちや家族に、今日のような文化芸術を見たり、聞いたりすることをおすすめしたい」について所在自治体の規模別にみると、「あてはまる」では「町村」(46.2%)が、「どちらかといえばあてはまる」では「中核市・政令指定都市・特別区」(40.4%)が他の自治体規模と比較して割合が高くなっている。

図表 3-19 【自治体規模別】友達や家族にお勧めしたい



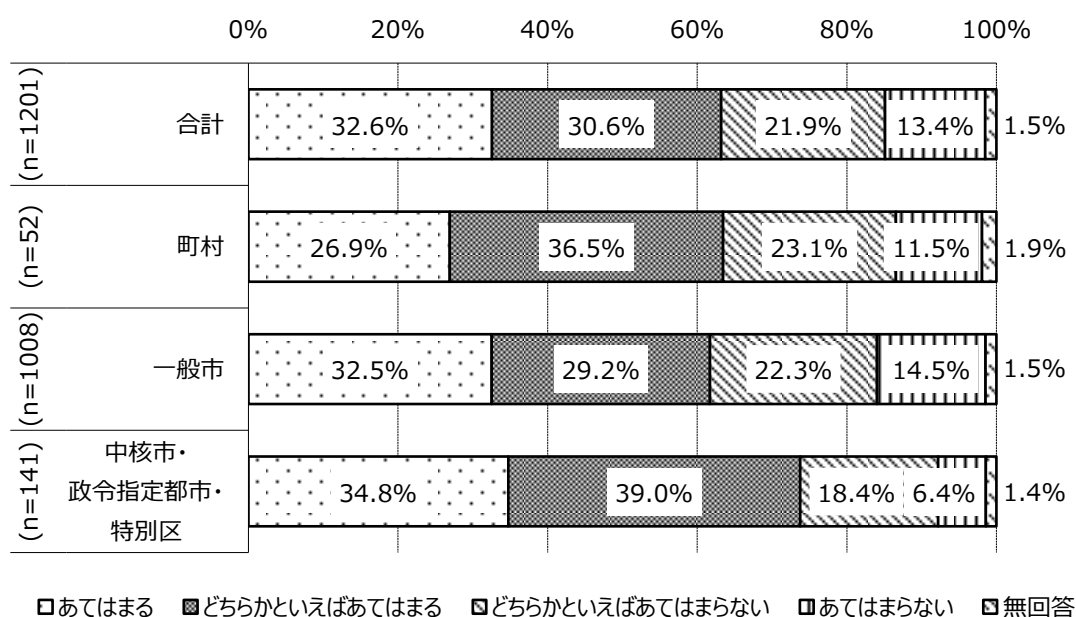
「劇場や美術館に行って、もう一度、今日のような文化芸術を見たり、聞いたりしたい」について所在自治体の規模別にみると、「あてはまる」では「町村」(46.2%)が、「どちらかといえばあてはまる」では「中核市・政令指定都市・特別区」が、他の自治体規模と比較して割合が高くなっている。

図表 3-20 【自治体規模別】劇場や美術館に行ってもう一度見たり、聞いたりしたい



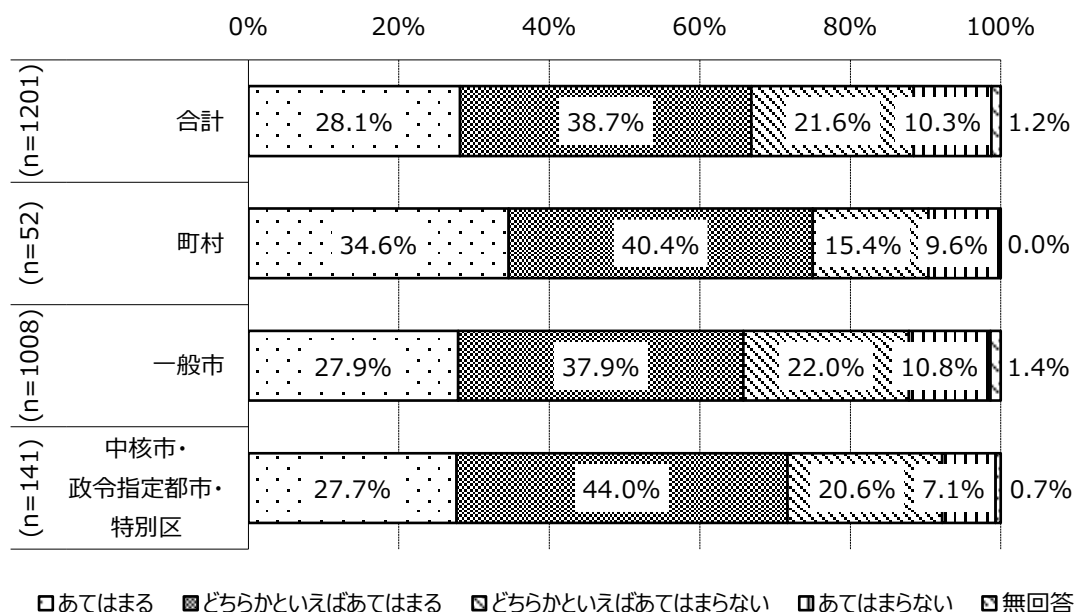
「自分で楽器を弾いたり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊ったりしてみたいくなった」について所在自治体の規模別にみると、「中核市・政令指定都市・特別区」が「あてはまる」(34.8%)、「どちらかといえばあてはまる」(39.0%) でともに「一般市」や「町村」と比較して割合が高くなっている。

図表 3-21 【自治体規模別】自分で楽器を弾いたり、歌ったり、絵を描いたり、演じたり、踊ったりしてみたいくなった



「文化芸術を見たり、聞いたりして、学校の音楽・美術・図画工作などの授業がもっと楽しになった」について所在自治体の規模別にみると、「あてはまる」の割合が、「町村」では34.6%と、「一般市」や「中核市・政令指定都市・特別区」と比較して割合が高くなっており、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」の割合の合計でも「町村」(75.0%)が他の自治体規模と比較して高くなっている。

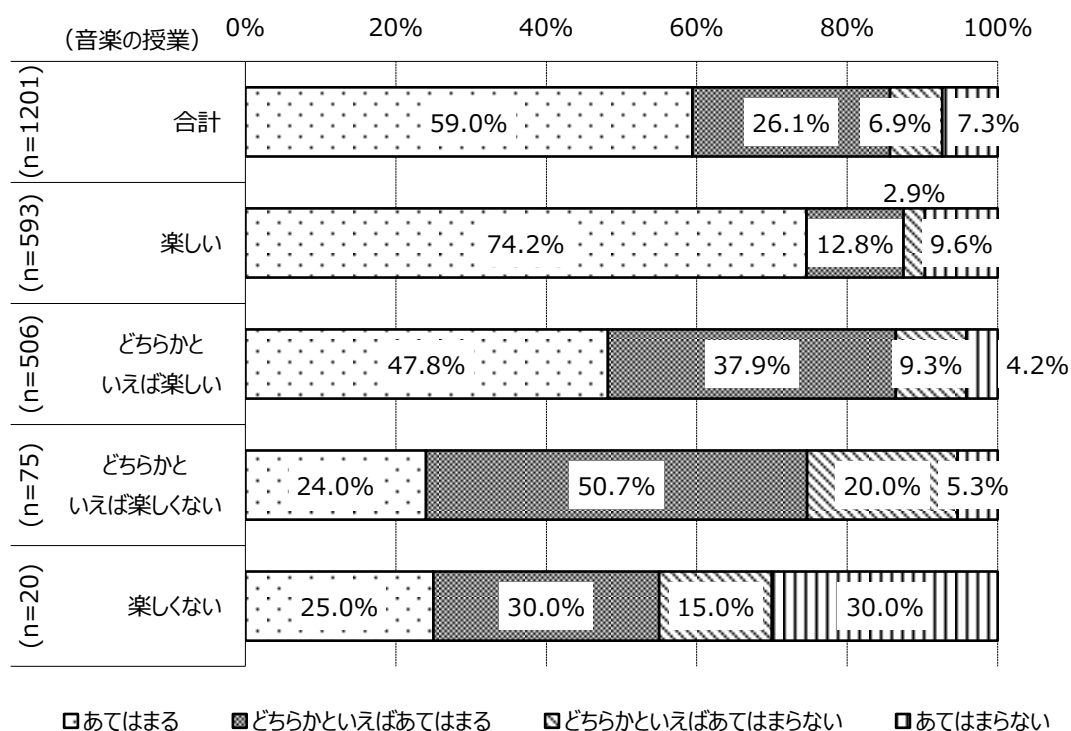
図表 3-22 【自治体規模別】学校の音楽・美術・図画工作などの授業がもっと楽しになった



③嗜好性・習い事の状況別の結果

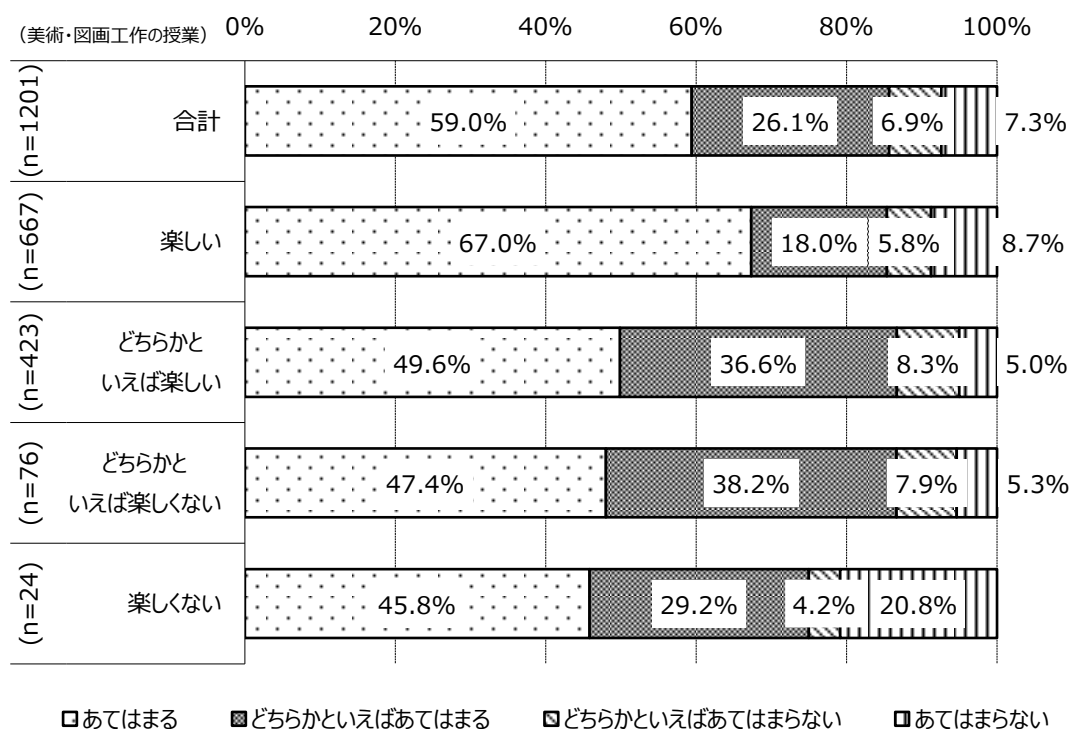
「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」について「音楽の授業は楽しいか（図表 3-3）」の回答別にみると、音楽の授業について「楽しい」と回答している児童生徒は、74.2%が「あてはまる」と回答しており、その割合は、音楽の授業について「どちらかといえば楽しい」、「楽しくない」と回答している児童生徒の約3倍となっている。

図表 3-23 【音楽】文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった



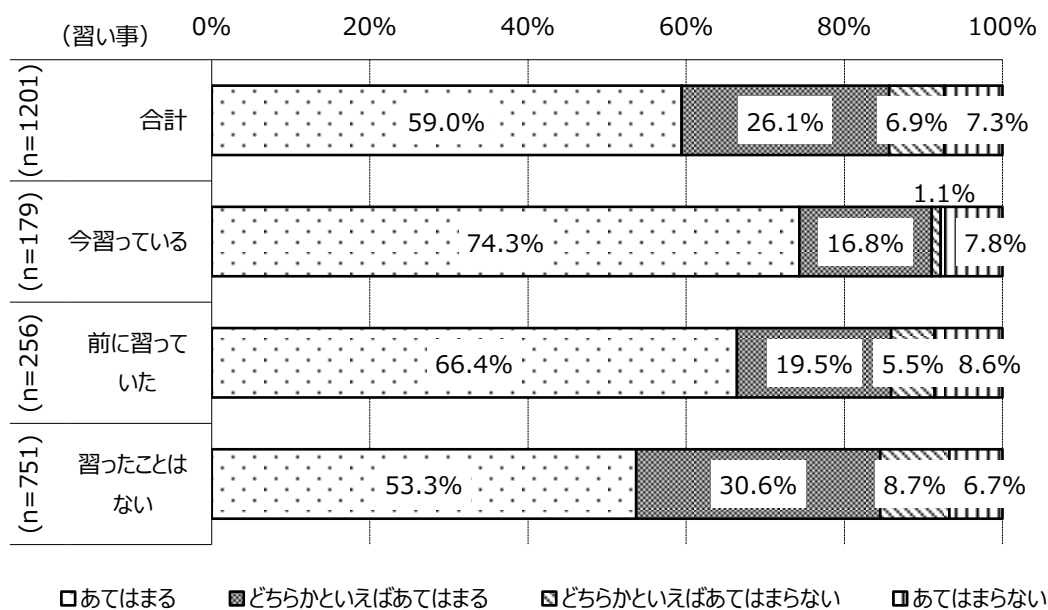
「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」について「美術・図画工作の授業は楽しいか（図表 3-4）」の回答別にみると、美術・図画工作の授業について「楽しい」と回答している児童生徒は、67.0%が「あてはまる」と回答しており、美術・図画工作の授業について「どちらかといえば楽しい」、「どちらかといえば楽しくない」、「楽しくない」と回答している児童生徒と比較すると、音楽の授業ほど大きな差はみられない。

図表 3-24 【美術・図画工作】文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった



「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」について「文化芸術に関する習い事を行っているか（図表 3-5）」の回答別にみると、「あてはまる」の割合は、習い事を「今習っている」で 74.3%、「前に習っていた」で 66.4%、「習ったことはない」で 53.3%となっており、習い事を行ったことのある児童生徒は、行ったことがない生徒と比較して、文化芸術を見たり聞いたりすることを楽しんだ割合が高くなっている。

図表 3-25 【習い事】文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった

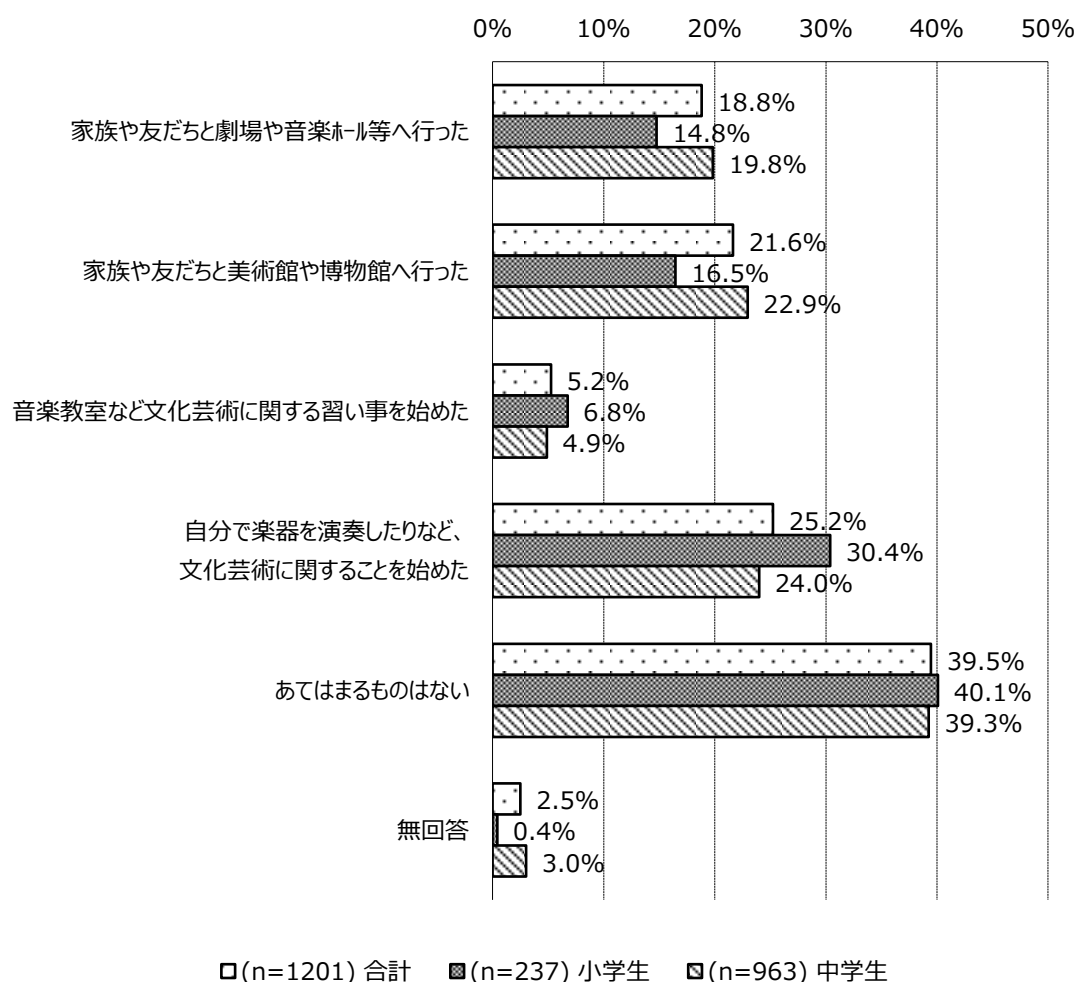


(4) 学校で行う文化芸術の鑑賞・体験による行動変容

学校での文化芸術の鑑賞・体験をきっかけにとった行動を尋ねたところ、「あてはまるものはない」の割合が39.5%と最も高く、次いで「自分で楽器を演奏したりなど、文化芸術に関することを始めた」(25.2%)、「家族や友だちと美術館や博物館へ行った」(21.6%)となっている。

学校段階別でみると、小学生では「自分で楽器を演奏したりなど、文化芸術に関することを始めた」、「音楽教室など文化芸術に関する習い事を始めた」といった自身による文化芸術活動の実践において、中学生では「家族や友だちと美術館や博物館へ行った」、「家族や友だちと美術館や博物館へ行った」といった文化芸術の鑑賞において割合が高くなっている。

図表 3-26 学校での文化芸術の鑑賞・体験をきっかけにとった行動



（５）巡回公演事業への感想・要望

①学校で行った文化芸術の鑑賞・体験の感想や意見

学校で行った文化芸術の鑑賞・体験について、自由記述回答を求めた。

楽しかった、勉強になった、理解が深まったといった鑑賞や体験に対する直接的な感想に加えて、お気に入りの楽器を見つけることができた、音楽や美術・図画工作の授業が楽しみになったなど、児童生徒の文化芸術に関する学校教科への興味関心の向上を示す感想も多くみられた。

また、実際に楽器を弾いてみたくなった、将来の夢について考えるきっかけになったなど、学校外での文化芸術に関する行動への影響を示す感想も一部みられた。

具体的な内容としては、以下のような回答が寄せられた。

図表 3-27 主な意見（一部抜粋、編集）

■文化芸術を見たことが楽しかった・勉強になった

- ・ メイクが本格的ですごかった。戦う場面などいろいろな事を披露していてすごかった。【小学生】
- ・ 文化芸術はあんまり興味ないが楽しかった。【小学生】
- ・ いろいろな楽器の音が重なり合って強弱がつけられていたので迫力があつた。【小学生】
- ・ 今まで自分が聞いていた曲とは違う良さがあることや楽器の種類の多さにおどろいた。【小学生】
- ・ 役者さんの動きや表情、声がとてもよく、劇にひきこまれた。普段あまり見る機会がないので、とてもいい機会になった。【小学生】
- ・ 落語を鑑賞する前は、あまりおもしろくなさそうと思っていたけど実際に鑑賞してみたらすごくおもしろかったので、また、落語を鑑賞したいと思った。【小学生】
- ・ 文化芸術の鑑賞をして、知らなかった物語や人物、歴史などについても学べて感動と楽しさと面白さを体験できた。【中学生】
- ・ みんなの前に立って目立つのは苦手なので、自分が演技したりするのは苦手だけど鑑賞は楽しかった。またこういう機会があったら見たい。【中学生】
- ・ 演劇を見て私も舞台化粧や衣装を体験してみたいなと思った。【中学生】
- ・ 文化芸術には、沢山の人の思い（感情）が込められていて、見たり聞いたりしていて、とても楽しいです。絵を描くことが大好きで、3年間絵を描いてきましたが、1人1人の絵には、個性があふれていて、いつまでも見ていられる。【中学生】
- ・ 私は、J-POPやK-POPなどしか普段聞かないので今日聞いたりしたクラシックなども聞いてみたいなと思いました。【中学生】
- ・ 音楽を通して、作曲された方の気持ちや演奏する人の気持ちが伝わってきました。とても迫力があつた、すごく印象に残りました。ありがとうございました。【中学生】
- ・ 最初の1音目から迫力がすごくて、もっと演奏を聴いていたいと思った。体を動かすこともできて「音楽って本当に楽しいな」と感じました。次はコンサートへ行ってみたい。【中学生】

- ・ 自分と住んでいる地域や言語が違う人達と笑い合うことができる日本の文化はすごいと思ったし、ステキだと思った。【中学生】
- ・ 日本の文化やすてきな物がこんなにもある事を初めて知ったし、心を動かされるような体験や鑑賞がとても印象に残った。これから、文化芸術について深くかかわっていきたいと思った。【中学生】
- ・ 今まであまり落語というものはたいくつで、何言っているのか分からないものだと思っていたが、思いの他、楽しくてまた見たい！と思えるものでした。面白かった。【中学生】

■説明・解説があったことで文化芸術を楽しめた・理解が深まった

- ・ えん奏を聞いて、本当にすごかったと思った。長時間色々な音楽を聞くのは初めてだったけど、説明してくれたのでより楽しかった。【小学生】
- ・ 音楽の授業で楽器の大きさが分からなかったけど、〈団体名〉の方が来てくれて分かりやすく説明してくれたから実際の大きさが分かった。【小学生】
- ・ オムニバス形式の話の内、一・三・四番目は理解できたけど、二番目が難解でした。普段見る機会のないものを鑑賞できて、新鮮でおもしろかった。【中学生】
- ・ 音楽は人々の思いや歴史的な背景があったりして、つくられ親しまれているということを知って、歌を歌う喜びや楽しみを感じることができた。【中学生】
- ・ 小さい子供にもわかりやすいように話しているのがすごいと思った。大正時代の例文がおもしろかった。【中学生】

■お気に入りを見つけることができた

- ・ 音楽のプロのみなさんの演奏で、音のひびきや重なり合いがとてもきれいで、心居よく感じられました。気に入った楽器もみつけることができた。【小学生】
- ・ 体育館全体にいろいろな楽器の音が広がって、聞いていて、とても気持ちよかった。また、この楽器はこういう曲にぴったりだな〜と、発見することができた。写真でみるよりも、大きさにはく力があって、びっくりした。【小学生】
- ・ アイダトランペットがすごくカッコよかった。トロンボーンが感動するぐらいカッコよかった。あれを目指す！【中学生】

■文化芸術に関する授業が楽しみになった

- ・ 劇団やオーケストラを実際に見られて、授業が好きになったり、楽しみになった。【小学生】
- ・ 技能教科の関心（音楽や美術）が深まり、授業が「楽しい」と感じるようになった。【中学生】
- ・ 音楽の授業がたのしみになった【中学生】
- ・ 絵をかいたりものを作ったりする体験をしたい。【中学生】

■実際に楽器を弾いてみたくなった

- ・ 生でオーケストラは動画で見るよりも何倍ものく力があって、おどろいた。ハープという楽器を初めて生で見てきてきれいだなと思った。また、ヴァイオリンにも興味がでてきた。やってみたいと思った。【小学生】
- ・ 鑑賞してみて、弦楽器を弾いてみたくなった。また、校歌もプロの人が編曲すると、こんなにかっこよくなると分かり、凄いと思った。【小学生】

- ・ プロの方々の演奏を聞いて、何の為に自分が音楽の道を目指しているのかを考えなおすきっかけになった。私も人を感動させる音楽をつくり出したいと思った。【中学生】
- ・ 鳥肌が立つぐらい迫力があってびっくりしました。カッコいいので、あの中にまぎって歌ってみたいと思った。【中学生】
- ・ 「トランペットをやりたい」と思いながら聴いていた。【中学生】
- ・ 音楽は聴くことも歌うことも好きだから楽しかった。普段は家族で劇場や音楽ホールなどに行くことがないから行きたいと思った。自分でも色々な楽器を弾きたいと思った。【中学生】
- ・ 校歌を演奏してくださり、とても歌いたくなった。打楽器をたたいてみたい。【中学生】

■文化芸術を体験したことが楽しかった・興味を持つきっかけになった

- ・ はじめて体験したけれど、すごくたのしかった。最初は、少し緊張したけれど、体験できてよかった。【小学生】
- ・ 難しかったけれど、文化芸術の体験はめったにできないからやれて嬉しかった。【小学生】
- ・ 初めてこういうことをしたけど、最初は難しそうだし、お化粧やだなあとか思ったりしたけれど、やってみてすごく楽しかった。【小学生】
- ・ ソーラン節は、最初おどってカッコいいと思っていたけれどやっていくと伝統をつないでいっているって感じがして楽しかった。【小学生】
- ・ 楽しかったし、プロはやっぱ違うなあ...と思った。生徒も参加できるところが本当に素晴らしいと思う。【中学生】
- ・ 実際に出演して、今までは見る側だったけれど裏側も見られてとても楽しかった！【中学生】
- ・ 学校で落語や日本舞踊を観賞・体験して、日本の伝統文化に興味をもつようになった。【中学生】
- ・ 指揮の体験が、むずかしかったけど、とても楽しかった。オーケストラに興味をもった。また来年もききたいし、いろんな体験をしたい。【中学生】
- ・ ボディーパーカッションでは体で表現することの楽しさを学ぶことができた。【中学生】

■将来の夢について考えるきっかけになった

- ・ プロの人の演奏などを聞いて、すごいなととても強く思った。自分の得意なことなどをきわめていけば、こんなになれるんだということを学ぶことができ、将来について考えたいと思い直すことができた。【中学生】

■その他

- ・ 声の出し方がよく部活とかで注意されるので、音楽を通して、剣道部でも使えるような声の出し方を学べたので良かった。【中学生】
- ・ 吹奏楽部なので楽器を吹くコツとか、教えてもらいたいと思った。【中学生】
- ・ 鑑賞は楽しいけど、体験は楽しくなかった。【小学生】
- ・ 全学年が楽しめるようなことをやってほしい。もっと見やすくしてほしい。【小学生】
- ・ 違う話で劇を見たい。感情移入しにくかった。【中学生】

- ・ 学校では、鑑賞とか創作をするのは良いと思うが、それで何か感想をかいたり、テストをするのはよくないと思う。【中学生】
- ・ 去年も同じような鑑賞会があったが、その時のオーケストラと同じくらいそれ以上にすばらしかったけど、失礼ながら音楽を鑑賞するという目的をはき違えているのではないかと思った。確かに音楽に親しみを持ってもらうためにはいいかもしれない。しかし少なくとも私は純粋に音楽を鑑賞したかった。その点では去年の方がよかったと思った。【中学生】

②学校で行う文化芸術の鑑賞・体験への要望

第3章 3. (4) で「あてはまるものはない」と回答した児童生徒に対して、学校で行われた文化芸術の鑑賞・体験がどのように変わったら文化芸術に関する行動をしたいと思うようになるかについて、自由記述回答を求めた。

学校で行う文化芸術の鑑賞・体験について、機会の拡大、事前学習の充実、よりよいテーマの選定等に関する意見が多く挙げられた。また、金銭や時間の問題がハードルとなっていくこと、居住する地域の周辺に鑑賞や体験ができる施設がないことなどによって、学校で行う文化芸術の体験・鑑賞以外の機会をつくることができないといった意見もみられた。

具体的な内容としては、以下のような回答が寄せられた。

図表 3-28 主な意見（一部抜粋、編集）

■鑑賞・体験機会の拡大

- ・ 楽器を触ったり、体験できる機会があったらいい。【小学生】
- ・ 学年全員が参加する。【中学生】
- ・ もっと定期的に芸術鑑賞をするなど機会を増やす。【中学生】
- ・ 学年関係なく、もっと体験型にして体験できる人が沢山できるといいと思います。【中学生】
- ・ 自分で体験する時間が増えたらやってみたい。【中学生】
- ・ 音楽をもっと見たり聞いたりするのではなくて、楽器とかで実際に体験したほうがいい【中学生】
- ・ 自分で作曲したり、楽器を弾きたいと思った。【中学生】
- ・ 見る、聞くだけでなく、さわらせてもらったりじっさいに近くでひきかたをおそわったりすると、よりしれていいとおもう。【小学生】
- ・ フルートをひいてみたい。【小学生】
- ・ 絵を描くことや楽器を演奏したりすることがどちらかというと苦手などで、どうやったらうまくなるか教えてほしい。【中学生】
- ・ 絵をかきたい。【中学生】

■事前学習の充実

- ・ 動画を見る学習時間がほしい。【小学生】
- ・ 自分が演奏してみたい楽器のことについて調べたり、たくさん練習できるようになってほしい。【中学生】

■テーマの選定について

- ・ 野球が趣味なので、野球に関する題材をやってほしい。【小学生】
- ・ もうちょっと大人っぽいものがいい。【小学生】
- ・ みんなが知っている曲をえんそうしたらいいと思う。【小学生】
- ・ もっと現代のようなものにするとおもしろくなるかなと思った。【中学生】
- ・ 自分に興味のあるものがあたらよい。【中学生】

■学校以外での文化芸術鑑賞・体験との連続性

- ・ 金銭的、時間的問題で、あまりそういったことに親しめない。【中学生】
- ・ 受験もコロナがなければ行ってみたい。【中学生】
- ・ 近くに劇場などが出来たら行ってみたいが、県内にそのような施設がなく、断念している。県内にもそのような体験ができる施設ができれば嬉しい。【中学生】
- ・ 質問コーナーがあたらいいと思った。【中学生】
- ・ おすすめのイベントや場所などの情報を教えてくれる。【中学生】

第4章 学校向けヒアリング調査

1. 学校向けヒアリング調査 実施概要

(1) 実施目的

令和4年度文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）または令和3年度文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）参加校について、教員に対してヒアリング調査（以下、ヒアリング調査）を実施した。公演団体と学校との連携や、通常教科との接続における創意工夫、事業により得られた成果、今後の継続的な発展に向けた課題等を把握し、巡回公演事業の更なる発展に向けた論点を抽出することを目的とする。また、新型コロナウイルス感染症による影響やその対策状況に関する情報も把握し、巡回公演事業における新型コロナウイルス感染症の対応策に関する論点抽出も行う。

(2) 調査方法

①調査手法・調査対象

実施にあたっては、文化芸術による子供育成推進事業（巡回公演事業）の令和4年度参加校のうち、文化芸術による子供育成推進事業事務局との協議を通じた調査対象8校と、「第2章 学校向けアンケート調査」で実施したアンケート調査の回答校のうち、令和3年度に文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）を実施している学校から調査対象1校を抽出し実施した。

調査は、電話もしくはオンライン会議によるヒアリング調査で実施した。

図表 4-1 調査対象校の選定基準及び対象校一覧

対象・選定基準	対象学校名
○令和4年度参加校からの抽出校 【選定基準】 必須項目：複数年度事業実施していること（中止になったものなどは除く）、教科紐づけを行っていること 優先項目：評価コメント、保護者や地域への開放状況 バランスで勘案する項目：地域、小中（参加学年）、演目	坂井市立兵庫小学校
	塩竈市立第二中学校
	小山市立絹義務教育学校
	舞鶴市立中筋小学校
	広島市立城山中学校
	新見市立高尾小学校
	光市立塩田小学校
	甲州市立松里小学校
○アンケート調査からの抽出校 【選定基準】 必須項目：「文化芸術における子供育成総合事業」を令和3年度実施していること 優先項目：同事業により期待される効果の内容とコメント バランスで勘案する項目：地域、小中、演目	坂井市立兵庫小学校
	熊本市立東野中学校

②調査項目

以下の８つの項目を共通の調査項目として設定し、半構造化形式⁶でヒアリング調査を実施した。

図表 ４-2 調査項目一覧

- | |
|--|
| ① 「文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）」の取組概要 |
| ② ①を実施する上での工夫 |
| ③ ①に関連した取り組みを通して、教育活動の質を向上させるために実施している工夫 |
| ④ ①、③を実施したことで得られた効果・成果 |
| ⑤ 本事業とカリキュラムとの位置づけ・関係 |
| ⑥ 本事業の実施にあたって解決できた課題あるいは現在も直面している課題 |
| ⑦ 本事業を来年度以降も継続的に実施するにあたって直面している課題 |
| ⑧ その他本事業に関する意見 |

⁶ 半構造化インタビューとは、あらかじめ定めた質問項目を定めておき、回答内容に応じてその回答内容を掘り下げていく調査方法を指す。

2. 学校向けヒアリング調査結果のサマリー

(1) 働き方改革の推進下における巡回公演事業の実施

①現状と課題

教員の働き方改革の必要性が高まる中、人的制約や時間的制約がある中で効率的に実施するための様々な工夫がなされている。

人的制約に対しては、教頭や校長等の管理職や教務主任が事業申し込みや調整等に対応する例が多く、同時に教員に対しても納得感を求めることに配慮するなどの現状がみられた。時間的制約については、多くの学校であらかじめ巡回公演事業を想定したスケジュールや時間割に組み込む対応を行っており、細かいスケジュールについては採択後に調整を行う等の事例がみられた。

他方、事業実施校では、巡回公演事業は芸術文化に直接触れることができる機会として重要であるだけでなく、児童・生徒の表現力や積極性の向上につながると行った情緒面での効果や、教員に対する指導力向上の効果など、様々な効果の発現がみられており、人的制約や時間的制約が高まる中でも今後巡回公演事業を実施・展開する重要性は、より一層高まることが想定される。

【効率的な実施のための工夫の例】

ー人的制約における工夫

- ・管理職等が申請や団体調整を引き受け、児童・生徒対応を教員が実施する役割分担
- ・教員に対する巡回公演事業におけるワークショップ等への参加の促進による意識向上
- ・教員に対する事業の意図・目的・趣旨等を伝達することによる協力体制の確立

ー時間的制約における工夫

- ・巡回公演事業の実施時期を見越した年間スケジュールの設定
- ・調整が難しい大規模な行事のみを事前に確定し、その他のスケジュールを柔軟に調整可能とする
- ・巡回公演事業を実施する教科時間をあらかじめ時間割として設定

②今後の改善の方向性

すでに実施している学校についてはその効果との見合いの中で、人的制約や時間的制約が大きな課題となっている例は少ないが、新規の学校に展開していく上では、人的制約や時間的制約への懸念がハードルの一つとなっていることから、人的制約や時間的制約を乗り越える工夫については、積極的に情報共有していくことが望ましいと考えられる。

くわえて、(3)の内容とも重複するが、事業実施における様々な事務負担を軽減するため、事前打ち合わせ内容や事前準備項目の基本的な方針・手順や団体と学校側での役割分担の基準等に関するガイドラインの作成も必要である。

さらに、人的制約や時間的制約がある中でも巡回公演事業に取り組む環境を醸成する観点からは、実際に実施している様子やその効果について、映像資料等も活用しながら PR していくことが望ましい。

【今後の改善の方向性】

- 人的制約や時間的制約への懸念の払拭
 - －各団体における様々な工夫の内容の紹介・共有
- 事業実施における様々な事務負担を軽減
 - －事前打ち合わせ内容や事前準備項目の基本的な方針・手順の整理
 - －団体と学校側での役割分担の基準等に関するガイドラインの作成
- 巡回公演事業の効果の PR
 - －映像資料等を活用した実際の実施している様子等の共有
 - －実施校における実際の効果・メリット等の事例集等による共有

（２）学習効果の向上のための取組について

①現状と課題

学習効果を高めるための取組事例として、学校で定めている学習目標等を参考として学習目的を設定し、それに合致した公演を選択・申請している例が複数見られたほか、通常授業における関連する内容の実施、実施後の振り返りや団体との事前打ち合わせによる工夫、などが実施されている。

他方、各学校単位でみた場合にはこれらの取組全てが取り組まれているわけではなく、各学校ともにこうした取組の中で新しく取り組む余地のあるものが多い。

【学習効果の向上のための取組例について】

- －事業内容に関する事前の検討
 - ・学習目標に応じた内容の申込み
 - ・学校内での課題抽出を行った上で、事業内容について団体と相談
- －通常授業の中でのワークショップや本公演に関連した内容の実施
 - ・個別教科の授業内容との連携
 - ・事前学習、事後学習の実施
- －ワークショップや本公演後での振り返り
 - ・振り返りの実施
- －団体との事前打ち合わせによる工夫
 - ・取組内容や目的の共有
 - ・班編制の調整（学年横断か学年別か）

－継続的な実施

- ・学習目標に応じて団体・演目を変えながら継続的に実施
- ・特定の団体に対して学習目標を都度変えながら継続的に実施

②今後の改善の方向性

今後、巡回公演事業の取組効果を実施している学校全体で高めていくためには、学習効果向上のための取組事例について、具体的な取組内容や効果を演目や連携している教科毎に取りまとめ、事例として提供していくことも必要であろうと考えられる。

特に新規に事業に取り組もうとする学校においては、その効果が見えにくいことも事業応募を躊躇する理由の一つと考えられることから、こうした事例提供は事業を実施する学校の裾野の拡大にも効果が期待できる。

さらに、今後有識者等とのヒアリング等もふまえて、巡回公演事業の効果を高めるための留意点やポイント、新しい取組提案などについても検討していくことが期待される。

【今後の改善の方向性】

- 学習効果を高めるための具体的な取組事例の共有（事例集等の提供）
- 事業効果を高めるための留意点・ポイント、新たな取り組み提案の検討

（３）巡回公演事業の実施の課題や要望

①現状と課題

申請書類の内容については、令和５年度事業の手続きから非常に簡素化されていることは、一定の評価なされている一方で、団体を選定できないことへの不安もみられた。

また、その他細かい申請手続きに関する課題や会場確保、プログラム内容等に関する課題等が複数みられた。

【事業の実施に関する課題・要望】

－申請段階における内容

- ・ジャンルだけではなくジャンルと団体の２軸での申請
- ・申請事務手続きを簡便にするシステム等の導入
- ・公募期間や提出書類の簡便化
- ・問い合わせ窓口の明確化
- ・具体的な講演内容や実施状況がわかる資料・映像の提供

－採択時における内容

- ・１学期中の採択確定後の調整・再調整の実施

－実施における内容

- ・小規模校における控え室等の確保
- ・小規模校向けのプログラムや大規模校向けのプログラム選択肢の拡大

②今後の改善の方向性

申請段階における手続きや採択時における課題については、例えば演目によって必要とする情報を変えるなど、記載項目について改めて見直しを行うことや、過年度の申請内容の情報を再利用できるような簡易なシステム・帳票等を作成することも必要と考えられる。

また、問い合わせ窓口について各都道府県・市町村教育委員会と連携して対応することや、申請時に悩みやすい内容について FAQ を用意するなどのきめ細やかな改善を継続的に実施していくことが必要と考えられる。

他方、実施時における課題については、文化庁・学校だけで解決することは難しい内容も多く、引き続き検討が必要である。

【今後の改善の方向性】

○事務手続きや採択時における課題への対応

- －記載項目の見直しなど提案の検討
- －問い合わせ窓口の設置や FAQ の用意

3. 調査結果

以下、調査項目の内容ごとに、調査結果を取りまとめた。

（１）巡回公演事業を実施する上での工夫について

①新型コロナウイルス感染症への対策

新型コロナウイルス感染症への対策について、昨今の状況を踏まえて、消毒やパーティションの活用といった一般的な感染症対策を行っており、ワークショップ・本公演の少人数形式への変更やワークショップ・本公演の同日開催による接触機会の減少に取り組むなどの事例が見られた。

一定程度ノウハウが蓄積されていることや、感染時や濃厚接触時の隔離期間の見直しなど新型コロナウイルス感染症への国の対応が変化していることも踏まえて、新型コロナウイルス感染症への対応は、昨年度と比べても各学校ともに大きな混乱もなく実施されている状況がみられた。

②人的制約における工夫

教員が忙しく事業の申込みや団体との調整等の時間を取ることが難しいという人的な制約に対して、多くの学校で教頭や校長等の管理職や教務主任がそれらの作業を引き受け、教員は生徒の引率・教育に対応するという役割分担を行うことで対応している例がみられた。

また、巡回公演事業の効果は実際に体験してみるとより納得感がえられることから、教員に対してまずは否定から入らずに実際にワークショップ等に参加することを促すといった事例や、各学級担任に事業の意図、目的、趣旨を説明するといった事例もみられた。

③時間的制約やスケジュール調整における工夫

継続的に実施している学校を対象としたことから、限られた授業時間の中で巡回公演事業の時間確保が難しいことを課題とした学校はみられなかった。

また、巡回公演事業の採択時期が学校の年間スケジュールの決定よりも後になることを踏まえて、あらかじめ行事時間として想定してスケジュールや時間割に組み込んでいる例や、運動会など調整が難しい大きな行事だけを外して申し込みを行い、授業参観などのそれ以外の行事については採択後調整を行うなどの対応をしている事例もみられた。

一方で、年間計画では特段位置づけ図、採択後行事計画への組み込みの検討を開始するといった事例もみられた。

④事前の会場確認による準備の円滑化にむけた工夫

公演団体の持ち込む物品の量の把握、搬入車両の大きさの確認や、搬入口から公演場所までの距離の共有や学校側の必要な準備内容の確認、控え室について公演場所との距離を短くしたり、目張りをするなどの工夫を行った事例がみられた。

(2) 教育活動の質を向上させるために実施している工夫

①事業内容に関する事前の検討（学習方針との整合性）

教育活動の質を向上させるために、学校が掲げている教育目標や本事業に期待している役割を元に公演を選択し申請している例がみられた。

具体的には「表現・表情の表し方を伝える」ことを目的として、発表機会がもてるようなワークショップが実施可能な団体を選択している例や、「表現力や積極性を身につける」ことを目的として参加機会が得られるような公演内容の申請を行っている例、「キャリア教育」の一環として学級活動の時間に位置づけてできるだけ演目・内容が重ならないように申請している例がみられた。

また、継続して同じ団体となっている学校では、学校全体としての「自立や共生」という目標を掲げつつ、その年々の生徒の具体的な課題について学校内のアンケート等を通じて

事前に整理を行った上で、団体とも相談しながらワークショップ・本公演の内容を調整しているといった事例もみられた。

②通常授業の中でワークショップや本公演に関連した内容の実施

ワークショップや本公演に関連した内容を通常授業の中で取り上げることで、教育活動の質の向上を図る取組は、多数の学校でみられた。

具体的には、ワークショップと本公演の間があいたことから、音楽の授業の中で本公演前に復習する機会を設けたり、音楽演奏について、事前授業で楽器の内容の理解を深めるとともに作成した道具をその後の音楽の授業で利用したり、能・狂言の題目となっている実際の文章を国語の時間で事前学習し本公演での理解を促進させたり、動画資料等を用いて地域の伝統文化と関連付けて学ぶ機会を構築したり、本公演で利用する小道具を図工の時間を活用して作成したりといった事例がみられた。

また、実際の練習等の時間については朝の時間を活用したり、給食の時間に関連映像を流すなど、教科以外の時間を活用している例も見られた。

こうした通常授業との連携にあたっては、演目やワークショップの内容を踏まえて各担当教員が検討していることが多いが、実際に児童・生徒の感想をみて連携内容を切り替えた例も見られた。具体的には、中国影絵の公演を実施した学校で、教員側は影絵に利用する人形を作成する図工と、多様な体験をさせることによるキャリア教育として位置づけていたものの、参加した児童は音楽的要素を強く感じたことから音楽との連携に再調整するといったことを行った。

③ワークショップや本公演後での振り返り

学校全体として実施していない場合もみられたが、各担任等において本公演実施毎に通常授業等の中で振り返りを行う例はみられた。

また、振り返り自体を児童・生徒だけに実施するのではなく、教員側が毎年その成果について確認を行う振り返りを行っている事例もみられ、また振り返りのためにタブレットでワークショップの様子を撮影し活用している事例もみられた。

④団体との事前打ち合わせによる工夫

公演団体との事前打ち合わせにより、ワークショップの班編制について縦割り学級とするとといった事例も見られた。

また、①でも記載したとおり、学校の現状や生徒の様子・生活態度なども含めて団体と共有し、生徒たちに感動を与えてほしいといった教育目的を事前に打ち合わせ・共有している学校もみられた。

⑤継続的な実施

①でも記載したとおり、単なる芸術文化の機会提供と言うだけでは無く、巡回公演事業による効果をあらかじめ定めた上で、継続的に実施している事例が複数みられた。また、その結果として、児童・生徒や教員側でも本事業を実施することが「当たり前」となることで、その実施のハードルが下がり、前向きに取り組むことができるようになったとの指摘もみられた。

（３）巡回公演事業による効果

①直接芸術文化に触れることによる理解・関心の高まり

巡回公演事業に関する効果として、高度な文化芸術を直接鑑賞・体験すること自体による効果であり、それによる芸術文化への理解・関心の高まりを促すことができるという意見が多数みられた。例えば生の芸術に触れることでその楽しさに目覚めることができたり、実際に公演された内容のまねをするようになったり、音の一つ一つを聞き取る力がついたり、自宅で本公演の演奏内容のピアノ楽譜をさがしたりといった具体例がみられた。

特に地方部の学校においては、地域や保護者、さらには教員にとっても文化芸術の鑑賞・体験する機会は限定的となっている一方、こうした機会を学校単独で実施することの予算も含めたハードルへの高さから、巡回公演事業によって児童・生徒に高度な文化芸術に触れる機会を提供することへの期待への大きさがみられた。

②児童・生徒の情緒や生活態度に対する効果

ワークショップにおける取組等を通じて、児童・生徒の情緒・生活態度等への効果があったとする指摘もみられた。

特に、表現力や積極性の向上を目的として巡回公演事業を活用している事例では、普段の授業で見ることができなかった子供の様子が確認された例や、引っ込み事案であった児童が他の授業等でも積極的になったといった事例、相手に伝えることやその伝え方について学んで仲間作りが上手になった事例、といった具体的な効果がみられた。

その他、公演事業の内容や通常授業との連携状況により異なっているが、相手を思いやることについて公演された劇を通じて自分事として捉え始めたという生徒の感想が得られた例や、演劇を通じて自らの演技を考え直して向上させた事例なども見られた。

③児童・生徒のキャリア教育としての効果

キャリア教育の一環として巡回公演事業を扱っている事例があり、多様な演目への鑑賞・

体験や演者のキャリアパスを聞くことが、児童・生徒の将来の職業選択の多様性を広げるキャリア教育としての効果についても指摘された。

具体的には直接文化・芸術活動を行っている活動者とふれあうことで、自らがどのような活動に興味を得られるかを幅広く考えるきっかけになるとともに、活動者の職業選択の考え方や様々な体験談を聞くことで、教員だけではなく多様な生き方や考え方を児童・生徒に示すことにつながるといった意見がみられた。

④地域交流の契機

コロナ禍の中で実現が難しくなっているが、本公演等に地域住民の参加を呼びかけることによる地域交流の活性化や地域コミュニティの活性化につながるといった事例がみられた。

さらに、保護者や地域住民の参加を呼びかけることで、学校に在席する児童・生徒だけではなく、保護者や地域住民の文化芸術鑑賞の機会となっている様子もうかがえた。

⑤教員等への効果

ワークショップや本公演における団体の児童・生徒への対応方法等を見て、教員自らの表現方法や指導方法にも効果があるとの指摘もみられ、児童・生徒だけではなく、教員にも一定の意義があることが見受けられる。

具体的には、子供たちの自発性を担保しながらワークショップを実施するといった団体の子供に対する接し方などが、教員の平時の指導方法の改善につながるとの事例が見られた。

（４）巡回事業の推進や継続に当たっての課題や要望

①申請・手続きに関する課題や要望

令和５年度事業の手続きから、非常に簡素化されていることは一定の評価がなされている一方で、これまではジャンル×団体の２軸で希望団体を申請していたものがジャンルのみの申請となったことによって、意中の団体への申請ができないことへの不安もみられた。また、これまでは団体に必要な控え室の情報なども確認しながら申請していたものが不要となったことも一定の評価がなされている一方で、実際に採択され団体が確定した段階で、学校設備の問題で受入れができなくなる可能性を危惧する声もみられた。

その他、空き日程について１日単位で記述することの煩雑さ、公募期間のスケジュールがタイトであることがハードルとなっているのではないかと指摘、不明点がある場合に確認できるような窓口が明確になっていることが望ましいとの指摘も見られた。

他方、過去の入力内容を引き継ぐことができるなどで入力を簡易にする申請システムの

整備や、巡回公演事業の内容やその実施状況等が具体的にわかるような資料や映像を PR していくことや、事業の推進や継続、さらには事業の拡大に必要との意見もよせられた。

②会場確保に伴う課題や要望

特別支援教室の増加などにより空き教室が減少しており、控え室の確保が難しいとしている学校があり、その場合、例えばオーケストラなど控え室を必要とする団体を要請することが難しいとの指摘がみられた。

③スケジュール調整における課題や要望

巡回公演事業の採択確定については、あらかじめ事業採択を盛り込んで年間計画を調整している団体がおおいことから、大きな問題は指摘されなかったが、具体的な実施時期の調整について、遅くとも夏休み中に調整が完了させておくことが必要であるとの指摘はみられた。

④プログラムの充実や内容紹介の充実

プログラムについては、生徒数が多い学校で暗幕等が用意できないなどの学校設備の状況によって、選択肢が少ないと行った事例や、小規模校向けのプログラムが少ないとの指摘もみられた。

第5章 まとめ

①実施状況

学校向けアンケート調査結果によると、令和3年度時点の学校における文化芸術鑑賞・体験機会の享受状況について、中学校で29.6%（約96万人）、小学校で39.0%（約243万人）という試算となった。令和2年度の試算が中学校で20.0%（約64万人）、小学校で26.9%（約170万人）であったことから大幅な増加傾向がみられる。令和元年度は中学校35.3%（約114万人）、小学校33.6%（約214万人）であり、小学校の水準は令和元年度と同等以上の基準となり、中学校も回復傾向となっている。

②文化芸術がもたらす効果

学校向けアンケートをみると、文化芸術活動を通して得られる効果としては、「文化芸術への親しみが醸成される（87.0%）」、「より豊かな創造性や感性が育まれる（83.0%）」、「芸術科目への理解が深まる（58.1%）」の割合が高く、学校現場には効果の実感が強くあることが確認できた。今後について、文化芸術活動の実施・継続意向を尋ねたところ、「実施・継続したい」という回答は72.9%となり、令和2年度（50.8%）から大幅に高まっている。

今年より巡回公演事業を実施した学校に対して、児童・生徒向けのアンケート調査を実施したところ、「文化芸術を見たり、聞いたりすることは楽しかった」と回答した児童・生徒の割合は高い。既に習い事に従事している、あるいは芸術科目に関心がある児童・生徒はその傾向が大きかった。また、今回の鑑賞・体験をきっかけに芸術文化活動を親しむことや、習い事や自ら実践する割合も一定程度見られる。加えて、自由回答を見ると将来の文化芸術に関わる仕事に従事したいというコメントも見られ、文化芸術への親しみが高まり、文化芸術の鑑賞者として、ひいては担い手として期待されるところである。

③効果を高めるための工夫

学校向けアンケートから、文化芸術による効果を得るために学校現場で取り組まれる工夫をみると、文化芸術事業のカリキュラムへの位置づけを行っている学校は24.9%となり、令和2年度（24.5%）と同等程度であった。また、ICTの活用が57.1%などとなり、令和2年度（25.8%）に比べて非常に高まった。

また、ヒアリング調査によると、管理職等が協力するなど人的制約に対する工夫や、巡回公演事業を受け入れるための時間的制約に対する工夫など運営上の工夫がなされているほか、学習効果が高まるように学習目標にあわせた内容に対する申込をしたり、個別教科との連携であったり、ワークショップ・本公演後における振り返りを行うなどの取組がなされている。このほか、新型コロナウイルス感染症への対策として、消毒・パーティションの設置に加えて、少人数形式での開催など、工夫を凝らしていることが確認できた。

④調査の全体像について

これらの調査結果について全体を整理（図表 5-1）したところ、「文化芸術による子供育成推進事業」で提供しているような「質が高い文化芸術活動」は、芸術文化に対して中立的であった（関心が無かった）子供たちに対して関心を高め、学校外などでも文化芸術を楽しんでもらい、文化芸術に携わるという流れが生まれつつある。また、芸術文化に携わることで、さらに芸術教科の関心や芸術文化を楽しむ割合も高く、ポジティブな循環が生まれていると思われる。

学校にとって、質が高い文化芸術活動を児童・生徒に提供する手段のひとつが「文化芸術による子供育成推進事業」であり、学校の自主的な取組のほか、自治体の事業を活用する方法もある。

また、質が高い文化芸術活動を抑制する要因として、新型コロナウイルス感染症の影響や学校側のコスト・人員・時間上での制約が考えられる。新型コロナウイルス感染症については学校側も令和2年度に比べて、対応に慣れがみられてきたところがうかがわれる。他方で、人員・時間の対応については「文化芸術による子供育成推進事業」を実施している学校においてはノウハウが蓄積されていると見受けられるが、必ずしも全国の学校に認識されているとは限らないところである。

最後に、「質が高い文化芸術活動」を高めていく上で、学校や国（文化庁）によるところもあるが、学校向けアンケート調査でも見られるとおり、自治体や民間団体も重要な役割を担っており、さらには家庭の協力も必要であり、これらの主体は重要な役割を担う可能性がある。しかし、これらの点については、本調査では十分に状況把握を行っていないため、将来的な調査の課題としたい。

図表 5-1 調査の全体像

